

菅江真澄資料センター

真 澄 研 究

20号

『牡鹿の嶋風』の「阿久呂王」……………	新 野 直 吉	1
講演記録		
菅江真澄研究の戦後——内田武志の軌跡Ⅲ……………	石 井 正 己	5
「筆の山口」の世界——当時の文芸事情と真澄の立ち位置 ……………	細 川 純 子	25
内田武志における丹羽嘉言論の形成—真澄若年期の名乗の解明過程— ……………	松 山 修	39
附 註解・丹羽嘉言著『江山清楽』……………		77
影印・『江山清楽』（部分）……………		100
影印・丹羽嘉言著『謝庵遺稿』……………		105

平成28年3月

秋田県立博物館

『牡鹿の嶋風』の「阿久呂王」

新野直吉

初めに

平成二十七年年度の館話で、結びの十一月十三日（金）の回を、菅江真澄の「遊覧記」に関わることに当てた。それを文章化して報告する。

一 嶋風などの記述

平成二十年の館話でも、十一月十四日に『牡鹿の嶋風』に関して述べるところで、「阿久呂王が投石」の記述について、「陸奥の阿弓流為に発する悪路王伝説である」と報告文に述べている（『真澄研究』13号）のであるが、元来日本古代の歴史を研究して来たこの身は、昭和四十八年（一九七三）二月『菅江真澄全集』第四巻の月報に、上司今村義孝教授から一文を書くことを命ぜられながら、「菅江真澄について私は知らなすぎる」と正直に嘆じていた自分が、予期もしなかった秋田県立博物館に縁をもって、前年「菅江真澄資料センター」という世に唯一の施設を開いた機関に密接する立場になつて、とても「研究者」といえる程の知識は備え得なかつ

たものの、「真澄知得者」ぐらいいはなつた平成十二年（二〇〇〇）段階で、「霧幡山の阿久呂王の投石、鬼の取上石の記述も目に止まるところである。阿久呂（悪路）王は、奈良朝末から平安初期に活躍した胆沢の蝦夷の統帥阿弓流為が説話化したものと考えられているからである。極めて乏しい史料の分析を踏まえて阿弓流為を古代東北史上に位置づけ、平成六年十一月に京都の名刹清水寺に『北天の雄』の碑が建立されることに、或いはいささかの働きかけが出来たのかもしれないと思つているこの身にとっては、ここに阿久路王のことが記述されているとは予想もしなかつた」（『優しく厳しく』・カッパンプラン文庫・平成十三年一月十日）と記しているの、早くから心に受け止めていたことであるともいえる。

この石の件を真澄は「あやしもの話（語）なり」と記していたわけであるが、この文化七年（一八一〇）の記述より四分ノ一世紀も遡る天明五年（一七八五）の『小野のふるさと』にも、よく知られている小野小町説話に関する量のある叙述

のほかに、四月二十三日条に「ざいもくになふたる翁」の話として、「松岡(湯沢市)のきりはた山は、むかし、あくる(悪路)王といふ鬼すみてけり。そが妻なりける、たてゑぼしとて鈴鹿山のおくにありながら、夜なく通ひ来りしといふは鬼のじち(術)ならん。こはみな田村としひと(利仁)の大人にきられ、ほろぼし給ふ」などと語られて別れたと記していた。

この霧幡山についてのところには特に投石のことは無いようであるが、『菅江真澄全集』の編者は、『牡鹿の嶋風』のところで「註(7)」を附して『小野のふるさと』の言及を取りあげている。そして『小野のふるさと』の方には特に「きりはた山」にも「あくる(悪路)王」にも註などはない。天明の際は秋田は北上の経路にすぎなかったから、世に広く知られていた小町説話には関心もあったが、未だ陸奥の方の旅もしていない段階のこととて悪路王のことには、真澄自身も関心がなかったということで、編集上の註も行わなかったのであろうか。しかし文化の段階は「親秋田(久保田藩領)」に徹した真澄自身が、男鹿紀行で雄勝の説話を想起記入したことに注目、この註を施したのであるうか。などと私考しつつ、文を綴っている訳である。

全集では註はないが、「東洋文庫」54の『菅江真澄遊覧記』1の編著者は、当該の箇所に「注七六」を設け、「きりはた

山 湯沢市松岡の切畑部落の大黒森山(六四二メートル)のこと。坂上田村麿や利仁将軍などの勇者があくる王という鬼を退治した伝説は、古くから陸奥にあり、ここにも語られていた。それが陸奥浄瑠璃の〈三代田村〉や、お伽草子の〈立烏帽子〉にあるように、近江の鈴鹿山にいた魔女立烏帽子の説話とからんで語られたのである」と述べている。

ここでは、この「注」で古くから陸奥にあったという説話の、背後にあり、基礎にもなっている、史実の「阿弓流為」なる人物にかかわって、真澄の引用についても関係するところを明らかにしようというものである。

遊覧記に「阿久呂王」「あくる王」と表記されている、有名な伝説上の存在は、実在の「阿弓流為」(『続日本紀』・「阿弓利為」(『日本後紀』)として六国史に明記される実在の人物なのである。

二 史上の阿弓流為

阿弓流為は、往時の伝説的説話に位置を占めただけでなく、現時においても小説など文学的世界でも人気がある。平成十一年(一九九九)高橋克彦『火怨―北の耀星アテルイ』(講談社)を初めとして、平成二十一年(二〇〇九)及川洵『阿弓流為』(文芸社)、翌年の木内宏『毘沙門叩き』(朝日クリエ)、

平成二十五年（二〇一三）斉東野人『阿弓流為別伝 残照はるかに』（海象社）などが直ぐ思いつく。そもそも「悪路王の首」が伝来し、鹿嶋市の鹿島神社には、「悪路王の首」なる木彫があり、同じ茨城県の高久に鎮座の鹿島神社には、それより古い「悪路王の首」なるものがあつて、坂上田村麻呂が達谷窟で悪路王を誅し、ミイラを納めたものが模型とされたという彫刻が伝わる。昭和の時代にも「われ現代の阿弓流為たらん」と宣言したという河北新報社長の一力一夫氏が、社長室に首の木彫を飾っていたと聞いた。

ただ史伝では、田村麻呂將軍は阿弓流為を殺したりはしていない。実際に史書が伝える阿弓流為は、私が平成六年（一九九四）に『田村麻呂と阿弓流為―古代国家と東北―』（吉川弘文館）に書いたように、田村麻呂に伴われて母礼と共に上洛したのであつて、田村麻呂が彼を殺したり、斬ったりはしたのではない。

この本は出版社に求められて書いたものであるが、折悪しく学長勤務中であつたが大著を書く企画ではなかつたので、応諾したものである。たまたま岩手県人会の「関西胆江同郷会」の熱意に発し、阿弓流為・母礼の顕彰碑が京都の清水寺に建立される運動が展開されている時であつたが、私自身はその動きは知らなかつた。執筆時間にも恵まれぬ中で執筆を

受諾したのは、昭和五十三年（一九七八）にある出来事があり、そのことと学問的に接続する補完をすることが出来るであろうと考えたからであつた。十六年前の出来事とは、『古代東北史の人々』（吉川弘文館）の刊行にからまることである。

出版から二カ月余の頃に、韓国通の井上秀雄東北大学教授を中心にした「古碑文」の研究に訪韓した。関晃東北大学教授とも現地合流し、同国に出張滞在中だつた九州大学教授の西谷正氏の協力も得たりして、一カ月余の在韓研究だつた。発見の楽しさも多い充実した研究から帰つたが、留守居役だつた家内には心安まらない日々であつた。帰宅するや「大変よ」と、長期留守のため開封確認をした無署名郵便に、田舎者・蝦夷の子孫・朝敵などという罵詈雑言の連ねられた、新著書の著述者への非難攻撃が記されていたことを告げるのであつた。

この書には、「第六章 坂上田村麻呂と大墓阿弓流為」なる部分があつて、延暦七年（七八八）征東大使紀古佐美の軍が阿弓流為の在地勢に大敗したことを『続日本紀』によつて述べ、延暦二十一年（八〇二）田村麻呂による胆沢城築営が始まると、四カ月にして阿弓流為と母礼が五〇〇余の兵力を従えて降伏し、七月十日に田村麻呂に従つて入京することを書いた。

田村麻呂は二人の処遇について、故郷に帰し、他の叛徒も安心して投降してくるようすべくだと進言したのに、公卿僉議は「虎を養つて患を遺す」などとして、河内国で斬刑にしてしまう。私は田村麻呂の理解ある意見を無視した公卿僉議の度量の狭さを批判する趣旨の文章も書いた。

文字からして若い筆者の郵便は関西の局の消印であつたら東北差別の心情も発信の動機にあつたのであろう。

公卿僉議の狭量批判の考え方は昭和四十四年（一九六九）に『古代東北の開拓』（塙書房）を書いた際からのものであつた。勿論『古代東北史の人々』を読んで、後に工業大学教授になられる科学技術者の方が、「東北人として誇りと勇氣が湧いた」という便を下さつたような評もあつたのであるが、『類聚国史』に伝わる『日本後紀』の叙述を私はそのように解し著述しているのである。

結 真澄の立場

真澄は「あやしもの話（語）」と評しながら男鹿文化に関して「阿久呂王」を取り上げているのであるが、この話は「舞台嶋」といふあり、これや武帝嶋ならん」と解し、「武帝の靈魂あまくだりまししところは、こゝをはじめといふ」という、品位の高い説話と共に扱われているのである。現地を直

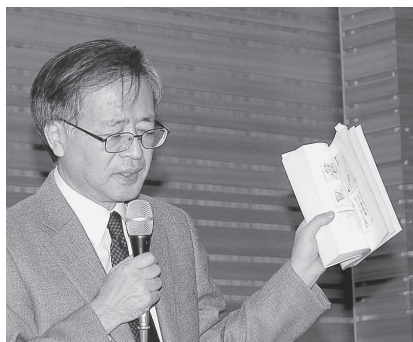
接観ることを旨としている真澄の遊覧記ではあるが、男鹿ほど何度も訪ねて「風」を記録している例は一通りの関心やこだわりで生まれるものではないと受け止められる。しかも嶋風」については「島風とは、島の風俗をこそいふなれ」と明言している。風景などの外観だけで五風を編んでいるのではない。『牡鹿の寒かぜ』では「漢武帝をまつり、また蘇武が屍を埋みしといふ処あり」と書き、「渤海の人、鐵利のくにうどなど、なべて一千百余のもろこしの人、あが帝のあまねきみうつくしみを慕ひ來けるを、出羽国におけり。かれに衣糧をたまひて、その国に還したまふとなむ」と漢と渤海とを結びつける考察までしている。

彼が若き日蝦夷島北海道島を目指した行動といい、ロシアに対する関心といい、海外、外国文化に対する強い希求があつたものと受け止められる。そこには佐藤信淵などが北方アジア大陸にいだいていた関心と通ずるものがあつたのかもしれない。鎖国日本の民として国禁を犯すなどということはしなくても、海外に及ぶ風俗文化に対する真澄の心情を、「男鹿五風」から伺うことが出来ると考える。

（秋田県立博物館名誉館長）

菅江真澄研究の戦後——内田武志の軌跡Ⅲ

東京学芸大学教授 石井 正 己



風景講演

一 真澄遊覧記の記憶遺産登録と内田武志の方言研究

昨年は国民文化祭がありまして、真澄の自筆本が展示され、二百年前の色を目の当たりにすることができました。その内容は、『特別展 菅江真澄、旅のまなざし』の図録に残されました。私の講演は「真澄のまなざしを考える」という題で、図録に掲載した原稿と同じ題になりましたが、原稿とは異なる

点が多いので、その記録を『真澄研究』に残していただきました。

その時、ちょうどよい機会であると考えて、最後にお話した提案がありました。まったく調整ができていないので、唐突で大胆な提案だったかもしれませんが。それは、真澄が遺したこの貴重な遺産を秋田や日本にとどめるのではなく、ユネスコの記憶遺産登録をめざしてはどうかということでした。それによって、研究の一つの目標になり、菅江真澄による町づくりの大きな財産になるのではないかと考えたわけです。

世界遺産には自然遺産や文化遺産があり、富士山は自然遺産から文化遺産に変更して登録されたことが話題になりました。それとは別に記憶遺産があり、昨日のテレビでも、二つの記憶遺産が登録されたことが報道されました。一つは京都府の「舞鶴への帰還」で、舞鶴には多くの人が大陸から引き揚げてきましたが、そうした関係から残されたシベリア抑留資料です。もう一つは京都府の「東寺百合文書」で、東寺に

古代から近世まで伝来した文書です。

実は、今年は戦後七十年ということで、この夏に舞鶴に行く機会がありました。引き揚げの問題を改めて考えてみたいと思い、臨時の舞鶴引揚記念館を見学してきました。舞鶴では記憶遺産登録をめざして、記念館の改修など、着々と準備を進めていました。そうした準備の甲斐があつて、戦後七十年の記念すべき年の登録となりました。

真澄遊覧記は、九州の炭坑の様子を描いた「山本作兵衛による筑豊炭坑の記録画」と比べても見劣りするものではなく、むしろそれよりもはるかに古いものです。これを地元にとどめておく手はないだろうと考えているのです。若い人たちになかなか真澄への関心が起こらないのは私たちが抱える大きな課題で、登録によって真澄の価値を知らせたいと思っています。るわけです。

世界遺産効果というものは非常に大きいので、真澄遊覧記が記憶遺産になれば、普及を進める大きな刺激になり、次の世代に働きかけるインパクトになるだろうという、したたかな目論見があるわけです。もちろん個人の所蔵が大半ですから、調整の負担は大きいのですが、決してできないことではないでしょう。そうしたことに向かう気運から、いろいろな取り組みも派生してくると思います。昨年はそんなお話をし

て結びました。

溯って、一昨年とその前年は内田武志のお話をしました。この二回は秋田ではなく、内田武志の静岡時代のことを主に扱いました。鹿角出身の内田は、鹿角の方言や昔話をまとめ、そして静岡に暮らしたことから、静岡の方言や星座の方言を研究しました。戦前の、昔話や方言が新しい研究課題になった時代の雰囲気を受けて、彼の人生の前半は方言研究に熱中したのです。

そして、人生の後半、戦後になつてからは真澄研究に移りますから、きれいに前後が分かれます。前半から後半へつながっているのか、つながっていないのか、その点が問題になります。特に昭和十一年頃からは血友病が悪化し、歩くこともできなくなりました。歩くこともできない研究者が、逆にそうであるがゆえに、東北・北海道を隈無く歩いた菅真澄を研究するというのは、偶然ではなかったはず。その胸中に、真澄に寄せた夢があつたことは間違いないと思います。不自由な体を駆使して、どうやって『菅真澄全集』が生まれたのか。私たちは今、内田が作った全集に信頼を寄せて読むことができ、そして町づくりを活用することができるようになりました。そのようなすばらしいテキストが生まれるまでの苦労は、やはり振り返ってみる価値があると思います。

そして、何よりも、その達成とともに限界をつかまえておく必要があるのではないかと思っているわけです。

静岡時代の方言研究の中でも、『静岡県方言誌』の全三冊は偉業でした。歩いて調べることができませんので、学校の児童や生徒・先生に方言調査用紙を配って、アンケート調査を行いました。集まった方言資料を整理して、それを分布地図に落としていったのです。伊豆・駿河・遠江にわたる静岡県の分布地図を作るといふ細かな作業を重ねながら、静岡県の方言を明らかにしました。

なぜ静岡県の方言が重要かというと、静岡県は東日本と西日本の東西の分岐点だからです。東日本の方言と西日本の方言の境界がどうなっているのかを地図によって明らかにしようとしたというのは、方言研究にとって非常に意義のあることでした。多くの人の協力を得て実現できたのですが、その集中力は驚嘆に値します。

しかし、内田は自分で歩いて調べることができませんので、その研究方法に限界を感じたようです。そして、体調が悪くなり東京へ移住してきましたが、太平洋戦争が激化しくなり、東京にいたのが難しくなりました。昭和二十年三月十日が東京大空襲でしたが、その後はさらに空襲がひどくなりました。故郷の鹿角に疎開することになりますが、それが真澄研究へ

の道を拓くことになったのです。

二 『真澄遊覧記総索引・歳時篇』の意図

今から五年前の平成二十二年、内田武志の没後三十年を記念して、菅江真澄資料センターで「内田武志の真澄研究」の企画コーナー展が開かれました。その時のパンフレットは、今回お話しするときの基礎材料となっています。ちょうど『秋田叢書』の写真と併せて、こんな解説が出ていますので、今日はそれを入口にしてみます。

昭和二十年五月に鹿角に疎開するとき、内田武志は仰臥したままで汽車に乗りました。汽車に乘せられて、歩くこともできないままに疎開してきたのです。その時に渋沢敬三が、「秋田に行くのであれば、菅江真澄を研究するように」と勧めました。渋沢は、先に述べた方言資料の刊行を助けた人物です。渋沢栄一の孫で、実業家であり、その当時は日本銀行の総裁、戦後は大蔵大臣などの要職を務めています。

一方で、渋沢はアチック・ミューゼウムという屋根裏の博物館を自宅に作り、数々の民具を収集し、民俗学の欠けているところを補い、自由な学問をさせました。その中から、宮本常一はじめ、実に多くの優秀な人々が出たことは御存知のとおりです。その渋沢が、「秋田に行くのであれば、菅江真

澄を研究するように」という一言を言い添えたのです。その時に手にしていたのは、柳田国男が昭和十七年に発行した創元選書の『菅江真澄』一冊だけだったというエピソードも有名です。

内田一家は、お母さんのサトさんの伯母さんである毛馬内（鹿角市）の高橋家に仮住まいをします。内田が鹿角に戻っていることを知った当時の毛馬内町長・伊藤良三が、『鹿角方言集』の著者である彼を訪ねて、菅江真澄研究の意志を聞き、『秋田叢書』十二巻と『秋田叢書別集 菅江真澄集』六巻を贈ったと言います。どちらも、昭和の初めに次々に発行されたシリーズでした。

それを手にして、内田武志は本格的な真澄研究をすることができたわけです。伊藤良三については、『秋田人名大事典』に次のような説明があります。早くは秋田県・青森県・宮城県で教職に携わり、その後、毛馬内町長・十和田町長などを歴任し、行政に関わってゆきます。そして、辞任後は、郷土史研究者として郷土資料の収集と編述に力を注いだということが記されています。

ですから、渋沢敬三・伊藤良三という二人の支えがあったて、内田武志はすつと菅江真澄研究に入っていくことができたのです。この時、内田武志は数え三十七歳、血友病をかか

えながらも、もう中年になりました。結局、亡くなったのは七十二歳ですから、彼は人生の半分で、真澄研究に折り返したことになります。

人生の折り返し地点から、この秋田での真澄研究がほぼしるやうに始まっていくわけです。パンフレットには、真澄の地誌などが載る八巻だけ『秋田叢書』の写真が載っていますが、これは全集などに使われたものでしょう。今のようコピーがあるわけではありませんから、いろいろな形で活用したはずですよ。今、センターの内田文庫の中で、それらを見ることが出来ます。

彼が戦後残した資料の初めの一步は『真澄遊覧記総索引 歳時篇』で、二百部が謄写版で印刷された和綴じの本です。発行は昭和二十一年五月ですから、疎開してきてからたった一年でこの一冊ができたこととなります。『歳時篇』とありますように、「正月準備」から「十二月二十八日」までの年中行事を真澄遊覧記から抜き出して並べています。これで、それぞれの日の行事がどうなっているかがわかります。

実は、このヒントになったのは柳田国男だと思います。昭和十七年の『菅江真澄』ではなく、昭和三年、真澄の百年忌に当たる年に、『雪国の春』という本を出しています。この本の書き下ろしに「真澄遊覧記を読む」があり、これは、真

澄遊覧記の中から正月記事を抜き出して比較しています。『雪国の春』の書名にふさわしく、かつての正月行事を百年前の真澄遊覧記から明らかにしようとしたものです。

柳田国男は正月だけでしたが、内田武志はこれを一年間に広げてみようと考えて、真澄遊覧記から抜き出して並べ直したのです。末尾の「歳時篇索引」は「語彙」「地名表」「書名表」に分かれています。「語彙」は方言や民俗語彙を五十音順で整理したものです。「地名表」は長野から北海道の順で、ほぼ菅江真澄が歩いた土地に沿って並んでいます。「書名表」は『伊寧の中路』から『月の出羽路』『ひなの一曲』までを並べていて、日記や地誌の年代順です。ですから、「語彙」「地名表」「書名表」は「索引」であるだけでなく、真澄の経歴や著書の整理と一体化していることがわかります。

たった一年でこれだけの整理ができたということは、やはり驚きです。「あとがき」は、「これら真澄の全著書のうちには、多数の貴重なる民俗資料が収載されてゐるが、現在刊行されてゐるものだけでも相当に浩瀚であり、そのうちから、随時、必要に応じて資料を抽出することは、なかなか難事である。よつてこゝに、事項別による総索引を作製することゝした」と始まります。

ここに「貴重なる民俗資料が収載されてゐる」とあるのは、

やはり民俗学の先駆者として菅江真澄を考えると、柳田国男の影響を受けていると思います。そして、「まづ年中行事に関する資料をとりまとめて、第一輯 歳時篇を編んだ」というのです。「第一輯」とありますから、第二輯、第三輯と、それ以降も構想していたはずですが、残念ながら歳時篇だけしか出なかったことになります。

しかし、戦後になりますと、伊藤良三から譲り受けた『秋田叢書』『秋田叢書別集』は、秋田の人々でも手にすることが難しくなっていましたので、本文を載せないとわかりません。でも、「企画する処はあくまで真澄遊覧記の索引作製であつて、引載の真澄本文はむしろ従ともみたいのである」と言っています。索引に対する異様なまでの関心は、戦前の方言研究から連続しているはずで、鹿角や静岡の方言を集めて整理した手法が、真澄研究の当初の方法に色濃く反映しています。彼が集めたかったのは民俗語彙や方言だったことに、改めて気がつきます。

ですから、「歳時に関する語彙を挙げたのは勿論であるが、なほ、本文に現れた方言や注目すべき語等も共に整理しておいた」とあります。歳時に関する語彙だけではなく、「方言や注目すべき語」にも関心を注いでいることが、ここによく出ています。「行事に関係ある重要な語句には、傍線をほど

こした。また、注目すべき方言には、傍点を附した」とあります。そこから索引が作られたのです。

三 年譜の修正と「菅江真澄研究会の趣旨」による組織化

内田武志は一年間その作業をする中で、はっと気がついたことがあります。「あとがき」に、「柳田国男先生著『菅江真澄』に拠つたが、自分の考察によりその年次を訂正して排列したものもある」としているところです。ただ柳田に学ぶだけではなく、それを修正しなくてはいけないと考えたのです。一つは『霞む駒形』で、柳田は天明八年としましたが、天明七年が正しいとします。これは後に天明六年に訂正されました。もう一つは『栖家の山』で、柳田は寛政十二年としましたが、寛政八年であると修正します。柳田の遺産をそのまま受け継ぐだけではなく、改めるべきところは改めています。おもしろいのは、「あとがき」の末尾で、「『秋田風俗問状答』との比較」を行つている箇所です。屋代弘賢が全国の人々に風俗を尋ねた「問状」を出します。秋田では那珂通博がそれに答えたのが『秋田風俗問状答』ですが、それと真澄遊覧記の年中行事を比較するのです。これは優れた視点です。

明徳館に勤めていた那珂通博と菅江真澄は、奈良家で初めて会っています。そして、太平山の山麓をめぐる勝手神社

に詣でたり、非常に仲が良かった。だから、その答書を作成するに当たつて真澄に相談したかどうか、それを考えています。非常に親しかった二人が互いに語り合わないはずはないと想像したのです。ところが、比べてみると、『秋田風俗問状答』と真澄遊覧記の年中行事との間には、「余り、その類似が認められない」という結論に達します。

しかし、那珂通博はすでに真澄遊覧記を見ていたのだろうが、資料として使つていないと考えるのです。仲の良い真澄の力を借りなかつた点について、「那珂翁は得意の画筆をふるつて、他郷人真澄に、久保田の風俗を紹介せんとしたのかもしれぬ」と推定するのです。しかし、真澄に紹介することと、屋代弘賢に答えることの間には、やはりすいぶん距離があります。そして、この答書の内容もしくは複本を真澄が閲覧する折があり、雄勝にいた頃ならば送本されたのかもしれないと結んでいます。それでも、真澄遊覧記の年中行事に注目し、「語彙」「地名」「書名」をまとめた上で、『秋田風俗問状答』と比較するところまで行つたのは、たいへんにすごいことです。

この『真澄遊覧記総索引歳時篇』の巻末には、一枚の刷り込みが入っています。それは「菅江真澄研究会の趣旨」で、この出版に合わせて、研究会を組織するのです。その時に、

三つの事業をしたいと述べています。

まず「第一 年譜の作製」。真澄は御存知のように出生地や家系などがよくわかっていません。さらに秋田に来る前、それよりも信濃に入る前の、真澄遊覧記以前の足跡もよくわかっていません。地誌を取り調べる役を受けますけれども、仙北郡角館で没するまでの行動もよくわかっていません。そこで、しっかりと年譜を作りたいと考えたのです。

そのためには、「年次不明のものがあつて、未発見の書や未発表の書もあつて、いまだ明らかでない点が少なくないのであります。これからそれら資料を綜合勘案して、できるだけ詳細に正確な年譜を作製しようとするのであります」と述べます。柳田国男がやったよりも遥かにレベルの高い年譜を作るには、新資料の発掘が不可欠だと考えました。

そして、「第二 未刊本の発行」。『秋田叢書』本編には地誌を入れ、『秋田叢書別集 菅江真澄集』には秋田を越える日記を入れています。この大きな仕事をしたのは深沢多市でしたが、刊行の途中で亡くなつてしまっています。「同氏の逝去によりその続刊の望みを失つたのは洵に遺憾と申さねばなりません。その後現在までに、新たに所在の判明した書が数冊あり、それは、『水の面影』『河の源』『久保田の落穂』などで、特に『花の出羽路』及び『月の出羽路』河辺郡の草稿の発見

されたことは、恐らく真澄はこの附近の地誌執筆に着手しかつたであらうとする従来推測を、全く変更すべき新事実でありました」とします。

しかし、「学問上からみて、か程まで価値高きものにもかゝらずそれらは、秋田叢書に収載されなかつた随筆の類十数冊とともに、今なほ研究者の披見をゆるさず徒らに珍藏されてゐる現状であります」と述べます。これはやや皮肉めいた物言いですけれども、大館の栗盛教育団が念頭にあります。現在は大館市立中央図書館の所蔵になりました。この時は学者に見せてくれず、いたずらに珍藏されていると辛辣な書き方をしています。頼んでも資料を見せてくれなかつたことが続いていったものと想像されます。

最後に、「第三 真澄遊覧記の索引」。やはり、「随時必要に応じて民俗資料を摘出することなか／＼容易であります。このため夙に、事項別による索引の作製が待望せられてゐたのであります」とあります。内田の関心は、先ほどの「あとがき」にあつたように、「民俗資料」を真澄遊覧記から手に入れるために「索引」が必要だという考えです。そこで「本会の仕事として、まづこれに着手し、真澄遊覧記の中から、年中行事に関する記事を編綴して、本会の第一輯を発行することになりました」とします。これが民俗学の影響、方言研

究からの流れであることは明白でしょう。今から考えれば窮屈にも思えますが、真澄遊覧記を「民俗資料」として使いたいというのは、民俗学への貢献に行き着くように思います。

この『真澄遊覧記総索引 歳時篇』は二百部限定謄写版で作られ、菅江真澄研究会の賛助員には、東京の柳田国男・渋沢敬三、そして秋田では栗田茂治・奈良環之助・武藤鉄城・豊沢武の四名の名前が挙がっています。郷土研究、民俗学、図書館学、そういった研究に関わった人たちを賛助員にしながら、これを出したのです。

ただし、この菅江真澄研究会というのは、内田武志の自宅に置かれた研究会ですので、どの程度の規模があったのか、そこまでは不明です。むしろ、非常に個人的なつながりをなかなか抜け出られなかったのではないかと感じます。でも、研究会を組織しながら、力強く真澄研究に歩み始めたという点で、疎開後の動き方がわかります。

秋田県立博物館では、平成十一年にこの復刻版を出していて、このほうがずっと読みやすくなっています。これが便利なのは、『秋田叢書』だけでなく、『菅江真澄全集』のどこにその本文が載っているかを対照できるようにしていることがあります。ですから、謄写版がなくても、これがあれば、私たちは内田武志の足跡を辿り、その成果を現代に生かすこと

ができるはずです。

四 『秋田の山水』と『菅江真澄の日記』のセット

謄写版の『真澄遊覧記総索引 歳時篇』の後、昭和二十三年から昭和二十四年にかけて、内田は三冊の本を出しています。昭和二十三年は大事な年でした。昭和三年が菅江真澄の百年忌で、柳田国男の提唱で墓前祭や講演会が行われました。そこから考えると、昭和二十三年は、百二十年忌に当たる節目の年だったわけです。昭和三年から見ても、二十年目の折り目を付けていく年でした。従って、百二十年忌の記念事業として、この三冊が出ていることを、まず考えてみる必要があります。

最初は昭和二十三年発行の二冊の小冊子『秋田の山水—真澄遊覧記抄—』と『菅江真澄の日記—秋田の山水について—』で、秋田野菊会本部が発行者となっています。住所は秋田県仙北郡横堀村、今の大仙市です。残念ながら、秋田野菊会というのがどういう組織なのか、私にはつかめていません。是非教えていただきたいのですが、ここから二冊の本が出ます。まず七月に『秋田の山水』は、まさしく秋田の山と水、つまり秋田の景色を書き描いた「真澄遊覧記」から、「抄」とあるように抜き書きをしたものです。「一、秋田のかり寝」

から「一五、水の面影」までを入れています。そのあとに「菅江眞澄翁 緒言」「同略歴」が載っています。

この本の意図は、「菅江眞澄翁」にありますように、「眞澄遊覧記の、なによりも価値ある点は、当時の民俗が豊富に書きあらわされていることである。約百五十年前のわれわれの先祖の生活のさまが、明らかに述べられている点である」とあります。「民俗」や「先祖の生活」とあるのは、やはり民俗学の影響です。

そして、読みやすい表記に改めたことに触れ、「なお、頭註欄には、方言とも云うべき民俗語を掲出しておいたが、これも通読の利便を思つてのことであつた」とします。ですから、本文の上に「方言」「民俗語」を引き出して、それで引けるようにしていることになります。これも索引の方法に準ずる配慮と考えられます。

そういう中で気になったのは、『秋田叢書』には載っていない「未刊行本が数十冊残されている」が、その中からも秋田県に関係あるものを採り、その一つに能代の安濃^{あんの}家が持つ『水の面影』があるとしています。先般、寺内の方々が現代語訳をされて、私たちも親しく接することができるようになりましたが、それを載せました。『秋田叢書』『秋田叢書別集』に寄りがかるだけでなく、未刊行の資料を入れながら編んだの

です。文末には、「菅江眞澄研究会 内田武志編」と入っています。

ところが、単なる眞澄遊覧記の抄録ではわかりにくいというところが指摘されたようです。それで、その年の八月、あまり間をおかずに、『菅江眞澄の日記』という概説・解題の書が出ます。これは「まえがき」の後に、「秋田のかり寝」から「水の面影」まで、それぞれの概説と解題を書いています。

その「まえがき」では、『秋田の山水』について、「あえて名文のところを採つたのではなく、前代の、われ／＼の祖たちの生活をうかがい知ることのできる点におもきをおいた。註解を附する余裕もなかつたが、上欄に民俗語を掲出するなど、読みやすいような措置はしたつもりでも、眞澄遊覧記の本文を前後の説明もなく記載したゞけでは、わかりにくいひとが多かるうと云う批判も、まことにものごとである」とし、すぐ追いかけるようにして、『菅江眞澄の日記』という概説・解題を出したのです。本当ならば一冊にまとまっている方がよかつたのですが、なかなかそうはいかなかつたのでしょうか。

さらに「自分はなお進んで『眞澄遊覧記解題』を編さん中であることを一言附け加わえておく次第である」と結びます。これは、後に述べる昭和二十八年の『菅江眞澄未刊文献集

一』の「年譜及び著書解題を主とした真澄伝の研究」につながるはず。やはり「菅江真澄研究会 内田武志」とあり、研究会を頭に付けています。

この二冊は表紙に工夫があつて、『秋田の山水』にも『菅江真澄の日記』にも図絵が載っています。全集と比べてみると、『秋田の山水』の表紙にある雪景色は全集第一二巻〔16〕『錦木雑葉集』（10）で、これは秋田ではなく、津軽の風景です。そして、『菅江真澄の日記』の表紙にある海岸の風景は全集第一二巻〔14〕『錦木雑葉集』（40）で、これも秋田ではなく、津軽半島の海岸風景らしいものです。後に出る『菅江真澄未刊文献集』にある『錦木』の解説でも、ほとんどの図絵が津軽関係だと言っていますので、これを秋田の風景だと思つて載せたわけではありません。

こうして表紙に載せるのであれば、秋田の風景から採つてほしいと感じます。でも、あえて津軽の風景を紹介したのは、珍藏してなかなか見せてくれなかった栗盛教育団が所蔵する未刊本の図絵が見られるようになったからだと思います。そういう動きの中で、秋田の人々に、今まで見ることでできなかった真澄の図絵をここで紹介することの方を選んだのです。

この二冊は表紙と内容がずれているわけですが、そこにこ

の時期の内田武志の試行錯誤がよく現れています。知らないで見ると、これらが秋田の風景だろうと誤解してしまうのが普通ですが、実はそうではないという矛盾を抱えていることも、これまでの研究の足跡を知っていれば、よく理解できることになります。

五 百二十年忌に刊行された『松前と菅江真澄』

刊行は翌年になりましたが、昭和二十四年四月に出たのが『松前と菅江真澄』です。先に触れた「内田武志の真澄研究」の説明には、「蝦夷島における各年毎の真澄の行動、著書の解題、著書の抄録（短いものは全文）、真澄採録のアイヌ語をまとめた。北海道に真澄の存在を知らしめる目的から、札幌の出版社から発行した」とあります。まさにその通りで、札幌の北方書院から出版されています。

この「まえがき」は昭和二十三年の秋に書かれましたが、出版は翌年になってしまったことになりました。それを見ると、「北海道において菅江真澄（一七五四—一八二九）に関する書籍の発行されるのは恐らくこれがはじめてであろう」とあります。北海道では菅江真澄についての関心がなかったの、北海道における普及の第一歩をこの本で歩みたいと考えたのです。

さらに、「ことし百廿周年をむかえた真澄翁の松前に於ける業績について記述するのがこの書の目的である」とします。

『秋田の山水』と『菅江真澄の日記』では、秋田にこだわりましたけれども、この本の場合は秋田を出て、北海道へ行きました。没後の百二十年忌を意識して、北海道の人々に真澄の業績を知ってもらいたいという希望を抱いたのです。

その時、「文献 真澄遊覧記抄」に抜き出した本文には見出しが付いていて、そこにアイヌ語も出てきます。末尾には「真澄採録のアイヌ語」を設けて、五十音順に並べて、それぞれの解説をしています。ですから、方言研究や民俗語研究の行く先に、北海道で言えば、アイヌ語の研究があったことになります。

これも実は表紙がおもしろくて、「表紙の説明」には、「表紙の絵は、未刊文献『錦木』のうちの一片を参考とした」とあります。ですから、これも栗盛教育団が持っている『錦木雑葉集』を描き直しているわけです。この図絵に描かれたのはうとう鳥です。うとう鳥（善知鳥）というのはウミスズメ科の海鳥です。

真澄はこのうとう鳥に執着したことが説明に見えます。「うとうの考証には真澄はよほど興味をもつたようで、うとう沼、うとう坂、うとう山などの地名に筆が及ぶたびごとに記述し

ている。ついに「うとう考」と題する一書を編んだと云うが今は惜しいことに未発見本の一つである」としています。この出版によって、未発見本の『うとう考』が出てくればいいという目論見があったのかもしれませんが。

私が愛読してきた『遠野物語』のウド（九三話）の頭注に、「北海道の諸国にてウタウ坂謡坂などいふはすべて此の如き小き切通のことなり」と付けています。柳田国男が『遠野物語』を書いたときに「ウタウ坂謡坂」という地名につなげたのは、間違いない菅江真澄の影響でしょう。岩手県遠野の不思議な話をまとめたその話から引き出されてくる地名の問題は、菅江真澄と連動していることになります。

オシラサマの神像の顔に白粉を塗るということ（一四話）に、「羽後刈和野の町にて市の神の神体なる陰陽の神に正月十五日白粉を塗りて祭ることあり」という頭注があります。これは『月の出羽路』仙北郡にある記述を念頭に置くものでしょう。ここでも菅江真澄からの影響があると思います。『遠野物語』の頭注には真澄からの示唆があると考えてみる必要があります。

また、『松前と菅江真澄』には、写真版の口絵が入っています。これは全集第九巻の「146」の『ぼんこきき』（『凡国奇器』）（15）の「アイヌの家」の図絵です。能代市の白坂高

重という人の所蔵する未刊本を見ることができたので、それを載せています。アイヌのチセという家のことです。後に昭和二十九年に出る『菅江真澄未刊文献集 二』の第四十一図に出てくることになる図絵でもあります。

「口絵解説」を見ると、「これは、未刊本〔凡国奇器〕中の一葉の写真版である」とあり、アイヌの家が非常に簡素であるのは、アイヌの人々は人が亡くなると燃やしてしまうので、豪華に造らないと説明しています。そして、「〔凡国奇器〕は、わずか十丁の民具習俗の図絵集。能代市白坂高重氏の所蔵本である。松前関係のものが多く、それは在道中の筆写になることであるが、いつ成本となつたか、判然としない。未刊文献の一つである」とします。

つまり、『秋田の山水』『菅江真澄の日記』から『松前と菅江真澄』にかけて、未刊本の資料を織り込みながら本を作ることが大きな目的だったことがわかります。

六 真澄研究の軌跡と『松前と菅江真澄』発行の意味

『松前と菅江真澄』の「まえがき」で、真澄研究に行くまでの自分の足跡を振り返っていますので、ちょっと前に戻ることになりますけれども、お話ししてみましよう。

まず、「自分が菅江真澄に関心をもつたのは、ちようど廿

年前、百周年を記念して真澄遊覧記刊行会から原本さながらの複製本の出版されたとき以来である。これによつて、信州の部の全てと、東奥の「奥のてふり」一冊とを、柳田国男先生の序文解説付の活字本によつて読むことができた。ついで発見された「ひなの一曲」も郷土研究社から複製された。いまから思えば夢のような話で、原図のまゝに色刷りされた和本に活字本が附添されて二円代で入手できたのである」とします。

内田武志が菅江真澄に出会つたのは、昭和の初めに、柳田国男が原本さながらの複製本と、それを文字化して解説を付けた活字本に接したときでした。その刊行は昭和四年からですから、この時、内田は数え二十一歳です。ですから、真澄研究への歩みは、渋沢敬三に「秋田に行くのであれば、菅江真澄を研究するように」と言われる前から始まっていたのです。

次に、「ひきつゞいて秋田県横手町の秋田叢書刊行会も活動を開始した。深沢多市氏に求めてその内容見本を送付されたこともあつたが、あまりの膨大さにそのまゝとなつたことであつた」とあります。『秋田叢書』に接することは、この時点ではできなかったわけです。深沢多市に頼んで内容見本を送つてもらつたとありますので、『秋田叢書』には内容見

本があつたはずですが、私はそれを見たことはありません。

内田は静岡に行つて作家の蒲原有明に会い、方言研究への示唆を与えられたということは前にお話ししました。「蒲原有明先生が柳田先生の序文を読まれて、真澄遊覧記の価値が世にあらわれない民衆の生活の觀察にあるならば、その部分だけまとめて早く印行してもらいたいものだ」と云われたことを、自分はいまも忘れない」とあります。つまり、静岡で会つた蒲原有明の言葉を忘れずにいたのです。

ところが、「あまりに数多い日記の歌文をいまの読者にしていることは、たゞ退屈を感じさせ、たまたま混じる砂金のごとき民俗記録をも徒らに逸させる憂いがないとは云えぬからである」と述べます。『秋田叢書』に圧倒されてしまい、真澄遊覧記を読んでも退屈してしまうことを危惧したのです、それではどうするかという点は、来年お話をしようと思つてゐる『菅江真澄遊覧記』の、抜粋した現代語訳につながることにあります。

疎開の時に一冊だけ持ってきた柳田国男の『菅江真澄』に触れ、「自分は秋田に居を移して以来、真澄研究に専念した」とします。その際、三つの仕事に着手したとして、「一は年譜の作製、二は未刊本の蒐集と印行、三は民俗語索引の整理」であるとしています。これは先ほどの『真澄遊覧記総索引 歳時

篇』の末尾に入つていた趣旨と重なります。注意されるのは、趣旨では三つ目が「真澄遊覧記の索引」だったのが、「民俗語索引の整理」と微妙に置き換えられていることです。

重要なのは、この時、「未刊文献の謄写もほとんど終了したと云える」とした点です。栗盛教育団の資料を見ることができるようになったからでしょう。そして、「民俗語総索引を大きくまとめようと準備中である」とします。これまでのことを簡単にまとめると、真澄遊覧記は膨大で全部読むことはできないので、一般の人々が知りたいと思うことにすぐに出会うためには、「民俗語索引」がやはり一番重要だと考えていたこととなります。

そして、「いま蒲原先生の言を生かして、抄録本を編んでみようと思つた」が、「現今の時勢では出版実現の可能性はうすい。残念なことだがこれは否定し得ないようである。よつて地域的にまとめることに方針をかねてみた」とあります。『菅江真澄全集』はとても出版できませんので、まず松前から出版しようと考えたわけです。なぜ松前かと言えば、「その主なる理由は、真澄の松前に於ける未発表の文献がいろ／＼と見出だされたゝめである」とあります。未発表の文献を早く人々に知らせたいという思いがあつたのです。

例えば、栗盛教育団所蔵の『かたぬ袋』を取り上げます。「渡

道の翌春二月の序をもつ「かたぬ袋」は、価値の多い民俗聞き書きである。こゝに収載したその後篇、アイヌの習俗を記した記録は特に興味ぶかい。真澄の著書にたえてみられなかつた星の名称の現れているのも、星の方言を蒐集している自分をすこぶる喜ばした」とあります。これは『日本星座方言資料』と連動するものです。

あるいは、能代の安濃家が持つ『無題雜葉集』に入るものだと思いますけれども、『蝦夷のてふり』の下巻も見つけました。そういった資料を入れ込みながら、この『松前と菅江真澄』を編んだのです。北海道で真澄が知られていないだけでなく、未刊行の資料をこの中に入れたいという思いが重ねられて、『松前と菅江真澄』は出版されたのです。

しかし、作製してあつた「民俗語索引」は、大部分の読者には不必要だから入れなかつたとして方針が揺らぎ、「最後に、真澄の採録したアイヌ語を五十音順に整理してみた」とあります。このアイヌ語の索引は、方言研究から連続しています。しかし、「さしたる語数とは云えなかつた」として、アイヌ語研究へのさらなる展開を断念してもいます。

七 『菅江真澄未刊文献集 一』に載った渋沢敬三「仰臥四十年の所産」

この後、日本常民文化研究所から発行される昭和二十八年の『菅江真澄未刊文献集 一』、翌年の『菅江真澄未刊文献集 二』へと移りますが、原稿を渡してから刊行までの間に、一人の人物が内田武志の前に現れます。須藤春代という十七歳の少女です。このことは真澄研究から外れますが、その問題が『菅江真澄未刊文献集』と平行しています。そのことはちよつと置いて、まず渋沢敬三の後援で発行された『菅江真澄未刊文献集 一』についてお話しします。

今まで見てきましたように、深沢多市が『秋田叢書』『秋田叢書別集』をたいへんなレベルで作りましたけれども、あれだけでは真澄の詳細な年譜をつくることはできません。その人生を明らかにするには、未刊本や未発見本を位置づけなくてはなりませんでした。この地味な作業の手助けをしたのが渋沢だつたわけです。

実は、未刊文献集だけ出されても、読者に対しては不親切なわけです。『秋田叢書』『秋田叢書別集』を知っている人にとっては、この二冊はそれらを補う意義がありますけれども、これだけ単独で出ても根幹の文章がないわけです。でも、この二冊を出さないと菅江真澄研究は進まず、菅江真澄が何者なのかはわからないと考えたのでしょう。

不親切を知らながら、商売にもならないこういう地味な本を心意気で出すようなことは、洪沢でなくてはできなかったはずです。巻頭に、「仰臥四十年の所産」という洪沢のとてもし長い序文があります。上野駅で仰向けに寝たまま汽車に乗ったと言いましたけれども、内田は血友病のために天井を見ながら四十年間暮らしてきました。昭和二十八年、彼は数え四十五歳でした。

まず、「本書の内容や探求経路其他については編著者内田武志君の語る所に譲り、序文としては冗長且つその所を得ぬ嫌あるを敢えて犯しても、私は本書の出来上る由来とともに内田君の最近の模様を部分的乍ら茲に紹介して、同君の努力と心情の一端を読者に知って頂きたいと思う」と始めます。洪沢は昭和二十四年発行の内田武志『日本星座方言資料』にも「歩けぬ採訪者」という序文を書いています、その序文をもう一度ここに引用してきます。『鹿角方言集』『静岡県方言集』『静岡県方言誌』三冊は、調査が綿密であることを驚き、「科学的な方法」を採ったと言います。

そして、「自分は内田君に秋田に行ったら菅江真澄のことでも徹底的に掘り下げて見てはとおすゝめしたのを今でも覚えていゝ」とあります。血友病で仰臥している人に「徹底的に掘り下げて見ては」と言える関係というのはすごいことで

す。普通は「体を大事に」などと優しくいたわりの言葉を掛けてしまうはずですが、内田を励ます大事な言葉は「徹底的に掘り下げて見ては」だったのです。それがこの未刊文献集になり、やがて全集につながっていくはずで、そのきっかけになった言葉であることは間違いないと思います。

真澄の生涯にはいろいろな疑問があり、未刊の紀行もあるらしかったが、それを非常な努力で次々と解き明かしてきたことに触れ、「稀代の旅行者の研究に一步も歩けぬ学徒が挺身して居る姿は是亦稀に見る対蹠ではある」としています。菅江真澄研究に身を注いでいる姿に、洪沢は心打たれたのだろうと思います。

ここに紹介した『真澄遊覧記総索引 歳時篇』あるいは『秋田の山水』『菅江真澄の日記』『松前と菅江真澄』が、「熱烈なる努力」によってできあがりました。でも、それらを見たときに、洪沢は、「本格的な業績たる未刊本の刊行は未だに実現を見ないのは残念である」と思ったのです。「徹底的に掘り下げて見ては」と勧めた責任があり、その責任と一緒に果たすためには、この二冊を出す必要があると考えたのではないかと思います。

昭和二十八年の夏、洪沢は北海道から秋田に来て、秋田大学女子寮で暮らす内田に会っています、このあたりから

ちよつと文脈が変わってきます。「内田君は盲目ではないが生理的な視野では所謂「格子なき牢獄」で盲目の一步手前の境涯である。それが四十余年の永きに互つてのことだ。よく堪えて来たものと思ひ又よくこの軀で丈夫な人をしのぐ仕事をしたものと思うが、それにつけても兄武志君の為に全身を打ち込んで眼となり手となり足となり、更に心を一つにして協力しつゞける兄思ひの令妹ハチ女史の永年に互る文字通りの獻身には頭が下る」とします。

この中に「内田君は盲目ではないが」とあり、あるいは「格子なき牢獄」で盲目の一步手前の境涯である」ともあります。なぜこんな言葉が出てくるのかというと、その次に関わるわけです。「仲のよい内田兄妹が老いて腰のまがられた母君と静かに住むこの室に昨年（昭和二十七年）の夏から思い設けぬ世界が訪れて来た。それは盲目の少女、今年十七歳になる須藤春代さんの出現であつた」ということです。血友病の内田武志と盲目の須藤春代の親交は、これまでにない出来事でした。

八 須藤春代との出会いと眞澄研究との関係

須藤春代は秋田県立盲学校に通う少女でした。昭和二十九年発行の『春のだいち』という詩集の口絵には、彼女が点字

を打っている写真が載っています。また、ほとんど公開されることのなかった内田武志・ハチ兄妹の写真もこの詩集には載っています。未刊文献集の刊行に先立って、昭和二十八年三月に『めぐみ』という謄写版の詩集が出ています。これは秋田檜山教会にあるおとずれ社から出ていて、渋沢敬三はその詩集の一節を引いています。

渋沢は二人の関係を紹介し、内田の言葉を、「病み呆けている私をはじめて春代さんがみまつて下さつたのは昨夏の暑い午后、教会の帰りであつた」と紹介しています。なぜ二人が知り合つたのかは、『春のだいち』に寄せた内田武志の「春代さんのあゆみ」から、妹のハチが通う檜山教会に春代も通っていたことによると知られます。

その時、「たずさえて来た袋から出して見せてくれる点字板など、いろいろの学習用具も珍しかつたが、日頃からもつとも私の知り度いと思つているのは、この明暗もさだかでない人たちの感情、いつわらない心の叫だつた。春代さんの秀いでた額をみつめ乍ら詩でも作つているのかとたずねると、うなじを直ぐにして「いいえ」と答えた」そうです。

そこで、渋沢が内田に「徹底的に掘り下げて見ては」と言つたように、内田はこの十七歳の少女に、「毎日の自分の心の眞実をいつわらず書きとつてごらんさい。それには形にと

らわれない詩が最もふさわしいでしょう」と言ったのです。そして、「数十枚の古ハガキを渡してあげた。一枚に毎日一つの詩を点字で打とうと云う約束である。さつそく私も点字を覚えることにした」とあります。そうすると、春代は毎日詩をつくったのです。

この『春のだいち』を見ると、何月何日と詩をつくった日付が出てきます。内田武志に言われたとおり毎日のように詩をつくって点字を打ち、点字を習った内田がそれを文字に直して詩集にしていくなわけです。目の見えない人たちが点字本で物を読むのも大事だが、「自分の言葉でおのれの気持ちを表現し得る迄育てみちびくことが勘い」と憂えていたのです。

そして、洪沢は「きくの花」「ポスト」「春の土」という詩を引きます。この「春の土」は、『春のだいち』という書名に関わる詩で、春になって雪が解け、そこを踏むと大地の柔らかい感触がわかると詠んでいます。わかりやすいのは「きくの花」です。「ちいさい はちに／うえられている きくを／ともは みせてくれる」「そーと さわつてみる／まあるくて つめたい／なんだか／かわいい こどもの てのようだ」「やさしい ひとのこころに／ふれたような かんじがする」。菊の花が見えないので、触つてみたら、まるくて冷たいという触覚でした。目が見えないゆえの詩の世界が生

まれています、それを引き出したのは内田武志だったので

す。

洪沢は、「仰臥しつゞけの内田君、心眼は広くとも肉眼の視野のせまさになやみつゝけたこの人が、全く眼の見えぬ少女の心の扉をすなおに開いたことは、此の二人にとつても、又その周囲に居る我々にとつても大きな喜びである」とします。内田は眼の見えない少女の心の扉を開いたといのです。

次に、内田武志はこんなことをします。「画用紙に点字で詩又は簡単な文章を綴り、その下にそれに因んだ指の触感で盲人に理解し得る絵を作らんとし既に十数枚試作されたからである」。『春のだいち』の口絵にはそれが載っています。小さい布や毛糸・厚紙などを使って、それに触る手の触感で詩の風景を感じ取らせようとしたのです。この文章と絵画の組み合わせのヒントは真澄の世界だったのではないかと思います。

洪沢は、「音は点字に代替せしめ得たが、絵となると眼あきと盲目との間には未だ深淵があつて、事は非常に難渋であるが、この着想は何といつてもすばらしい。兄妹の情熱は春代さん個人を超えて盲人の心に肉迫しつゝある。或は之等の仕事の方が本書の如き真澄翁の遺業の探求よりもつと価値あることかもしれない」とするのです。

これは重要です。『菅江真澄未刊文献集 一』を出しながら、そこで須藤春代の詩の問題を取り上げて、ここで出す本よりも、内田武志とこの少女との出会いのほうがずっと価値があるかもしれないと言っているのです。二人の交流には、内田が積み重ねてきた真澄研究を超えていくような意味があると考えたのです。それは折角の真澄研究の中断や放棄を意味することになりかねません。真澄研究にとっては不吉な指摘です。

そして、渋沢敬三は、「学者でも経世家でもない真澄翁ではあるが、全ての物事に深いいつくしみの心なくしてはあの文章もかけまいし絵も画けなかつたであろう。私には内田君が飽くなき追求力で真澄翁の遺業を知識として探究して居る内に、知らず知らず翁の心の奥底をも掘りさげ得たと思われるてならない」と結びます。単なる知識ではなく、ああいう文章と図絵をかけた真澄の心の奥底に手が届いたのではないかとします。それは須藤春代との交流につながっていると考えていたように思います。

内田武志自身の「あとがき」は、「新たに年譜を作成しようとするれば、どうしても未刊文献をみなければならぬ」のに、「大館市の栗盛教育団の蔵書は秘庫に収められて当時は見ることも難かしかった」とします。真崎勇助の収集が見ら

れなかったことは前にも触れました。「他見を絶っている状態であつた」のですが、昭和二十二年に、「ようやく同家書庫内で書き写すことが許された」そうです。けれども、自分では行くことはできませんから、妹のハチさんなどに行かせます。

その際の苦勞は、「薄紙にやわらかい鉛筆で書き写すより方法がなかつた。それを持ち帰つてから原稿に書き改めるのがわたくしの役目であつた。不明の箇所は印を附してもう一度写し直してもらふ。附箋のついた写本をもつて三時間余もかかる大館までの汽車をいくたび往復してもらつたらうか」とあり、そういう経過を経て、この未刊文献集ができたわけです。その結果、「従来埋れていた真澄の半身もややあきらかになつた」と感じたのです。

しかし、未刊文献集を編むにあたって、栗盛教育団では最初写真撮影を許してくれませんでした。その後、秋田銀行頭取の鈴木直吉の仲立ちで岩田写真館の主が紹介され、渋沢から贈られたキャビネ判の乾板をもつて大館まで行き、図絵の部分を書することができました。それは昭和二十三年の末だつたそうです。その中には『百白之図』（大館本）も載っていますけれども、未刊文献集の出版はこうして実現したのです。

九 『菅江真澄未刊文献集 二』と真澄研究の中断

次に、昭和二十九年の『菅江真澄未刊文献集 一』です。これは『菅江真澄未刊文献集 一』から続くものですけれども、一は「日記集」と「随筆集」に分類し、これは「粉本稿」「凡国奇器」などの「随筆集」と「花の出羽路」などの「地誌草稿その他」に分類しています。巻末に改めて「菅江真澄年譜考」を整理し、最後に「菅江真澄著書年表」を載せています。

この年表は、真澄が生まれてから亡くなるまでの人生と著書との対応、そして、『秋田叢書』『秋田叢書別集』の収録状況、未刊行本・未発見本を見ることが出来ます。最新の研究成果がここに上がっています。これがやがて、『菅江真澄全集』の基礎、今というデータベースになることは間違いありません。

刊行直前の「あとがき」によれば、この当時、内田はかなり調子が悪く、吐血などして校正もできなかったようです。やがて恢復して、校正に携わることができたとあります。注意されるのは、「もつと真澄の姿をあらわにする資料をも掲げてゆきたいのだが、それらはやはり他の機会にゆずろうと思う」とあることです。

一では「従来埋れていた真澄の半身もややあきらかになつた」と言い、今度は「もつと真澄の姿をあらわにする」とい

う願いがありました。しかし、菅江真澄の全体像を明らかにすることは、他の機会に回してしまいます。先ほど申し上げましたように、この未刊文献集は、『秋田叢書』『秋田叢書別集』に載らなかった資料を載せているわけですから、これだけ見ても不親切です。「真澄の姿をあらわにする」ためには全集が必要だという思いは、この二冊を出しますます強くなっていたのでしょうか。

でも、この時期に、もう一方で起こってきたのが須藤春代さんとの関わりでした。昭和二十八年に謄写版の『めぐみ』という詩集を出し、昭和二十九年に『春のだいち』を出します。これには洪沢も文章を寄せています。

松山修さんは、没後三十年の「内田武志の真澄研究」の解説資料で、「その後十年間、武志は真澄関係の論考をまったく発表しなくなりました」としていますが、その後発見された文章もあるということです。また御紹介があると思います。それでも、文章はわずかですから、この後に真澄研究の中断があったと見ることは、大局的に見れば誤りではありません。

そこには、妹ハチの回顧として、「身体的差別のみならず、身分差別の問題もまた、世を圧している事実を考究し、はじめて、この環境に脆くも人間性を失う者とまた、この境遇の

なかで自己を生かすすべを見出してゆく者のあること認めえた」という言葉を引いています。須藤春代への対応は他人事ではなかったはずで、「自己を生かす」ためにどうしたらいいかという問題は切実だったはずです。本来なら、そのまま全集に向かうべきだったのですが、ためらいの時間が必要だったのだと思われます。

没後三十年の展示の時に、内田武志が残した「春のだいちその後」という未発表原稿があることに触れていますが、かなり大部のもののようです。内田は仰臥しながら真澄研究に人生を掛けましたが、心の底にある深い思いはそうした文章に表明されているのかもしれない。内田の真澄研究は中断しますが、やがて再開するまでの複雑な思いはやはり重要でしょう。

この後で松山さんから紹介があるかと思いますが、没後三十五年になる今年十月二十四日から十二月二十日までの二ヶ月ほど、菅江真澄資料センターの企画コーナー展で「内田文庫の貴重資料」の展示があります。ぜひこの二ヶ月の間に再び足を運んでいただいて、内田武志が残したものを検証してください幸いです。

それらを受け止めながら、来年の四回目は、『菅江真澄遊覧記』や『菅江真澄全集』に進んだ展開をたどってみたいと

思います。今、私たちはそれらの成果に全面的に寄りかかりながら菅江真澄を読んでいます。それらに対する批判ももちろんあって、そうしたところで現在の真澄研究が進んでいることも確かです。

そして、もう一人気になっている人物は妹の内田ハチです。私たちは兄の偉業を支えた献身という点で見えていますけれども、たぶんそれだけではつかみきれないところを抱え込んでいると感じます。それは今後の宿題になると思いますので、今日はここまでで一区切りにしたいと思います。御清聴ありがとうございました。

「^{ふで}華の山口」の世界——当時の文芸事情と真澄の立ち位置

菅江真澄研究会員 細川純子

はじめに

真澄の晩年と呼んでいいだろう年齢、六十九歳の作品「華の山口」（文政五〇一八二三、全集⑪中）から、真澄は久保田でどのような人々とどのような生活を送っていたのか、また、どのような心境で暮らしていたのかを読み取っていく。

『菅江真澄全集』（未来社）は十一巻を〈雑纂〉と分類しているが、「華の山口」は文政五年の元日から三月末までの日記体の作品である。日付ごとにくつかのテーマがあり、そのひとつにも触れることになるが、中心となるのは毎日記録されている真澄とその歌友たちとの和歌生活の実相である。

真澄はこの作品を自負をもって書いたのだろうと読み取れる。それは序文に添えられた次の歌、

椎の屋に折たく柴のしばしだにけぶりは花の霞ともなれ
この和歌から、真澄のこの作品が少しの間であっても「花の霞」、つまり、風情を添えるものになってほしいという願いが込められているように読める。

右のことを確認した上で、今回のテーマに入っていくこと

にする。

一 真澄と和歌を詠んだ人々

真澄は毎日和歌を詠んでいる。大部分は人々との歌会である。その人々を次に一覧してみる。

1／3 於敬相寺 湛照・是観

1／17 於くすし稲見升百武宅

1／18 於舟木武定邸 鎌田正安・石田友良・あるじ

の母綱子・是観

於敬相寺 湛照・是観

於応供寺

1／23 湛照上人への返歌

1／28 於敬相寺 湛照・是観

1／29 於笹原寺 是観・公教

1／30 於武藤の館 駒木根隆秀・進藤俊武・是観・

湛然・湛照・武藤盛達

閏1／2 人々とともに

閏1／3 於西勝寺

閏1／7 於吉川忠行やどで人々と

閏1／8 人々と

閏1／13 於笹原寺 人々と

閏1／18 於敬相寺 会あり

閏1／19 人々と（閏1／23、28、2／1も人々と。

会場の明記なし）

2／8 於進藤俊武宅

歌会が開かれるのは主に寺院、それと富裕商人と藩士の邸宅がその会場となっている。寺院はそれぞれ宗派が異なるのだが、和歌を詠む席では同座している。特に親しかった僧は本誓寺（笹原寺）の是観で、この時点で二十年來の付き合いだと真澄は書いている。つまり、真澄にとって秋田が終の棲処となる、その始まりの日記「雪の道奥雪の出羽路」（享和元＝一八〇一）の頃からの付き合いである。是観は真澄より二十歳年少であり、京都で二条派の梅月堂香川黄中に和歌を学んでいる。

次に目を引くのは湊の富裕商人である。『伊頭園茶話』には、湊の妻女には和歌を詠む人が多くいるが武家の妻女にはないといあり、商人の豊かな経済力が風流生活を営ませていると

いえよう。この「華の山口」より少し前の「かせのおちば六」にも久保田や湊の商人である歌人たちと歌会を行っている真澄の姿が認められる（一八一六年）。

具体的に商人の和歌生活を眺めるために、一月十八日の真澄の日記を引用してみる。

みなとなりて、問磨舟木武定のもとにいたりて、鎌田正安／翁、石田友良、あるじの武定が母なる綱子、是観上人など円居せり。冷泉家より正月の御出題とて、

鶯鳴梅といふ事を、

梅もまた咲みさかすみあさひかけ匂ふかた枝にうくひすの鳴く

咲しより木伝ひ馴てうくひすの羽風にこほす苑の梅か香さきしとは先聞く宿にうくひすのこゑよりにほふ梅のはつ花

寄霞恋といふことを、

わかかたにしはしはそれとなひけとも人は霞のおくにしられぬ

いかにしてへたつる中としらせはやたえす霞のかゝるおもひを

うしや人霞の袖もひくかたになひくも春のこゝろならす

や

善導寺の心阿上人なにはの事にかゝつらひて、あし分舟の
さはりあれば、こたひの集ひにはこゝろにまかせず、もれ
なむことのねたし、なと書聞えて、

友むれてもゝさへつりの里にたに尚出かての谷のうくひ
す

とあり、 後略 (全集④448〜449頁)

この歌会のメンバーは、当主が廻船問屋で鎌田正安は神主、
石田友良は藩御用達の商人、是観と出席予定だった心阿は僧
であり、ここに当時の和歌を詠む階層が集っている。

ここで注目したいのは、当主の母綱子が冷泉家の弟子だっ
たという事実である。冷泉家はすでに全国に和歌の弟子を抱
えていた。十四代為久が武家伝奏(朝廷と幕府の連絡の役職)
に任じられ、十五代為村の時には弟子のいない藩はないと
豪語していたというほど全国に弟子が増えていた(「義正聞
書」)。秋田市史⑭は能代の豪商村井政貞は為村の弟子だった
ことを記している。飛脚制度が発達し、手紙による添削・批
評が返送されてくるのである。なお、この舟木綱子の時の冷
泉家当主は十八代為則にあたる。冷泉家に数の上では及ばな

いが、他の堂上歌人(貴族)たちもそれなりに全国に弟子を
抱えていた。真澄を優遇した松前藩藩主継母の文子は、真澄
離松後、堂上歌人芝山持豊の指導をうけていると、下北滞在
中の真澄に手紙で知らせてきている。

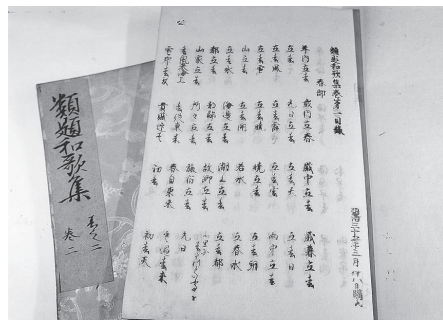
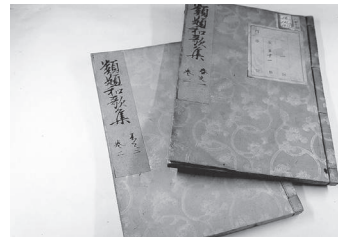
右の人々が久保田城下で和歌を嗜む階層だった。真澄と親
しい是観上人は二条派であるが、真澄は故郷で冷泉流の和歌
を身につけたらしい。名古屋での修学時代に冷泉派の歌人と
して知られる熱田神宮の神官、粟田知周との交流が判明して
いるし、同じ名古屋時代に遠州の国学者、内山真龍を訪ねた
際、真龍は真澄を「冷泉風の和歌を詠む人だ」と日記に書付
けている。しかし、堂上和歌とは宮中で天皇を中心に技量を
磨くので、貴族の家ごとに流派を名乗っても和歌に大差はな
いのである。ましてや、地方の歌壇では江戸を除いて流派ご
との歌会はいえない。

それでは、具体的にどのような歌会を執り行っていたのか、
垣間見えることから述べてみたい。

京都の堂上歌人の弟子である人には定期的に歌題が送られ
てくる。右の舟木家の正月の歌題のように。ただし、一年分
をまとめて送ってくるらしい。それを月ごとに分けて歌会を
持ち、二ヶ月分をまとめて清書して宗家に送るようだ。宗家
からは特に為村の時はその月のうちに返送されてきたらし

い。その歌会のほかにも熱心な人は歌会を行うし、特別に堂上歌人の師を持たない歌人はどうしたのだろうか。

当日の歌会の最後に、次回の歌題が予告される。歌人たちは予習・予作して歌会に臨むのである。この題の出し方を兼題という。兼ねて出しておいた題という意味である。当日、あるいは散策の途上などで急に歌を詠もうという時に出す題を当座という。歌会の題を決めるのは主人側だが、どのように歌題を決めるのだろうか。もちろん蓄積した知識もあるだろうが、厳密にするためには参考書が必要であろう。その参考書として**類題和歌集**が挙げられる。作歌の便宜や証歌検索のために、古人の和歌を集成し題ごとに分類した歌集である。巻ごとに最初に題を一覧し、そのあとに題の証拠となる古典の和歌が並べられている。類題和歌集は室町時代から江戸時代にかけて各種、規模の大小を問わず作られた。時代が進むにつれ和歌を詠む人口が増えていったことだろう。それらの類題和歌集のいくつかを、真澄たちの歌会の歌題と引き合わせてみた。例えば「**華の山口**」閏一月十三日の歌題（兼題）**名所鶯・（当座）湖上霞・梅花厭雨**は、「**題林愚抄**」・「**明題和歌集**」では選んでいない題であり、「**新明題和歌集**」は「**梅花厭雨**」も入っていないのである。全部入っているのが後水尾院が選集した「**類題和歌集**」という名の類題和歌集である。



類題和歌集
(秋田県立図書館蔵)

実はこの「**類題和歌集**」は以前、真澄が松前に滞在し真澄も同座した松前藩二の丸で行われていた歌会でも用いられていた歌集だった。それを証明した論文を「**華の山口**」にも応用したかったのだが、あまりに煩雑の印象を与えることを危惧して割愛した。疑念をもたれる方は『**真澄学**』四号の拙論や拙書『**菅江真澄の文芸生活**』（おうふう）を参考にしていただけたらありがたい。この「**類題和歌集**」は秋田県立図書館

が所蔵しているが、入手先は必ずしも藩直送というわけではないようだ。東北大学付属図書館所蔵の狩野文庫にも所蔵されている。これは伊達藩の判が押しており、松前藩でも使用していたことと合せると、権威ある歌集と認められていたらしい。後水尾天皇（院）は芸術に卓越した才能を示し、堂上和歌をも牽引していた。その人物の編纂した歌集である。このような歌集を繰りながら久保田城下の和歌生活は営まれていたのだった。

二 久保田十景の制作

（１）瀟湘八景詩画の歴史

平凡社刊『菅江真澄遊覧記5』の著書目録の項に、年次不明本のひとつとして「久保田十景」が挙げられている。

図絵、仮題である。久保田の風景を大型平紙に一図ずつ描いた彩色図絵。説明も書いてある。その文中に文化十二年の文字がみえる。真筆は不明となって画帳に貼られた模写が残っている。仙北郡六郷町栗林治郎作氏旧蔵。

と、解説されている。この作品の存在を広く知らしめたのは、田口昌樹氏である。『出羽路117』（秋田県文化財保護協会

に『久保田十景』の模写本発見」という解説文を寄稿された。それによると、図の一部である文章は、真澄をこよなく敬愛した六郷町の栗林治郎作が真澄の筆跡に酷似した書体で模写し、図は横手市在住の戎谷南山えびすやなんざんに依頼して描いてもらったということである。田口氏の文章にはコピーされた図絵も添えられていたが、白黒であり小さいので判断に苦慮した。現在、模写絵を所蔵している愛知県豊橋市美術館に赴いてカラーの写真版を頂いてきた。十枚それぞれの図絵に長めの文章と和歌が添えられており、模写であることを考慮すれば構成は真澄のものと筆者も判断したので、以下、真澄の作品（模写）として論ずる。

十図絵のテーマは次のようである。

綾小路古梅・三丸桜花・宝塔寺紫藤・両津山遠景・柴渡
夕照・長沼落雁・水口螢火・大嶺秋月・泉川清流・鳥海
暮雪

いずれも久保田城下と近郊の景であるが、今日は失われてしまった景である。遠景としては両津山、大嶺（太平山）、鳥海山は健在であるが、真澄が構成した図絵ではなくなっている。

さて、この章は「十景」というテーマはどこから学んだのかを考察することである。

十枚のうち、長沼落雁・大嶺秋月・鳥海暮雪・柴渡夕照の地名の下の景物は瀟湘八景詩と共通なのである。瀟湘とは中国湖南省・長江中流の洞庭湖に注ぎ込む湘江とその瀟水の二つの川をさし、広く洞庭湖とその南に広がる長江支流の流域全体を指す。そのあたりののどかな様子、険しい山々、茫々と広がる湖、季節や時間によりさまざまに変化する気候などが瀟湘の風景のイメージである。それらの風景を詩と絵画で表現した芸術作品である。北宋の書家米芾の瀟湘八景図詩が起源らしいが、有名になったのは文人画家宋迪の描いた八景図である。テーマは次の八つである。

瀟湘夜雨 洞庭秋月 遠（煙）寺晚鐘 遠浦帰帆

山市晴嵐 漁村夕照 江天暮雪 平沙落雁

この景を漢詩であるいは水墨画で、時に水墨画と詩の構成で、飽くことなく様々な創作が繰り返されてきた。

この瀟湘八景詩と絵をわが国にもたらしたのは南宋の禅僧たちである。わが国の五山文学の基礎は南宋から渡来した禅僧によつて築かれたのである。わが国の最初の瀟湘八景詩は宋の禅僧によつて作られ、次に日本の禅僧も試みる。そしてまもなく、漢詩を得意とする公卿たちも詠むようになってくる。五山の詩宴には貴族も同座することが多かったのである。最初はだれも瀟湘の地を踏んでいないので、想像で詩を作り

絵を描くのである。そのうち彼の地へ留学する僧も現われて、瀟湘のイメージに豊かさが加わり、わが国の瀟湘八景詩画も充実してくる。

やがて、同じ題を和歌で詠む歌人も現われる。藤原為相（冷泉家の祖。一二六〇～一三三八）の瀟湘八景和歌がその最初だと考えられている。例歌を二首。

漁村夕照

浪の色は入日の跡になをみえて磯ぎはくらき木がくれの宿

平沙落雁

まづあさるあし辺の友にさそはれて空行雁も又くだるなり

和歌として詠まれたことがわが国において瀟湘八景詩・和歌の裾野を広げたことは確実と思われる。まもなく中国の地名をわが国の地名に差し替えて詠まれ、全国に八景詩・和歌が拡大していくのである。寺院では自分の寺からの眺めや境内の風物を、都の有名歌人や詩人に詠んでもらい、また、画家に描いてもらつて屏風や掛け軸に仕立てて飾る。いわば箔をつけるため、ステータスシンボルである。わが国では平安時代から名所和歌や名所屏風絵が盛んに作られていたので取り組みやすく、また理解しやすかつたのだろう。景色も八景

から十景、十二景、二十景と拡大していくのである。仙台藩の場合、五代藩主は塩釜・松島や領地の名所二十景を選んで、都の堂上歌人たちに一景、一歌人に詠んでもらうという贅沢をしている。よほど自藩に箔を付けたかったらしい。

十八世紀前半には（真澄が生まれる以前から）八景詩のアレンジは行われており、庶民も楽しむものになっていたのである。

（2）真澄の八景和歌

わが国における瀟湘八景詩の受容と展開の歴史を簡単に眺めてきたが、ここでは真澄の八景和歌の取り組みを眺めてみたい。

この項の冒頭で「久保田十景」の紹介をしたが、年次不明としながら一枚「宝塔寺紫藤」に文化十二年（一八一五）と明記されている。残りの九枚もその前後かと推察される。風景は秋田再入国当時からあたたためてきたとはいっても、「葦の山口」が書かれるより少し前かと思われるが、この頃の真澄の精神世界は一定だと考えられるので、「葦の山口」の一部として扱うのである。

「久保田十景」が誰かの依頼なのか、真澄自身の発案なのかは不明だが、真澄の前には長い瀟湘八景詩の歴史があった。

その歴史の流れの上に真澄の試みがあつたのである。

真澄はすでに年次が知れるところでは天明五年（一七八五）に八景和歌を創り現在の奥州市の諏訪神社に奉納していた。蝦夷地へ渡ろうとして叶わずみちのくを南下して諏訪神社に立寄ったときに、神主から依頼されて境内からの眺めを八つ選んで詠んだと、奉納和歌の前文に書いている。現在、真澄の「陸奥胆沢郡諏訪神社法楽八景和歌」は金ヶ崎町教育委員会が所蔵している。和歌の部分だけ抜き出してみる。

釜淵夜雨

わきかえる釜淵の瀬の波の音を汀に寄るの雨とこそ聞け

片岡夕照

またや見ん片岡山の夕日影花や紅葉の色ならねども

北上川帰帆

真帆引きて幾瀬の波を北上の川風吹きぬ帰る百舟

三ヶ尻落雁

山の端の月も今宵は三ヶ尻のほめく影に落る雁かりがね

三五嶽秋月

惜しめただ秋の半ばは今宵より岳の名に負ふ望月の影

八王子晴嵐

八君やっきみの神のお座ましの峯しるく吹く山風に晴るる薄雲

早池峰暮雪

木々深き里はお暗も早池峰の雪にはおそき夕暮の空

国見山晚鐘

国見山入相告ぐる麓寺いなせの小舟くれわたるらし

右の和歌は諏訪神社周辺の地名に、瀟湘八景詩の景物を忠実につけたものである。明らかに真澄は瀟湘八景詩・和歌を学んでいる。どこでか。名古屋においてであろう。真澄の生まれる前から瀟湘八景詩・和歌の裾野は広がっていたことは既に書いた。真澄が「ひとたびは学びの親とせし」と書いている岡崎の植田義方も、年次不明ながら三河三ヶ寺と称された菅生満性寺に「境内八景」という五言律詩を奉納している。義方は吉田藩の御用商人で真澄より二十歳年長である。

次に八景和歌を詠んだことが知られるのは「おくのうらうら」(寛政五「一七九三」)の中の「恐山十景」である。ある人に請われて恐山に十の景観を定めて詠んだとしている。これは十景であり、景物も瀟湘八景詩を大幅にアレンジしている。題のみ示す。

大杭山晚霞(春) 鶏頭山躑躅(春) 八滝山納涼(夏)

小杭山白雨(夏) 屏風山秋月(秋) 湖辺楓樹(秋)

剣山叫猿(冬) 釜臥積雪(冬) 法羅陀山三法鳥(雑)

—宗教— 林崎鈴音(雑—宗教)

始原の瀟湘八景詩がわが国の和歌の世界に取り込まれていることが確認できる。中国では四季という観念がないのに、この十景は和歌の部立に即して四季と雑体にわけている。瀟湘八景詩と同じ景は「屏風山秋月」だけだが、ほかは恐山に合せてアレンジしている。例えば「小杭山白雨」は「瀟湘夜雨」の、「釜臥積雪」は「江天暮雪」の、「林崎鈴音」は「煙寺晚鐘」の、それぞれのアレンジと考えられる。

北宋時代に彼の地で創められた瀟湘八景詩が、わが国に入ってきたから長い時間をかけて受容・発展し、わが菅江真澄もこのようなアレンジをいたすことになったのである。

真澄の手柄ということはできない。すでに、真澄の前に各地方で自領に合せたアレンジは行われていたのである。それを真澄が目にしたかどうかは別として。自国のものとして自由に詠む空気があったということである。

「久保田十景」はどのようにして誕生したのだろうか。実は久保田の文人に瀟湘八景詩・和歌は見当たらないのである。江戸時代の秋田の歌人の和歌を集めた『秋田歌集』と佐竹義敦公と義和公の作品を収めた『義和公頌徳集』を繰っただけなので、ほかから出てくるかもしれないが、少なくとも他の藩の歌集から容易に見つかるようには、採し得ないのである。

わずかに、義敦公が「三倉鼻夕照」という題で和歌を詠んでいるのは、「漁村夕照」を意識しているのだろうか。義和公には「山寺夕鐘」があるが、これは類題和歌集にある題である。

義和公は和歌を冷泉派の歌人であり藩士の茂木知教に指導され和歌を多く残しているが、実は漢詩にも熱心であった（『秋田市史④一九九六年版』）。『秋田市史④』は「詩史」の項で「義和の作詩には宋朝風の格調をおびて高雅なる作が多い。繊細にして流麗である。」としている。義和公は久保田の財政難を立て直すために文教政策に力を入れた。江戸の四詩家のひとりと称された折衷学派の大窪詩仏を江戸の藩邸日知館に儒学者として迎え入れた。久保田にも招いて秋田藩士に与えた影響力は大きかったと言われる。詩仏は宋詩を学んだ。義和公が宋詩風な漢詩を詠むのは、詩仏からの影響であろうか。瀟湘八景詩は宋代に誕生した。しかし、瀟湘八景詩・和歌は秋田の文壇では認められなかった。

と、すると『久保田十景』は真澄がはじめて久保田藩にもたらした瀟湘八景詩（のアレンジ版）だといえないだろうか。久保田の人々は具体的な瀟湘八景詩（知識では知っていたかもしれないが）を眼前に見たのである。

一と二をここでまとめておくと、久保田には各地から僧や商人や学者などが移動してきており、中央と同じ水準で（そ

れを目指して）歌会や詩会が行われていたのだった。そこに真澄も大きな力を発揮したのだと思われる。

三 津村涼庵との「出会い」

「筆の山口」の目次の四番目に「雪のふる道わけ見し事」があり、この頃真澄は津村涼庵の『雪のふる道』を読んでいたらしく、かなりの分量で引用している。『雪のふる道』は津村正恭涼庵の作品である。和歌入りの紀行文である。涼庵は真澄より十八歳年長の久保田藩御用達の江戸の商人である。富裕商人の常で、和歌（冷泉派）、漢詩、国学、儒学を修めた。その涼庵が藩命により、二度久保田を訪れている。一度目は天明元年、その旅は『阿古屋の松』に結実している。『雪のふる道』は天明八年十一月に江戸を立ち寛政二年三月まで二冬三春を久保田で過ごした記録である。やはり和歌入りの雅文である。涼庵には他にも『片玉集』、『譚海』、『思出の記』その他の作品がある。涼庵と久保田藩との関わりは、涼庵の先祖は武士で大坂陣の際佐竹侯の老臣梅津憲忠に従って働いたが、この人が武士を捨て江戸に出て商人になったという家柄である。佐竹侯が秋田に移封されてからも梅津憲忠の縁で御用達を勤めていたと思われる。

真澄が読んだときは書かれてから三十年は経っていて、写

本である。その写本はいかなるものか不明である。先頃刊行された加藤秀俊氏の『メディアの展開』（中央公論新社）では秋田県立図書館の所蔵している写本と断じており、その写本の一頁めを口絵に載せている。筆者も確認しており文化五年（一八〇八）の写しとあるが、真澄の引用したのは二巻であるが、秋田県立図書館本は一卷のみで終っている。東北大学付属図書館の狩野文庫の写本も真澄の引用した文章とは微妙な差異がある。一番桑な比較は『日本庶民生活史料集成』第二十巻に収められている『雪のふる道』であるが、これも真澄の引用した文章と少し違いがある。真澄は時々誤写をするが、誤写とか脱字からくる差異ではないようである。結局、真澄がどんな写本で読んだのかは分からない。紙魚に食われていて所々読めないときき、江戸には良い版本があるらしいとも記しているが、すでに江戸時代に版本になっていたのだろうか。『日本庶民生活史料集成』本の解説には昭和に入ってから初めて印行されたと書いてあるのだが。

さて、真澄と涼庵の出会いといっても、涼庵は江戸住いの商人で文化三年に没しており、直接の出会いはない。『雪のふる道』を通しての知悉である。『雪のふる道』を読み切つて、「津村宗安は相見ざりし人ながら、此日記見ていとく／＼なつかしかりき。」（二月二十日条）と書くのである。その「なつ

かしさ」の中身を解き明かすことは、真澄の人となりを知ることにつながると思われるので、真澄の涼庵の文章の引用の仕方方を少し探訪してみたい。かといって、全文を引くことは煩雑の観を免れないので割愛する。

真澄の二月十九日の条は、真澄が恵光山西法寺の付近を散策するところから始まる。最近までここに一条院の退院（隠居した僧が住む寺）があったのだが、退院が荒れ果ててしまったので、現在は西法寺が移ってきたのだと書く。続けて、退院があつた当時はどうだったかという部分を、涼庵の日記で補うのである。涼庵の日記は三月十九日、真澄の日記は二月十九日、この年は一月が二回あつたから、ちょうど同じ頃である。

涼庵が退院に入ってみると桜の樹がたくさん植わつていて、蕾がふくらみつつあるのをみつけて、盛りのころは必ず来ようと思う。それからの涼庵は桜の開花が気になり、何度も退院を訪れたことを日記に記しているのを、真澄は引用している。四月五日の涼庵の日記はようやく退院の桜が開花したので、寺守に告げて桜の見える部屋を開けて貰い心ゆくまで眺めた。そのうちに垣根の破れから里の子どもたちが入り込んで来て、寺の小坊主たちと一緒に庭を駆け回る。ひとりの可愛げのない小坊主が笛を吹き始める。始めは調子

が整わなかったがだんだん音があつてきて、やがてはこの笛の音がなかったならば趣は半減しただろうと記している。それに続けて真澄は「なかむかしの春をしのぶにたれり」と書いて、涼庵の文章から、今はない一条院退院のありし日を偲ぶのである。「なかむかし」は真澄によれば三十年前を指している。三十年前の退院を偲んでいる真澄の前でまだ咲かぬ梅に鶯が来て鳴いている。そこで言争いをしている子どもたちがいる。真澄はうるさいことよと眉をひそめるのだが、やがてその状況から小沢魯庵の和歌を思い出して付け加える。小沢魯庵の書もこの頃読んでいたようである。

真澄の手法として、涼庵の日記を引用することは単に比較するためではなく、真澄の知り得ない過去の時間を遡るためなのである。退院だけでなく、久保田の名所旧蹟の過去と現在を涼庵の日記と読み比べて、「そのむかしもなつかしうおもひやられて」と書いている（真澄日記二月二十六日）。三十年前を覚えてくれた涼庵は「なつかしい」人なのである。そして、ふっと気がつけばやはり子どもたちの声がする。過去と現在の時間がつながっている。夢幻的なような構成である。

真澄は日記全編で古典籍をよく引用するが、それは知識の披瀝が目的なのではなく実際に時間を遡ってみたいのである。

る。キャッチフレーズの的にいえば「時間の旅人」である。真澄が出羽国に最初に入った頃の日記「秋田のかりね」に、阿古屋の松を訪ねる場面がある。これには異文があり、内田武志の解説によれば文化末年に改写したとある。最初の日記では、阿古屋の松に額づく男がいて、その男が松の由来を告げて山道に去るという筋が、改写では真澄が鳥居に額づいていると草刈る男が真澄にタバコを勧めて、松の由来を語る。真澄はこの男はただの草刈りではないと思い、鳥居の柱に和歌を書付ける。それを見て草刈りの男は、真澄をただ者ではないと知り別れていく。いわば聖人が聖人を知るの譬である。能の構成のようでもあるが、真澄はやすやすと過去と現実を往還できるタイプの人間なのではないだろうか。そう考える根拠として、真澄は源義経の家臣常陸坊海存が、人魚の肉を食ったため四六〇年も生きながらえているという伝説を何度も書きつけて（「ふでのまにまに」、「さくらがり」）、「かゝる物語もあれば海存が神仙と化^スりし事、そのゆゑよしなきにもあらじかし」と述べるのである（詳細は筆者の他書を参照にしていた^キきたい）。涼庵を読み始めて五年ほど、真澄は十年以上読んでいるのに、真澄より十八歳年長の涼庵が現実の存在として捉えられるのに対し、真澄を神秘的に感じるのは、このような精神世界に住んでいたからなのであるか。

「葦の山口」の涼庵の文章の引用の仕方から、真澄の資質が明らかに思ったように思われる。

おわりに

「葦の山口」からは真澄が秋田の人となった姿が読み取れる。ただし、一部で囁かれるように真澄は故郷から身を隠しているわけでもなく、捨てた訳でもない。この「葦の山口」に「三河国菅江真澄」と署名しているのである。一月二十三日の歌会では「故郷をおもひ吾国の名処を」という題で「衣の里」という三河の歌枕を詠んでいる。また、齋藤彦磨の書を読み「故郷しきりになつかしく」と書き、^{やはぎ}箭作の郷に花見したことを思い出している（二月二十七日）。望郷は旅の始まりから絶えず真澄につきまとうものだった。晩年の域に達してそれは加速度を増したようであるが、帰郷しようとは考えなかった。故郷にはとうに父母もなく、久保田では重要な仕事と友と勉強や詠歌の環境に恵まれている。帰る理由などないのである。

真澄が無意識裡に秋田の人であることを示す例を挙げてみよう。

是観上人が故郷越後国に法事があつて旅出つときに、真澄は寺町のはずれまで見送りをし、「秋はとく帰りませ、しば

しの名残にこそあらめ」と言葉をかけ、和歌を贈る。また、八沢木の太友吉言が武蔵国に出かけるときも大戸まで見送りし、「とく帰り来ませ」と声をかけている。これはかつての真澄の立場と逆転している。真澄はかつて、しばらく親しんだ土地から次の旅先に移るとき、土地の人たちから「早くお帰りください」と口々に声を掛けられていたのである。今は真澄が掛ける側になって、旅立つ人に「早く帰って来てください」と声を掛けている。明らかに秋田を終の棲処と認識しているのである。

三河に生まれ、青年期十年間を尾張名古屋で勉強し、それからの長い長い旅の人生においては、三河も秋田も精神的にさつと飛び越えられる範囲ではなかったか。それが今日のな意味のグローバルな視野というのではなくて、過去の時間をやすやすと超えたのと同様に、空間もたやすく超えることができる精神性の持ち主のように思われる。真澄がこだわった常陸坊海存とか清悦とか白比丘尼など、何百年も生きながらえている存在は空間も瞬く間に移動できる。このような精神世界のうちに真澄は久保田で生を終えたように思われる。「葦の山口」を書いた七年後に。

なお考え続けてみたい問題である。

了

注1 内山真龍著『真龍日記』安永六年二月廿日の条。浜

松市立内山真龍資料館蔵

注2 小沢魯庵（一七二三～一八〇二）江戸期歌人。尾

張国犬山藩京都留守居役本莊三承の養子となり、一七三九年に京都に出て鷹司家に仕え、冷泉為村に和歌を学んだが、その伝統歌風に逆らって破門された。後、一家の説を立て「ただごと歌」を提唱した。自然の真情を平易な言葉で詠み、作為や技巧を斥け近世歌学の新生面を拓いた。『六帖詠草』はその歌集（文化八＝一八一）。『文化八』一八一。

注3 拙書『菅江真澄の見た仙台』大崎八幡宮

二〇一三年八月発行

拙書『菅江真澄の文芸生活』第二部第四章

おうふう 二〇一四年三月

※本稿は、平成二十七年七月十一日、秋田県立博物館講堂における講演を文章化したものです。

内田武志における丹羽嘉言論の形成——真澄若年期の名乗の解明過程——

松山 修

はじめに

本稿の題に「丹羽嘉言論」^{にわのぶのろん}を附したが、内田武志が丹羽嘉言について一章を立てて論じたことはない。

しかしながら、内田による真澄研究の集大成となった未来社刊『菅江真澄全集』別巻一（以下、全集別巻一と略記する）、その「第一章 白太夫の子孫」「第二章 故郷」「第三章 尾張・修行」「第四章 白井秀超」では、丹羽嘉言に関する事柄が随所で述べられている。

全集別巻一・第一章と第四章の論は、内田が菅江真澄の出自と故郷についての論を展開したものであり、その到達点になっている。この論を、真澄研究への丹羽嘉言の登場と考察の推移を基軸にして見ていくと、真澄若年期の名乗の解明過程が一筋になって見えてくる。

真澄若年期の名乗の解明は、若年期の学びのあり方を解明することともなり、ひいては、真澄の出自や故郷に関わる考察にもつながってくる。

真澄若年期の名乗から、岡崎の国分伯機・九一父子が真澄

研究に登場することとなり、そのことが吉田（豊橋）の植田義方と真澄との関係にも新たな視点を加えることになった。さらに、天竜の内山真龍との関わりも取り沙汰されることにつながったのである。

今年度、内田文庫（館蔵）を整理する中で、内田が丹羽嘉言と真澄との関係について知り、真澄若年期の名乗を解明していく際の資料（書簡、原稿、写真）を見出すことができた。本稿は、先学の論考を捫り所としながら、それらを構成し直すだけとなるが、本稿の後段に掲載する丹羽嘉言著『江山清菜』や『謝庵遺稿』を絡めながら私考を論じてみたい。

なお、本稿で引用する書簡や文献のうち、頻出するものについては略称を用いる。略称の仕方については本稿中で示しているが、本稿末にまとめて再掲する。書簡は、掲出順ではなく年月日順の番号を附しているので、御注意いただきたい。また、引用する書簡や文献における註釈や誤記の指摘については、（筆者註）として引用文中に示す。

一 真澄研究への丹羽嘉言の登場

真澄研究における丹羽嘉言の登場は、一通の書簡から始まった。

愛知県西枇杷島町（現清須市）に住む水谷源二郎という人物から、内田武志に宛てて昭和四十二年三月十六日付で送られた書簡である（以下、〈水谷書簡1〉と略記する）。

この書簡は次の文言から始まる。

唐突ながら一筆啓上。菅江真澄に関する貴下の御研究の業績引続き拝読致し居ります。天明三年以前の真澄の華実に関しても、柳田翁の業績に加上新見を示され、ことに東洋文庫本第一冊の序説とも云ふべき「菅江真澄といふ人」に於て、一段の新見面白く拝見致しました。（〈水谷書簡1〉）

内田は、昭和四十年（一九六五）からの三年間、平凡社東洋文庫から『菅江真澄遊覧記』（現代語訳、全五巻）を出版している。『菅江真澄遊覧記1』には、それまでの二十年間にわたる真澄研究の成果として、「菅江真澄というひと」という一文が巻頭に掲載された。その中の「故郷」という項目で、内田は、真澄が「おのれも一たびまなびのおよとせし人也」（『全集別巻1・272頁に資料写真掲載）とした植田義方

についての考察を展開している。真澄は、幼年時代を吉田（豊橋）で植田義方に附いて学んで過ごし、「やがて青年時代になると、真澄の生家は豊橋から岡崎へ移転したように考えられる」（『菅江真澄遊覧記1』12頁）とした。

のちに内田は、全集別巻一で、真澄の故郷を岡崎とする論に変化することになるが、この時点では、真澄が植田義方に「まなびのおよとせし」と表現していること、また、真澄が旅先から義方に手紙やいくつかの贈り物をしていることなどから、植田義方との師弟関係を重視したのであった。なお、真澄から植田義方への五つの贈り物については、全集別巻一・65頁に詳しいが、この時点での内田は、柳田国男著『菅江真澄』（創元社、昭和十七年）の記述を論拠としている。

項目「故郷」では、内田が故郷に関する論を展開しているものの、これから水谷源二郎が指摘することになる真澄若年期の名乗、それに名古屋での学問のことには触れていない。

水谷は、『菅江真澄遊覧記1』の「菅江真澄というひと」を読み、かつて水谷自身が柳田国男に指摘した「秀超」について全く触れられていなかったことから、内田に対して、秀超が真澄若年期の名乗であることを教示することになったのである。

この「秀超」について、かつて柳田国男は、植田家（植田

義方の子孫宅)に残る『国風俗』に書かれた「白井秀超」と真澄との関連を指摘したことがある。

最も早い時期の資料は、現在、秋田県公文書館が所蔵する「東山太三郎宛柳田国男書状」(東山文庫、A H 2 8 9—295)である。

そこには、次のようにある。

一、真野萱原の尾花、天明七年十一月、白井英二生より送り来ると上書せるもの。

二、写本「国風俗」(古謡、節ハカセあるもの)奥書に真淵書入本の写、宣長、田中道麿、白井秀超と三人の次々に伝写したる旨、安永七年十月三日、書記したるもの。

右二品を発見致し候よしにて実物を一見いたし候。白井秀超は貼紙に白井幾代二主と有之、真澄翁は本名「白井英二秀雄」なれば、年代より推して多分父子なるべく、同時に学問の伝統も大要窺ひ知らるゝ心地いたし候。(筆者註：実資料と全集別巻一・109頁にある翻刻を校合した)

しかし、柳田はその後、例えば「白井秀雄と其著述」(初出は昭和四年『紙魚』二十六号)では、「国風俗」が「東風俗」、「白井秀超」が「白井幾代二秀規」に変わり、「多分はそれが

父であり、其父も亦植田氏の先代と交際のあったことが想像せられるのである」との見解を示すことになる。

たとえ表記が、東山太三郎に示した「白井秀超」のままであつたにしても、名乗が「白井英二秀雄」とは異なる以上、真澄と関連のある人物だとはしながらも、真澄自身であるとの考えには至らなかつたであろう。そのため、真澄研究では「白井秀超」あるいは「白井幾代二」について、それ以上の言及や追究がなされることはなかつたのである。

内田も、「このようにして、白井秀超問題は進展することがなく、それから三〇年も経過した」(全集別巻一・114頁)と述懐している。

「東山太三郎宛柳田国男書状」の実際を見ると、「超」のくずし字が「規」とも読めるようなくずし字になっている。柳田の誤記の原因は、柳田自身がメモをした文字のくずし方にあつたのではないかと思われる。

内田自身、『国風俗』の実資料に当たることができなかったことから、柳田の誤謬と解釈の影響下にあつたこととなり、とりたてて「秀超」に言及することはなかつたのである。

さて、水谷の書簡は、次のように続く(ここからの文言は、全集別巻一・115頁で紹介されている)。

別紙に畧述致しました意見を私は昭和三十四年頃から持つて居ます。御参考迄に座右に供します。要領のみ述べて細説を避けた為、御理解になり難い点もあることと思ひます。別紙に申上げた「湖東游記」「胆吹遊草」何れも写本のみ伝はり刊本はありません。家蔵写本は富岡鉄斎の旧蔵本です。貴下の菅江真澄研究の御完成の一助ともなれかしと念願して一書啓上致した次第、不悪思召下さい。(水谷書簡1)

水谷の本論部分にあたる便箋十枚の内容については、丹羽嘉言の人物像について触れる八枚目の後半以降を除き、全集別巻1・115～117頁にそのまま紹介されている。

水谷の書簡のほぼ全文を全集別巻1に掲載すること、内田は水谷の私論に論拠を求めると同時に、その見識に敬意を表したものであらう。

本稿での全文の再掲は割愛するが、水谷は、本論を次の一節から始める。

結論から先に言へば、白井秀超と白井秀雄(筆者註:菅江真澄が旅に出てからの名乗)とは同一人である。

白井秀雄が天明三年、大旅行に出る以前の或時期に名古屋に在留して居たことは、菅江真澄遊覧記一の「菅江真澄という

ひと」に説かれてある様に「彼の後年の記録に尾張の記事がとくに多く、名古屋に暮らして居たことがありそうに思える」と云ふ推測の通りである。ことに「わがこころ」の解説本の最後に胡桃沢勘内稿の「信濃路までの白井秀雄」の安永九年庚子の記事は甚だ興味ある記録である。(水谷書簡1)

内田が「彼の後年の記録に尾張の記事がとくに多く」としたのは、『菅江真澄未刊文献集一』(日本常民文化研究所、昭和二十八年)を出版した際、「尾張ノ国」の記述をまとめたことからの成果であらう。また、胡桃沢勘内は、『わがこころ』の解説本(校訂本)(真澄遊覧記刊行会、昭和四年)の中で、『筆のまゝ』に見える歌や文を、安永九年の三河での事柄として解釈した。水谷が指摘したのは、その二つの事柄なのである。〈水谷書簡1〉のその後にある論拠部分のうち、丹羽嘉言に関わる部分を次に引用する。実際の便箋の三枚目後半から五枚目終わりにかけての内容となる。

なお、本稿での論を展開するために、A、B、C、Dのアルファベットを附すことにする。

A

一、安永八年五月、名古屋の文人画家丹羽嘉言は、名古屋東

郊の御名山般若台の別業の清閑亭を修理し、その完工の祝宴をあげて居る。招かれた客三、四名の中に白井秀超の名が見える（丹羽嘉言の遺稿を享和二年に刊行した『謝庵遺稿』の一文「重修清閑亭記」より）。

B

二、安永九年五月、丹羽嘉言は三河の人白井秀超外二名と共に伊吹山から竹生島へかけて採薬を名目とする遊覧旅行を試みて居る。五月二日、名古屋出発、五月四日、伊吹登山、全九日、名古屋帰着。漢文の「湖東游記」和文の「胆吹遊草」各一篇の紀行文を残して居る。ことにこの和文による紀行には、白井秀超の起草した旅行記を随時引用し、和歌は大部分、秀超の詠草を採録して居る。

C

この旅の記録と白井秀雄の《筆のまにまに》其他に記述してある近江国の記事との類似は注目すべきものがあるばかりでなく、《ひなのひとぶし》に採録されて居る近江国の唄の二三がこの紀行文にも記録されている。かつて近江国伊吹山に採薬旅行を五月五日に行なつたと白井秀雄が《筆のまにまに》に書きのこした事実と重ね合せて考えて、大してずれはない。

D

かくて天明元（安永一〇）年の浄瑠璃姫六百回忌詩歌連諸募

集の趣意書の源秀超が想起されねばならない。多言を費さずに言えば、《筆のまま》に他人の文章を書き入れるよりも自己の文章を書き込むことの方がより多く可能性があると考えてみたい。（以上、A～Dは《水谷書簡1》）

右に示した《水谷書簡1》によつて初めて、内田武志は丹羽嘉言の存在を知るとともに、「白井秀超」が真澄若年期の名乗であつたことを知つたのである。

真澄研究に丹羽嘉言が初めて登場したと同時に、柳田国男によつて一度は真澄研究で話題にされながら、それまで論じられることがなかつた「白井秀超」が、この書簡によつて再び脚光を浴びることになった。

水谷源二郎からの教示を受けた内田武志は、愛知県に住む地域史研究者から資料探索の協力を得ながら、丹羽嘉言と真澄との交友を軸に真澄の故郷論を打ち立てていくことになる。

なお、内田文庫に残る、特に岡崎に住む研究者との書簡での遣り取りは、武志・ハチ（内田ハチは武志の妹で、当時は秋田大学教官）の連名か、ハチ宛のものが多く、武志の血友病の病状によつて、内田ハチが真澄研究の手助けをする割合が大きかったことをうかがわせる。

本稿では、まず先に示したA～Dの内容について、順に見ていくことにしたい。

二 丹羽嘉言の『謝庵遺稿』（A関連）

南画家として知られる丹羽嘉言（一七四二～一八六）は、水谷源二郎から内田武志への一通の書簡によって、にわかには真澄研究に登場した。

丹羽嘉言にゆかりのある寺院に、名古屋市昭和区の曹洞宗香積院がある。丹羽嘉言は香積院の住職だったわけではなく、隠居寺（別業）である般若台（一kmほど離れたところにある）に、師匠と仰いだ雲臥上人を慕って隠遁生活を送った人物である。元は尾張藩の陪臣であった。

『名古屋市史』第五巻学芸編（昭和四年）では、丹羽嘉言を次のように紹介する。（旧字を新字に直し、適宜ルビを振る。また、誤字をルビ位置に正す。「」内は割註を示している。）

丹羽嘉言、字は彰甫、通称は新次郎、謝庵、福善齋、聚珍堂、名士閣等の号あり、本藩竹中氏「八百石家」の家士なり、幼より経史^{けいし}を読み、詩文に工^{たくみ}なり、又画を好む、家仏法を奉ずること至^{いた}れり、嘉言清淡にして利に近^{ちか}かず、蘇子瞻、李笠翁の人と為りを慕ひ、少より名勝を遊覧するを好む、壮年の時

過失ありて、其妻を去りたる後は、煩はしとて再び娶らず、独居して余財あり、乃ち悉く之を親戚某に与へて、我命の有らん限り、幾分の扶助を供給せしむ、夫より城東般若台に入り、雲臥^{うんぎ}禅師に随ひ、禅理を究む、室を榭庵^{せあ}と号す、閑あれば画图を作り、以て風流の楽を為す、其描く所の山水、元明の風格に協^{かな}ひ、其妙一時に独歩す、清遠の趣、雅淡^{いた}の致、後の有識者亦以て其人と為りを知るに足れり、晩年絵事益々奇なり、画譜数帖を著す、其余著述の書画及び模古名蹟、往々人に取り去られ、散逸して紀すなし、天明六年三月十六日没す、年四十五、榭庵^{せあ}の西北百歩の地に、其茶毘^{だび}の骨を瘞^うむ、嘉言酒を嗜み、或時は劍槍を講じ、以て壮気を養ふ、嘗て富士山の真を写さんと欲し、往^{おもむ}いて山麓に徘徊するもの数日、其皎麗雄峻^{けうれいゆうこん}の神を伝へて帰る、興到れば便ち画く、人争うて宝とす、其著す所謝庵遺稿あり「碑叢、謝庵遺稿、愛知郡誌、古画備考、張城人物誌、名古屋人物史料、見聞雜割、中京画談」

文末の割註（「」内）に示されたのは、参考文献である。その一つに「謝庵遺稿」がある。

この『謝庵遺稿』とは、儒学者・国学者と知られる鈴木艮が、丹羽嘉言の遺稿をまとめて刊行したものである。その『謝庵遺稿』に、尾張南画のパトロンの存在であったという神谷天

遊（名が元等、字が斎卿）が序文を寄せている。右掲の『名古屋市史』第五卷学芸編の記事は、その文言と多くの部分で重複する（神谷斎卿の序文は、本誌後段で影印として示す）。

さて、水谷がAで例証として示した「重修清閑亭記」は、『謝庵遺稿』の六番目に収められた文章（漢文）である。

影印は本誌の後段に示す通りである。鈴木服によると考えられるが、漢文には訓点が施されている。訓点は読み下しの参考となるため、そのまま翻刻する。

読み下しは、すでに、岡崎地方史研究会の仲彰一がおこなっているもので、それを参考にしながら、新たに読み下しをおこなう。漢字の読みについては、和語の場合は送り仮名と整合させるために歴史的仮名遣い、漢語の場合は現代仮名遣いで、適宜、（ ）内に読み方を示す。

なお、仲彰一論考の出典は、「丹羽嘉言と鈴木服―菅江真澄の視座より―」（鈴木服学会『文莫』第十四号所収）に拠る（以下、『視座』と略記する）。

重修清閑亭一記

古人云、一日清閑一日仙、蓋謂得_レ仙非_レ難、得_レ閑不_レ易也、予既以_二清閑一名_レ亭、随_レ分証_二仙者、多_二年于茲_一、是歲春間、亭壞、亦已矣、何必更作、惟予山居三年、友人時辱_二訪問_一、

不_レ俾_二予專主_二此亭_一、於_レ是復囑_二匠人福_二者_一、重修_二古趾_一、刈_レ麥以_レ葺_レ之、亭成而會者、神谷斎卿、大野瑞星、山田有年、白井秀超、皆喜_レ得_二半日閑_一、吐_二欲_レ言_レ之言_一、飲_二適_レ量_一之酒、欣然尽_レ飲而別、時安永八年五月十五日也、予素昧_二韻語_一、是日偶得_二四句_一、云、梅雨新晴峯_レ世醒、山翁更醉葺_二茅亭_一、四簷依_レ旧邀_二明月_一、長飲_二潮光_一对_二遠汀_一、併記以俟_二識者笑_一云

清閑亭を重修するの記

古人云く、一日清閑なれば、一日仙なりと。蓋し謂ふ、仙を得るは難きに非ず、閑を得るは易からざる也と。予既に清閑を以て亭に名づけ、分に随ひて仙を証するは、茲に多年なり。是の歳の春間、亭を壊すこと、亦やんぬるかな。何ぞ必ずしも更に作らん。惟（おも）ふに予の山居の三年、友人時に訪問して辱くするも、予専ら此の亭に主していやしめず。是に於ひて復た匠人福二なる者に囑して、重ねて故趾を修す。麦を刈り、以て之れを葺く。亭成りて会するは、神谷斎卿・大野瑞星・山田有年・白井秀超なり。皆半日の閑を得たるを喜び、言はんと欲するの言を吐き、量適するの酒を飲み、欣然として飲を尽して別る。時に安永八年五月十五日也。予、素より韻語に昧（くら）し。是の日、偶（たまたま）四句を得

たり。云く、梅雨新たに晴れて世を挙げて醒む。山翁更に酔ひて茅亭を葺く。四簷（しえん）旧に依て明月に邀（むか）ふ。長く潮光に飲して遠汀に対すと。併せて記し、以て識者の笑ひを俟つと云ふ。

内田は、全集別巻一・87頁で、「安永八（一七七九）年には嘉言は清閑亭修理の完工祝いに、神谷齊卿、大野瑞星、山田有年、白井秀超を招いた。半日語りただけ語り、適量の酒を飲んで欣然と飲を盛して別れたという」と、この「重修清閑亭記」をまとめている。

水谷が〈水谷書簡1〉で教示した白井秀超と『謝庵遺稿』とのかわりは、「重修清閑亭記」だけであったが、この七年後の昭和四十九年、仲彰一によって真澄の遺墨資料である「般室記」と「石居記」が見出されるに至って、『謝庵遺稿』の第三項目の「般室記」、第四項目の「石居記」がにわかに関連を持つことになるのである。

そのことについては、本稿五で述べる。

三 「湖東游記」と「胆吹遊草」（B 関連）

前掲Bで、水谷源二郎は、「伊吹山登山の記録は」漢文の「湖東游記」和文の「胆吹遊草」各一篇の紀行文を残して居る」

と内田に伝えている。伊吹山登山をおこなった際の同じ内容の紀行文が、一方は漢文で書かれ、一方は和文で書かれたというのである。

伊吹山は、日本国語大辞典によると、「滋賀・岐阜県境にある伊吹山地の主峰。日本武尊が東征の帰途、あらぶる神のたたりを受けたという伝説がある。高山植物、薬草が豊富。標高一三三七メートル」とある。

内田文庫に残る水谷からの他の書簡によると、昭和四十二年七月二十日付書簡（以下、〈水谷書簡4〉と略記する）とともに、家蔵本のマイクロフィルムが送られている。

それに先立つ昭和四十二年六月二十三日付書簡（以下、〈水谷書簡3〉と略記する）で、「目下のところは刈谷図書館本と家蔵の富岡鉄斎旧蔵本とをテキストとする外ないと思います」と伝えているように、その時点で確認できる資料は、刈谷図書館（現在の刈谷市中央図書館）蔵本、水谷源二郎家蔵本の二点だけであった。

内田文庫には、水谷源二郎家蔵本の写真六葉、それに絵三図の描き写しがある。それによると、表紙には「江山清楽」、その後に見開き三図が綴られ、漢文の「湖東游記」、嘉言の識語（再識）、丁（ちょう）を新たにして和文（擬古文）の「胆吹遊草」、それに浅井図南の跋文が綴られていたことがわ

かる。浅井図南の跋文の前に、鈴木胤の跋文があつたものと考えられる。

一方、現在の刈谷市中央図書館蔵本では、絵三図、漢文の「湖東游記」の後に、嘉言の識語（再識）、鈴木胤の跋文、浅井図南の跋文と並び、その後に和文の「胆吹遊草」が続いている。

跋文の位置は、跋文が書かれた経緯とも関わることから即断はできないが、書物の識語や跋文の並びからいえば、水谷源二郎家蔵本が原本に近い写しであつたと考えられる。

いずれにしても、漢文と和文とを組み合わせ、『江山清樂』という一冊にしたものである。そのため、本稿では、「湖東游記」、「胆吹遊草」と、カギ括弧のみの表記とする。これは、「水谷書簡1」にある実際の表記と同じである。

全集別巻一・85～96頁に翻刻された「湖東游記」「胆吹遊草」の全文は、「次掲の水谷源二郎家蔵本」とあることから、マイクロフィルムからの翻刻と考えられる。

翻刻の後に「この後に、庚子初秋に書いた鈴木胤の跋文があるが、これは省略する」（全集別巻一・96頁）とある。

これは、「水谷書簡3」で、「これは直接御利用せられることもあるまじき点とは思いますが、刈谷本も家蔵本も鈴木朗（筆者註：朗と胤は同字）の跋に重大な誤写があります」と

しているからであろう。鈴木胤の跋文には誤写があるとの水谷の認識に基づき、全集別巻一では掲載を省略したのである。

「湖東游記」と「胆吹遊草」は、漢文と和文との違いはあつても、同じ紀行を記録したものである。そのため、水谷が要約したように、「安永九年五月、丹羽嘉言は三河の人白井秀超外二名と共に伊吹山から竹生島へかけて採葉を名目とする遊覧旅行を試みて居る。五月二日、名古屋出發、五月四日、伊吹登山、全九日、名古屋帰着」（前掲Bの文言）が概略となる。

ただし、誇張の効いた漢文表現と細やかな和文表現の違いがあることに加え、遊覧地での細部の行動に記述の濃淡がある。そのため、双方を補完しながら読むと、安永九年五月の「遊覧旅行」の全貌が見えてくることになる。

ちなみに、水谷が「採葉を名目とする遊覧旅行」（傍点は筆者）と表現したように、「採葉」は、伊吹山が薬草の宝庫として有名だったことからの命名であり、四人による遊覧旅行の口実であつた。採葉を主目的とした紀行ではなかったことは、「余曰く、浪遊（ろうゆう）に名無く、人の怪しむ所と為らん。聞くならく、吹嶺薬草多しと。是の行（こう）之に採葉と名づけ、端午を以て期と為さんこと如何（いかん）」（後掲の「湖東游記」、本誌78頁）にある文言からも読み取

ることができる。浪遊に名目がなくては人に不審に思われるので、採薬と名付け、しかも薬狩りの古例に倣って五月五日に伊吹山登山をしようとしたのである。

漢文と和文ともに、全集別巻一に掲載されているように長文である。真澄と丹羽嘉言との交流を知るには、兎にも角にもテキストを読むことが基本となる。そのため、本誌では解釈しやすいような工夫をして、後段に掲載する。参考にしていただきたい。

さて、前掲Bで水谷は、「この和文による紀行には、白井秀超の起草した旅行記を随時引用し、和歌は大部分、秀超の詠草を採録して居る」としている。

これは、和文「胆吹遊草」の最後の部分に、次の文言があることを指している。

ある人あやしみて、「およそ紀行てふもの、みな自己の歌からうた（漢詩）を連ねて、はじめ終りを記せるものなり。この紀の歌は白生に出づ。かゝるためし（例）は有りや」と問ふ。答へて曰く、「蓋しこれ有らん。われ未だこれを見ず。もしそれなくば、これを以て初めとせん。たゞ正体にはあらざるべし。且此記わが遊記を補はんが為なり。ひとり伊吹に専らなるは、薬採の名を慕へり。にはかに後におろそかなる

は、あし（足、葦）手倦みたるが故なり」。人の笑ひを顧みるに暇なくなん。（後掲の「胆吹遊草」、本誌97頁）

紀行というものは、おのれの歌や漢詩を連ねて書くものであるのに、この「胆吹遊草」は白井超の歌を連ねている。このような例はあるものかどうか、嘉言は問われた。それに対して嘉言は次のように答える。そのようなこともある。ただし、自分はこれまでそのような例を知らない。もしなければ、これを初めとする。この「胆吹遊草」は、私の遊記（筆者註：「湖東遊記」のこと）を補うためである。後半がおろそかな記述になったのは、病氣のために筆が衰えたためである。

意識をすると、右のようになるだろう。水谷の見解である「白井秀超の起草した旅行記を随時引用し、和歌は大部分、秀超の詠草を採録して居る」が妥当と思われる。

しかし、内田の見解は異なる。

この『胆吹遊草』は、「白井超」の和歌を挿入しただけではなく、「白井超」自身の文であって、それを嘉言の書いたような文辞にしたものと思われる。『胆吹遊草』の末尾に、「此記、わが遊記を補はんが為なり」と嘉言が記していることは、「わたくしのこれから作る遊記、すなわち『湖東遊記』を補助す

るため記されたものだ」の意であろう。（全集別巻一・84頁）

内田の右の見解には、跋文を書いた尾張藩医・浅井図南が関係している。浅井図南の跋文には、「一日謝庵主人者、託人贈江山清楽一通（一日、謝庵主人なる者、人に託して江山清楽一通を贈る）」（後掲の「浅井図南跋文」、本誌98頁）とある。

浅井図南の跋文によれば、「江山清楽」を図南の許に持参したのは、丹羽嘉言ではなく、その使いの者であると記されている。あるいは、白井秀超すなわち真澄ではなかったろうか。採葉旅行の日々を語ることが真澄において他にないと思われる。丹羽嘉言が漢文体で『湖東游記』を記したとき、真澄が『胆吹遊草』を、彼なりの文体でものしていたことは、さきにも述べたところである。（全集別巻一・97頁）

浅井図南と真澄との交流は、『雪の出羽路平鹿郡十二』に「もとも正骨、接骨ノ医術あり、尾張の浅井家の如し」（『菅江真澄全集』第六巻446頁）が根拠とされている。そのことと、『江山清楽』の旅が「採葉旅行」の一面を持っていたと規定した上で、内田は右のように推測したのである。「胆吹遊草」

を真澄自身が書いたからこそ、旧知の浅井図南に「採葉旅行」を語って聞かせ、『江山清楽』に跋文を頼んだというのである。浅井図南が跋文を書いた経緯に関する内田の推測が仮にそうであつたにしても、「胆吹遊草」の記述からは、「胆吹遊草」の多くを白井秀超の旅行記を引用しながらも、やはり丹羽嘉言が書いたとする水谷の見解を支持せざるを得ない。

四 真澄の記述との関連（C関連、水谷源二郎について）

〈水谷書簡1〉のCでは、「胆吹遊草」にある内容が、『筆のまにまに』と『ひなの一ふし』に関わることが指摘されていた。

菅江真澄による全九巻の随筆『筆のまにまに』は、内田武志の『菅江真澄未刊文献集二』（日本常民文化研究所、昭和二十九年）が初めての翻刻であつた。また、『ひなの一ふし』は、昭和五年、郷土研究会からの出版が初めての翻刻であつた。水谷は、その内容を読み込んだ的確に指摘したことになつた。

Cにある指摘について、内田は、「この作業の結果はすでに、『菅江真澄に見られる科学的記録―その四、伊吹山採葉のこと』（以下、『伊吹山採葉』と略記する）に発表されている」（全集別巻一・118頁）と書く。これは、真澄研究を兄・

武志ともに進めていた内田ハチが、水谷の指摘に基づき、「胆吹遊草」と真澄の著作との関連性を論究したものである。右論考は、昭和四十三年二月の『秋田大学教育学部研究紀要 教育科学 第一八集』に掲載された。

同論考では、「胆吹遊草」の中に、十箇所の真澄著作との関連を指摘している。

具体的には、『筆のまにまに』九巻「柏原の太刀」が四箇所、『男鹿の秋風』が二箇所、『ひなの一ふし』が一箇所、『月の出羽路河辺郡』が一箇所、断簡が一箇所（内田ハチは「未刊文献集」を挙げている。『おがらの滝』に類似箇所がある）、『水魚の村君』の一箇所の計十箇所について、「胆吹遊草」の記述内容との符号を挙げたのである。

内田ハチによるここでの指摘は、内田武志が『菅江真澄未刊文献集一』（前掲）に発表した「年譜及び著書解題を主とした真澄伝の研究」の「天明三年以前」「近江/国」（同書30頁）で、関係箇所を拾い出している成果に基づいたものである。

ところで、水谷からの来信（水谷書簡1）を受け、『謝庵遺稿』等の資料確認と、水谷源二郎の人となりを調べることを依頼されたのが、愛知県下の公立高校に勤める浅井敏であった。

浅井からの昭和四十二年四月四日付書簡（以下、〈浅井書簡1〉と略記する）では、『謝庵遺稿』の内容を確認するために名古屋中央図書館（現、名古屋市鶴舞中央図書館）、さらに、「胆吹遊草」と「湖東遊記」の内容を確認するために刈谷図書館（現、刈谷市立中央図書館）に行ったことが記されている。ただし、時間の制約と分量の多さなどから、十分な考察に基づいた報告はなされていない。それでも、資料の一部分を丹念に書き写しているほか、継続して調査する旨を書き添え、まずは第一報として内田武志に報告したのである。そのような中で、浅井敏が水谷源二郎に会ったのは、翌月、五月五日であった。

愛知県西春日井郡西枇杷島町に水谷源二郎氏（茶源といわれる代々の醸造業家）がおられる。昭和四十二年五月五日、内田武志先生の命でこの水谷氏に会った。（『菅江真澄のふるさと』72頁、再掲の『続菅江真澄のふるさと』43頁）

内田文庫に残る昭和四十二年七月四日消印書簡（宛先は「内田ハチ先生」となっている。以下、〈浅井書簡2〉と略記する）で、浅井敏は、次のように報告している。

茶源といわれる代々の醸造業を営んでいた水谷源二郎を、

浅井は突然に訪ねた。「突然おうかがいしたため、ひどく立腹せられたが、話しているうちにすぐやわらいだお顔に変わった。東京都知事的美濃部さんのような顔である」とある。水谷源二郎の手柄が伝わってくるような描写である。

また、「なかなかの博学者で」として、「漢学、国学もかなり専門的な知識をもっておられて、口から出てくる数々の説明に終始圧倒され、スゴイ人だなと思って拝聴していた」と、水谷があらゆる書物を渉獵していることを伝えている。「昔は、棟方志功が世話になっていた。柳田国男氏とも親交があったらしい」などとも書く。

浅井は、その後の何度かの水谷との面会を通して、丹羽嘉言と真澄との交流や、師弟関係を示唆する資料の提供を受けたようだ。それを内田に伝えながら、自身も考察を進めていく。そして、昭和四十五年一月の「幻の故郷を尋ねて」（『菅江真澄のふるさと』所収、私家版）で、それまでの研究・考察に基づき、真澄若年期の年譜を完成させたのである。

五 新たな資料の発見 1（丹羽嘉言との関連）

真澄研究に「秀超」が登場したことにより、昭和四十九年と昭和五十年、愛知県岡崎市で、「超」「秀超」の署名のある真澄自筆の資料三点が発見されることにつながった。

資料三点は、内田に、「筆跡は明らかに真澄である」（『般室記』）、「筆跡は明らかに真澄と判断される」（『石居記』）、「やはり、後年の真澄と同一筆跡と思われる」（『市隠亭記』）（以上は全集別巻一・119頁以降にある表現）と言わしめるほど、真澄の特徴が出た筆跡となっている。

水谷の書簡によって「秀超」「超」が真澄であることが示され、また逆に、内田からは、真澄の筆跡をもって「秀超」「超」が真澄であることが確認されたことになる。

もし「秀超」や「超」が真澄若年期の名乗であることの認識がなければ、探し出すことができない資料であった。その意味でも、三点の資料の発見は、水谷源二郎から内田への教示の連続線上に位置するのである。

まず、昭和四十九年三月、仲彰一によって「般室記」「石居記」が発見された。

いずれの資料にも「超」の署名があるのだが、仲彰一は、「菅江真澄は岡崎に居た―真澄の真蹟発見の経緯―」（『続菅江真澄のふるさと』所収）に、資料について次のように述べている。

（筆者註：以下は「般室記」についての記述である）それは半紙大の良質紙（縦二九・五糎、横三四糎の奉書と判明）に細字でぎつしり書きこまれた、仮名文字の一葉であった。し

かも達筆流麗な細線の流れが凝滞を見せず一種の風韻を奏でている。漢詩文の硬い累々たる岩組の中に、たをやかな芽柳の風になびく描線のような、柔かな和文の妙が感じられた。しかも「般室記」と題する下の署名にたゞ一字「超」とあるのが眼を射た。超とは白井秀超、即ち菅江真澄に外ならないとは多くの研究者の一致した見解であつた。(『続菅江真澄のふるさと』138頁)

真澄の特徴のある筆跡及び筆致とはいえ、そこに「超」の署名があることと、そのころ真澄に興味を持つ岡崎の地方史研究者の間に、秀超＝真澄であるとの認識がなければ、真澄の自筆だとは判断できなかった資料である。

資料探索の経緯については、「菅江真澄は岡崎に居た―真澄の真蹟発見の経緯―」(前掲論考)に詳細に記されている。地方史研究の仲間が菅江真澄の故郷探究への熱意を語っていたことから、仲彰一自身も真澄に興味を持った。真澄が「おのれも一たびまなびのおよとせし人也」とした植田義方、その子孫の豊橋市小向町にある植田家を訪ねた。その帰り際、仲は植田哲郎氏から、植田家が岡崎で塩問屋を営んでいた国分家と関係があるようだとの示唆を受けたのである。

植田哲郎氏と別れる際、氏は岡崎市の国分家の事を訊ねられた。植田家の過去帳には国分家の戒名が数名載つて居り、また義方歿後、植田先生の死を悼む旨の弔文が届いている。よほどの親交があつた家と思われるが、訪ねたくても岡崎の電話帳には国分姓は見当らず、岡崎の知人に調べて貰つても市役所でも心当りがないといわれて、手がかりが掴めないと話された。(『続菅江真澄のふるさと』135頁)

右の遣り取りが、真澄研究にとって大きな展開をもたらすことになったのである。国分家はすでに断絶していたが、仲彰一は、遠縁の血筋にあたる杉山家が岡崎市内に住むことを突き止めて、資料探索をおこなつた。

「般室記」の発見について、「時は昭和四九年三月一二日午後三時半頃であつた」と、その日時まで記して、仲彰一は感動を書き留めている。

真澄の自筆である「石居記」については、「前掲の「般室記」に続いて発見された」と、「般室記」と間の置かない日に発見したことを示唆している。

「般室記」と「石居記」、それに『謝庵遺稿』によると、鴨長明の方丈に倣い、丹羽嘉言が般室(運搬する部屋)を造つた。そこに石ばかりが描かれていたことから、「般室」は「石居」

の別名を持つていたというのである。『謝庵遺稿』を読むと、漢文の簡潔な表現から般室Ⅱ石居である事情がわかる。般室が造られたのは、安永七年（二七七八）十月のことであった。全集別巻一・118～120頁に、「般室記」と「石居記」の写真と翻刻が示されている。

本稿では、読解の便宜を図るため、ルビ位置に漢字を宛てて提示する。

般室記 超

を治さ半ま嘉れる世のやす安ら言け主くな永が年き七とせといふ神か無みな月のなかば、よしのぶ立のぬしのすめるむろ室ひとつを、なにか某しのたぐみにつくらせて、みねにたてをのべ小にう野つし、谷移にいりふもと入にをる。はな花もみち、月雪四のよつ折のおり從にしたがひて、くるま車ふたつ二につみて、うつり行ゆくすみ住どころ処をたのしむ。こは長明昔のむかし在にならひ、名を般室諸となん袖ひける。

さく花在のありかた在づねてもろ人諸のそで袖にぞうつすむろ移の梅が、

神無月霜しも（の…見せ消ち）夜菊のきく折のおり逢にあひてう移つるいほり庵の句にほふ此ころ頃そことしもま枕くらさ定ためぬ庵心のみか月も任ころ移にまかせてぞすむ

石居記 超

たちな羽びくかすみのころ衣もきさ如らぎ月のはじめ、こなた初にはた撃くやま山鳥小の、を野のべ邊よりす少こ北きた西にし来ぞきて、う移つしも持て行般室様のさま云をい縦は横は十たてよことさ尺かに限かりてた、み三帖畳をし敷けり。板戸半はな折かば庇より折おりてひさしとす。すべて壁は板一にて、ひと所ころ開のすみ窓には季窓り翁ふおう傲にならひて、あやしのぬひ尺ものして、せき尺ふく窓そう窓をう穿かてり。これは閑情偶奇窓ちふ書度に見えたり。こた此びう移つせるところ処は、このまど窓をみなみ南ひん東がし向にむ宿かえて、おひ生かさ重なれる松の中より、さ巧やか写にたて建るやどり唐を絵及にぞ見る。いはゆる清閑亭也。た心くみ尽にう巧つしな巧せるもろ唐こし人尽の筆心をつ心くしたらんも、このけ氣は記ひ及にはお暮よ出ぶべからず。ひん東がし東は谷臨にのぞみ木て、こぶ深かくあ深はれ暮ふかし。く暮れてはさはらの根来くら鼻はん吹とて、むく歩つけ鼻なる白ぬ照ほ朝どい嘉とめづらし。きた北には木曾路望のみたけ、ゆ雪きい白とし照ろく朝てりて、あ主した嘉にのぞめば、すい水そう品も以てつ造くりな主せるが嘉とし。あるじ主よしのぶ言のぬ主し、よ四つのか壁べに八八のいは八ほ描を様系様かけり。そのさまたかく高いかめ白しく、さ堅ざれ石石のやち輪よ輪べた輪らん輪すがた輪かくあらんかし。みづ白からか堅たくな堅るい石し輪にた輪とへ、世石のほか輪に

転出心文作
まろびいでんこゝろをふみにつくりて、はんしちのひとつ
名を石居となづけ給ふつ。としごろ仏のみにちこゝろをよせ、
つねにそのすぢのたふときことをのみとき聞ゆれば、系がけ
る石もうなづくばかり見ゆめり。秀超、きのふけふそのかど
をたゞき、かしこましき世をしのびて、やすらかにながき八
とせのはる、般若窟の謝庵にありてこれをするす。

をかの春雨

ものゝ音するに、ふとめざめて、いほの戸おしひらけば、
いまやうつろふらんと、よしのをはつせのはなまで、しのぶ
につどふ軒のたま水の、とくくとおつるにぞしりぬ。遠
かたは海もやまも見えず、あたりに咲るいはつゝじのあめに
ぬりて、いろことにそめなしつれど、たゞ五月雨のこゝちし
て、郭公も音信かほなるに、ふるきうたなどおもひ出て、
いはつゝじいほでもしるしくれないのふりいでゝさくはる
さめのころ

前述したように、超（菅江真澄）が書いた二つの和文に相
応するように、丹羽嘉言著『謝庵遺稿』には、「般室」「石居
記」がある。

以下に、漢文の翻刻と読み下しを示す。

読み下しは、仲彰一が『視座』でおこなっているもので、そ

れを参考としながら、適宜、読みを（ ）内に示す。読みの
付け方は、本稿45頁と同様、和語については歴史的仮名遣
い、漢語については現代仮名遣いで示すことにする。

般室記

嘉言效三響蓮胤一、造一小室二、所レ謂縦横十尺、搬運両車、
結構之巧、不レ讓三古人一、匠人藤義和之所レ為也、既成、問
三名於客（二）、客曰、長明之趣也、寄三于和歌管絃一、今子為二
何事一、曰、般磳無為、与レ名朽乎、蓮胤之居也、創于日埜
山中一、今子止二何処一、曰、般若台上、乗レ化止乎、然則何
不三以レ般名レ之、曰、可哉、吾固欲レ以三搬移之義一、遂名
曰三般室一、紛々多義、寓二乎一字一、名亦室之寶也哉

般室記

嘉言、響（ひそ）み蓮胤に效（なら）ひ、一小室を造る。所謂、
縦横十尺、搬運両車、結構の巧は古人に譲らず。匠人藤義知
の為す所也。既に成りて、名を客に問ふ。客曰く、長明の趣
（のが）るゝや、和歌管弦に寄す。今、子何事をか為さんと。
曰く、般磳無為、名とともに朽ちんや。蓮胤の居や、日野山
中に創る。今、子何處にか止めんと。曰く、般若台上、化に
乗じて止まらんや。然らば、何んぞ、般を以て之れに名づけ

ざる。曰く、可なるかな。吾、固より般移の義を以てせんと欲し、遂に名づけて般室と曰ふ。紛々多義、一字に寓（よ）す。名は亦室の寶（まらうど）なるかな。

石居記

戊戌十月、繪_二石于室_一、八、於_レ是名_二石居_一、石居記_レ見_二其頑然_一、視_レ之則石、察_レ之則八、于_レ室、四壁之内曰_レ室、何以四壁繪_レ石、居士自比也、居士之比奈何、子曰、石無知之物也、居士之於_レ世、碌々無能、退居_二此室_一、般礪兀坐、共_二画石_一九、九者、数之極也、居士自謂無知無能、於_レ己極矣、石居之名、当_レ不_二虚傳_一者、唯其頑己、石居一名_二般室_一、自有_二般室記_一

石居記

戊戌（安永七年、一七七八年）十月、石を室に絵かくこと、八なり。是に於いて石居と名づく。石居、見るところを記すに、其の頑然たるを見る。之を視れば、則ち石なり。之を察すれば、則ち八なり。室において、四壁の内を室と曰ふ。何を以て四壁に石を絵がかん。居士自ら比すれば也。居士の比することいかん。子曰く、石は無知の物也。居士の世に於けるや碌々無能、退きて此の室に居し、般礪兀坐、画石と共に九な

り。九は数の極也。居士自ら謂く、無知無能、己れに於ひて極れり。石居の名、当に虚傳なるべからんとするは、唯其の頑なるのみ。石居、一に般室と名づく。自ら般室の記有り。

六 新たな資料の発見2（国分家の登場）

昭和五十年、岡崎市郷土館で資料整理をしていた新行和子、が、文書類の中から「市隱亭記」を発見した。

資料発見の年月については、『続々菅江真澄のふるさと』82頁に「昭和五十三年三月」とある。しかし、これは新行自らが岡崎市郷土館報二十九号（昭和五十年七月十五日発行）、同館報三十号（同年九月十五日発行）の二回に亘って資料報告を載せていることから、前書の「昭和五十三年三月」は明らかな誤植となる。正しくは「昭和五十年三月」であることからの誤植と考えるが、一方、仲彰一が「昭和五十年六月」（岡崎地方史研究会『研究紀要第四号』、昭和五十一年三月十日発行）としていることも書き添えておく。

「市隱亭記」の発見が昭和五十三年でなかったことは、この資料についての考察を取り入れた全集別巻一が、昭和五十二年に発行されていることから確認できる。

新行和子氏の逝去後、夫の新行紀一氏が、夫人の遺稿集として『菅江真澄と近世岡崎の文化』（桃山書房、平成十三年）

をまとめている。これは、『続々菅江真澄のふるさと』が元原稿となっているようだ。同書には参考となる論考が多いだけに、発見時期に関する誤植をここに訂正しておきたい。

新行和子は、「市隠亭記」発見時のことを、次のように記している。

昭和五十三年（筆者註：昭和五十年）三月、同館の収蔵文書を整理していた私は、そのなかから真澄出郷前の自筆文書一点を見出した。名古屋の湯浅四郎氏が郷土館に寄贈された文書中の一枚で、もとは伝馬町の塩問屋国分家から故大藤鎮太郎氏が譲りうけたものという。大藤氏夫人の没後整理され、その一部が湯浅氏のものとなり、さらに岡崎市に寄贈されたものである。（『続々菅江真澄のふるさと』82頁）

この「市隠亭記」が菅江真澄の自筆であるとの決め手になったのも、署名に「秀超」とあったことにある。すでに岡崎では、「超」の署名がある「般室記」、「超」の署名と「秀超」が文にある「石居記」が発見されていたからである。

ところで、先に紹介したように、仲彰一が二点の資料を見出したのは、国分家の遠縁の血筋を引く杉山家であった。杉山家資料の出処について、仲は次のように書き留めていた。

これ等の文書を集めたのは、岡崎最後の漢学者旧岡崎藩士大藤鎮太郎氏で漢学教授の傍ら古書店を営まれたので、国分家文書の散逸を惜しみ手に入り次第内容に随って分類編集し、自らハترون紙に貼って整理保管されたものを、氏歿後夫人から真野氏（筆者註：真野謙三）が譲り受け国分家由縁りの杉山氏宅へ持参したといわれる。（『続々菅江真澄のふるさと』140頁）

このことから、「般室記」「石居記」、それに「市隠亭記」のいずれもが国分家から出た資料であることがわかる。

新行和子の昭和五十年九月二十七日付内田ハチ宛書簡では、新資料発見の報告に併せて、「国分家文書は、現在、杉山家と、大藤鎮太郎氏の妻の妹にあたる大下さんという方が昨春郷土館に寄贈したもの、名古屋の湯浅四郎氏が郷土館に寄贈した分」と報告されている。つまり、国分家資料とは、この当時、三種の資料群の総称であったことがわかる。

岡崎市郷土館が閉館したり、杉山家資料が寄贈されたりしたことなどから、現在、ここまで紹介してきた「般室記」「石居記」「市隠亭記」はいずれも岡崎市美術博物館の所蔵となっている。加えて同館は、随筆《筆のまにまに》では、唯一の

現存自筆資料である第八巻を所蔵している。

過日、筆者は同館で資料調査させていただいたので、資料の類別と法量（縦×横）をここに記しておく。

軸装・卷子の本紙、（ ）内は資料全体

般室記（軸装） 29×32（124×44・5）

石居記（卷子） 27・5×67（縦31）

市隠亭記（軸装） 28×64（132×67）

筆のまにまに第八巻（冊子） 23・0×16・2

なお、新行和子が内田ハチに報告した三種の国分家資料は、現在、すべて岡崎市美術館の所蔵となっていることは右に示したとおりだが、三河武士のやかた家康館（岡崎市）が購入して岡崎市美術館に移管された資料を加えた四種が、現在の国分家資料を構成していることであった（平成二十八年一月、筆者の調査による）。

全集別巻一・121～122頁に、「市隠亭記」の写真と翻刻が示されている。

本文には年代を示す記述がなく、ただ「八月十二日」とあるだけである。発見者の新行和子によると、安永九年（一七八〇）のことと考えられるとしている（菅江真澄と岡崎）、『続々

菅江真澄のふるさと』85頁）。宝暦四年（一七五四）生まれで作成されている真澄の年譜でいうと、真澄数えて二十七歳のことになる。

本稿では、読解の便宜を図るため、ルビ位置に漢字を宛てて提示する。遺墨資料に題がないため、翻刻にあたっては、カギ括弧に入れて「市隠亭記」と表記する。

「市隠亭記」

八月十二日の夕、市隠亭にまかりて、おもふどちものうちかたらひまどゐして見居たるに、庭もせに生ひしけりたる木末よりやゝもり出たる月のけさやかに、むしの音などもしめやかなるに、あるじからうたやあらんやまと歌やいかゞなど聞えたるに、人々やがて韻わかちてもてわたりてつくり出たるは、たゞに見んよりなかくよしあるけしきなりけり。やつがれもそのしりべにをりて、からうたのの末にかきつき侍る。

秀超

楨の戸にたつの市人あらはれてくまなき月のかげや見るらんとなみのしげきにかへていくよしものどけき月の影やながめむ

国分家の市隠亭について、『新編 岡崎市史』総集編20は、次のように紹介している。

岡崎伝馬町の塩問屋国分次郎左衛門衡が寛保四年（一七四四）に自邸内に設けた書齋名。国分家は伝馬町の北側、門前町入口西角に店を構えていた。慶長十四年（一六〇九）伝馬町開設以来の家で塩問屋のほか、穀頭取や伝馬町の庄屋もたびたび勤めた。国分次郎左衛門（一七一三～一七八五）は名を衡、字を伯機と称し、商人ながら岡崎藩水野家の国元詰の儒者秋本岨夷について漢学を学び、当時の岡崎城下町を代表する文人であった。岨夷が伯機に寄せた記文によれば「市隠亭」は岨夷の命名である。同じ水野藩の江戸詰の儒者大内熊耳が伯機に寄せた「市隠亭記」（熊耳先生文集）などによれば、東西の文人が立ち寄り、また尾張・三河の文人たちがしじゅう出入りしたとあり、市隠亭は岡崎城下町における学芸サロンであった。宝暦元年（一七五一）の秋本岨夷の死去後に水野家の儒者となった藤野君彪が国分父子に贈った記文によれば、伯機の蔵書は数千巻もあり、貧しい学徒に惜しみなく利用させ援助することを喜びとしたという。国分家は伯機とその子九一（名は徴、一七三九～一七八九）の没後は家政が逼迫し、そのあとを継いだ東陽（名は孟、一七七一～

一八四一）は借財返済のため、市隠亭の蔵書や書画骨董類を売り払っている。しかし享和三年（一八〇三）に市隠亭創立六〇年を記念して八橋無量寺の売茶翁に、市隠亭の記文を乞い亭額とした。国分家は大正年間に退転、家屋も戦災で焼失した。天保九年（一八三八）に描かれた国分家の屋敷図（石神町杉山家所蔵）に当時の邸宅と市隠亭の様子を偲ぶことができる。

右の記述からすると、真澄が「秀超」「超」の名乗を使っていた時分、国分家は伯機、それに九一の時代であった。国分家に集う文化人たちと触れ合い、交流しながら、真澄もその影響を受けていたと考えられる。

若年とは言っても、すでに二十代後半になった真澄の才能が周りの人たちに評価されていたことは、丹羽嘉言の「湖東游記」「胆吹遊草」からも知ることができるが、市隠亭からの月見を記した「市隠亭記」が国分家に残っていたことからそのことが知られる。

また、丹羽嘉言の「般室記」「石居記」が国分家に残っていた事実は、文化的サークルの中に、丹羽嘉言も真澄も含まれていたことの何よりの証左となるであろう。

植田義方については、「おのれも一たびまなびのおやとせ

し人也」とあることから、真澄が幼少時代に教えを受けたと、これまでの真澄研究では強調されてきた。

一方で、植田家に養子に入った義方の実家・高須家の妹が国分九一の妻であつたと考えられるなど、植田家と国分家は深いつながりがあつた。義方はしばしば在所の吉田（豊橋）から岡崎を訪れることもあつただろうし、「植田義方が林自見の「三河刪補松」を校訂し、実質的な編者であつたことは知られているが、岡崎成就院の記事などをみると、同書編纂のため現地調査なども行つた様子がうかがえる」（新行和子「菅江真澄と岡崎」、『続々菅江真澄のふるさと』91頁）とされている。

仲彰一が「般室記」を杉山家で見出したのは、植田家を仲が辞する際、植田哲郎氏から、岡崎の国分家と関係の深さを示す一言があつたからである。そのことから考えても、国分家を取り巻く文化サロンの中に、植田義方の姿もあつたことは容易に推測できるのである。

七 名乗「源秀超」の考察（D 関連）

内田ハチの論考『伊吹山採葉』は、『筆のまゝ』にある「源秀超」について、水谷が、「筆のまゝ」に他人の文章を書き入れるよりも自己の文章を書き込むことの方がより多く可能

性があると考えてみたい」（『水谷書簡1』のD）の指摘を前提として、源秀超が白井秀超と同一人物であることを論じることにもなった。

月刊『旅と伝説』を発行して柳田国男との繋がりのあつた三元社から、昭和五年九月、真澄遊覧記刊行会『庵の春秋』二冊（影印本と校訂本）が刊行された。この中に、『筆のまゝ』が収められていたのである。

この『筆のまゝ』は、本洗馬（長野県塩尻市）の熊谷岱蔵家にあつた真澄自筆本の四冊のうちの一冊で、表紙に「ふでのまゝ 丁、春」とあつたものである。『庵の春秋』の刊行に当たつて、『筆のまゝ』は三十七枚の内、歌文の控と思ふもの以外を抄出した」と、校訂本の中表紙裏に書かれている。刊行本（ここでは影印本と校訂本の両方を指す）の内容は、『諏訪の海断篇』『浄瑠璃姫八百回忌追善詩歌連緋序』『三河紀行断篇』『伊那の中路断篇』の四編からなる。ちなみに、『三河紀行断篇』は、『秋田叢書別集菅江真澄集』第四巻で、「枝下（しだり）紀行」と名附けられて収められている。

後年、この刊行に際して除かれた「歌文の控」の部分を含めて、『菅江真澄全集』第十一巻で全編が翻刻され（昭和五十五年刊行）、その解題から『筆のまゝ』の全体像が初めてわかるようになる。

水谷からの指摘（D）は、昭和五年九月発行の『庵の春秋』に収められた「浄瑠璃姫六百回忌追善詩歌連緋序」に「源秀超」の署名があることであった。

水谷が言うには、一冊として真澄が編んだ著作に、わざわざ他人の文章を入れるはずはなく、そのことから「秀超」が真澄若年期の名乗であったことがわかるとしているのである。

内田ハチが論考『伊吹山採葉』で白井超がのちの真澄であることを論証したことは、結果的に、源秀超の署名も真澄であったことを証明したことにもなる。

私たちは今、この論考の後に発見された「般室記」「石居記」「市隠亭記」の筆跡から、容易に超・秀超＝真澄を確証できることを考えると、水谷の推論も、内田ハチの論証も資料の制約の中ではあったが、それぞれに正鵠を射ていたことになる。

「源秀超」が「浄瑠璃姫六百回忌追善詩歌連緋序」を書いたことを受けて、内田武志は、真澄が幼い頃に「喝食稚児」であり、浄瑠璃姫供養のために創建されたとの縁起を持つ成就院（岡崎市吹矢町）で絵解きをしていたとの論に行き着くことになる。そのことに関しては、本稿九で、柳田国男からの「喝食文芸」、水谷源二郎からの「神童」からの着想であつ

たことを述べることにする。

八 名乗としての白井知之の登場

水谷源二郎から内田武志に宛てて、真澄と丹羽嘉言との関わりが示されたのが「水谷書簡1」であった。その来信の連絡を受けて、『謝庵遺稿』等の資料の確認と、水谷源二郎との面会を、岡崎の郷土史研究者である浅井敏がおこなったことはすでに述べた。

浅井敏が水谷源二郎に初めて面会した昭和四十二年五月五日、この時、水谷は浅井に対して、次のことを語ったと伝えている。

「三州岡崎の不知之は秀超の前身だろうと思うけれども、それを証明する資料がない。空襲で舞鶴図書館の『謝庵醉誌』^(書)『謝庵醒誌』^(書)『謝庵三誌』^(書)が焼失したが、これをみれば、同一人物かどうかはつきりすると思う。しかし、これらの本はきつとそのうちに出てくる」といわれた。（浅井書簡2）

これらの資料については、すでに水谷源二郎から内田武志にも内容が伝えられていた。当館・内田文庫に残る内田武志宛水谷源二郎の昭和四十二年三月二十六日付書簡（以下、へ水

谷書簡2と略記する)である。三月十六日付の第一信(水谷書簡1)から、わずか十日後の第二信であった。

次のような一文がある。

謝庵遺稿：謝庵の文集を自ら編集したものに、謝庵醉筆、謝庵醒筆、謝庵三筆とあって、安永七、八年以後が三筆のようです。この三編のうちから謝庵没後にその友人鈴木朗が抜萃編纂したものが即ち謝庵遺稿であります。何れも原本は名古屋図書館で昭和の戦災で焼失した様です。幸、醉筆は昭和初年に復刻本が出ました。醒筆の草稿本(自筆)は家蔵に属して居ます。安永八年五月白井秀超の名が出てくる文章は多分三筆から採録されたものでしょう。醉筆には白井姓の關係記事はありません。

別に小型便箋に書写したものは、醒筆の中の一文で、白井姓の知之と云ふ人物に関する記述ですが、これが又大に興味をそえられることゝ存じます。長くなりますから愚見はさしひかえます。(水谷書簡2)

名古屋図書館(現・名古屋市鶴舞中央図書館)に、丹羽嘉言の著作として『謝庵醒筆』『謝庵醉筆』『謝庵三筆』があったのだが、戦災のために焼失した。しかし、水谷が『謝庵醒

筆』の自筆草稿本を家蔵していたことから、これを内田武志に書き送ったのである。浅井敏には、初対面からの後日内容を示すことになったようだ。

ちなみに、鈴木腹が編んで板行した『謝庵遺稿』は、右に示した丹羽嘉言の著書三冊から、選りすぐった詩文を編んだというのである。

水谷源二郎が、内田に対して、(水谷書簡2)に添えて書き送った『謝庵醒筆』は、全集別巻一・81〜83頁にその文章が引用され、註23として資料情報が記されている。

(23) 水谷源二郎が特に『謝庵醒筆』中の白生関係のものを抄写し、恵与された資料に基づく。これは丹羽嘉言の手控え草稿であるためか、文章、文字の乱れが多く解読しがたい。『謝庵醒筆』からの抜書き(未定稿)は、原漢文、書下しおよび疑問符は内田。(全集別巻一・105頁)

全集別巻一に掲載された読み下しは、後半において、一部が重複したり、「(未定稿)」が附されたりしている。

同じ『謝庵醒筆』について、浅井敏から資料コピーの提供を受けた仲彰一は、『視座』で読み下しにしている。文意が解釈しにくいところもあるが、水谷―浅井―仲に伝えられた

原稿そのものは（未定稿）の部分が少ないようだった。

一方、当館・内田文庫には、水谷から内田武志に送られたメモ書きのコピーがある。印字が薄く判読が困難であるのだが、それを見ると、水谷からの写し自体に文章が整わないところもあるように見える。

以上のことから、『謝庵醒筆』の内容を見るには、内田武志の全集別巻一・81～83頁と、仲彰一『視座』53～55頁を校合しながら読む必要がある。

適宜、全集別巻一にある『謝庵醒筆』の表現を引きながら、『三河岡崎の白井知之』（あるいは「白生」とも書く）が、丹羽嘉言のもとで、どのような学びをしたのかを紹介したい。

『謝庵醒筆』（実際は、草稿本の抜き書きとして提供された）では、丹羽嘉言自身がまず、おのれ自身の学問の形成について書き、「読書すること戯るるが如く、道に適ふるに似たり。……東帰するも郷友に喜ばれず、自ら棄てて絵事に交はる。復た書を読み文を学ばず」とする。

書に戯れるように親しみ、道学（ここでは朱子学を指す）を学んでいたが、故郷に帰ってみても疎外感は否めず、学問を棄てて画業に励んだ。書は読むものの、学問はしない、というのである。

丹羽嘉言が、多大な遺産を悉く親戚某に譲りながらもその余財を受け、雲臥上人が住む般若台に隠棲したことは、『名古屋市史』（昭和四年版）の記述からも知ることができたが、朱子学を学んだものの、それが生活にうまく結び付かなかったことからの隠遁生活であったことが、右のことから知ることができる。

そこに、「忽然として山田叔清出づ」とある。山田叔清とは、丹羽嘉言没後に『謝庵遺稿』を編んだ鈴木胤のことである。叔清は、「生れながらにして読書を知」る者で、嘉言のもとに学ぶために来た。それ以降（三年とも書く）、叔清は嘉言のもとで学んだが、「叔清今年十四、文字みな跡を失ふ。余竟に及ばず、亦将に自ら廃せんとす」。つまり、もう教えることもなくなつて、嘉言自らが教えるのを止めるようにしたとする。

それだけ、鈴木胤が、叔清を名乗った幼いときから、神童として、漢文の能力を発揮していたことがわかる。安永七年（一七七八）の序文を持つ『張城人物志』文苑部に、十五歳の山田叔清が紹介されるほど、尾張ではその神童ぶりで名が知られていた。

嘉言から叔清への教授法について、嘉言自らは「句翻訓点」と呼ぶ。漢文の句点のない白文を、半日もかけてずつと黙読

させ、句の文意が通じるようになってから、翻点（訓点のこ）を加え、さらに和訓を正して、音声の流れをよくするものであった。

一方、「頃日、三河岡崎の白井知之なるものあり」として、知之が嘉言に教えを乞いにきたことを、「余に就きて書を読まんことを請ふ。白生、生れながらにして和歌を知ること、猶ほ叔清の文（筆者註：漢文のこと）に於けるがごとし。余其の天資異稟なるを歎ひ、欣然として之に応じ、且つ自ら切磋するを喜び琢磨することを幸ひとす」と書く。

嘉言が、白井知之の天資（てんし）生まれながらにして天から与えられた資質）が異稟（いひん）普通の人と異なつたすぐれた生まれつき）であることを敬い、嘉言自らが、知之と切磋琢磨することを喜んだとある。

知之に対する教授法を、嘉言自らは「演訳誦看」と呼ぶ。まず書冊に依らずに、論するところを口伝し、知之が了解するのを待つて読み下した書を与える。その書が朗誦できるようになつてからはじめて、白文を与えるという教授法であつたのである。

ここまで何度も、『江山清樂』を構成する「湖東游記」「胆吹遊草」のことを紹介してきたが、漢文を得意とした嘉言が、

白井超の歌を取り入れながら和文の「胆吹遊草」を書いたのは、嘉言と知之（秀超、のちの真澄）とがお互いが切磋琢磨しながら、文を学び続けていたことと無関係ではあるまい。

この『謝庵醒筆』については、あくまでも水谷源二郎が家蔵する自筆草稿本がもとになっている。『謝庵遺稿』等に関する情報の論理性や確実性から見ても、その資料に疑問を挟むところはないと考える。判読困難ながらも、当館・内田文庫には写真をコピーしたものもある。

さて、内田は、『謝庵醒筆』で白井知之が丹羽嘉言に教えを請いに来た年代を、安永六年（一七七七）としている（全集別巻一・79頁）。

『謝庵醒筆』で、宝暦十四年（一七六四、明和元）生まれの鈴木服について、「叔清今年十四」と年齢を書いていることから、『謝庵醒筆』の文章が指し示す年代は安永六年のこととなる。その「頃日」（先日などの意がある）に「三河岡崎の白井知之なるものあり」とするのだから、この点、「安永二（一七七三）年に、一四歳の山田叔清（鈴木服）が近づいてき、また、安永六年には、三河岡崎の白井知之なるものが、書の読みかたの教えを請うてきた」（全集別巻一・79頁）とするのは、年代の設定の論拠に間違いがあると言わねばならない。ただし、結論部分の安永六年は妥当であろう。

『謝庵醒筆』に出てくる「三河岡崎の白井知之」は、同じ文中で何度も「白生」とも表記されている。この呼び方は、「湖東游記」「胆吹遊草」の中で、白井超の別名としても出てくる呼び方でもある。「白生」は、漢文では「ハクセイ」なのだろうが、和文では「しらぬ（い）」と読むこともできる。以上のことから、白井知之は白井超であり、のちの菅江真澄と同一人物であることが言えることになる。

内田武志は、『謝庵醒筆』に白井知之が幼いときから人並み外れた歌の才能があったことから、真澄の喝食稚児（かつしきちこ）としての一面を強調していくことになる。このことについては、本稿九で述べることにする。

ところで、「知之」に関連して、内田は水谷からもう一つの教示を受けている。それは、安永五年（一七七六）、尾張藩の薬園を管掌した松平君山（一六九七～一七八三）の八十歳を賀して捧げられた詩歌集に、「知之」の歌があるというものである。

『松平君山自署八十賀詩歌集』尾張名家詩文歌、諸国大家、寿松

いくちとせ尽せる齡ためしともかきあつめてよ松の言のは

知之（全集別巻一・78頁）

右の引用は、全集別巻一・105頁の註（21）に「水谷源二郎書簡による資料」とある。『謝庵醒筆』にある白井知之について内田に伝えた〈水谷書簡2〉に同封されたものとも思われるが、現在、内田文庫にその書簡断片を見い出すことはできない。

水谷は、その書簡の中で「これに白井の姓がついていないため疑問ではあるが」としたという（全集別巻一・78頁）。

一方、内田は、真澄が秋田の俳諧宗匠・吉川五明を訪ねた際、五明に「尾張駿河町 白井英二 医也」（『五明住所録』）と書き留められたこと、それに松平君山が尾張藩の薬園を管掌したことなどを理由に、『松平君山自署八十賀詩歌集』に歌を寄せた「知之」が白井知之であり、後の菅江真澄だとしたのである。

内田の説の後年のことになるが、『新編岡崎市史』近世学芸13（昭和五十九年）では、三浦三甫の四十歳を祝う『初老寿詞集』（安永三年〈一七七四〉成、三浦麦雨編）を翻刻している（同書235～244頁）。

三浦三甫の四十歳の祝いとして贈られた漢詩・和歌・連歌・俳諧の中に、「同（岡崎）知之」の「四十とせにみづるはじめの老の身のおひゆくすへや久しかるらむ」がある。

同集では、漢詩にある「尾陽 君山」が松平君山、「同（三岡崎）国分衡」が国分伯機、「同 国分徴」が国分九一、連歌にある「尾州 惟寅」が浅井國南を指している。名古屋、岡崎での真澄の交友関係を考えて、「同（岡崎）知之」は、岡崎に住む白井知之であると考えることができよう。

以上のことから、安永五年（一七七六）の『松平君山自署八十賀詩歌集』に歌を寄せた「知之」も、内田が推測したように、岡崎に住していた白井知之であったと考えるのが妥当と言えるだろう。

九 喝食稚児としての真澄

内田武志は、全集別巻一「第三章 尾張・修行」に次のように書く。

真澄が喝食稚児当時、「知之」と呼ばれていたことは、第一章で述べた。この「白生」が生まれながらにして和歌を知る者で、天稟の才能があつたので、よろこんで応じたとある。「白生」は、古代史の追究には漢文の基礎学習が必要であるため、禅僧の紹介によって丹羽嘉言の許に至つたのであろう。（全集別巻一・79～80頁、傍点は筆者）

幼い真澄を禅寺に入れたのは、真澄が《くめじの橋》の円通寺・国仙和尚と邂逅した時に記す、真澄自身の叔父であらうと、内田は推測している（全集別巻一・30頁）。

さらに、喝食稚児をしていた寺が、《筆のまゝ》にある「淨瑠璃姫六百回忌追善詩歌連緋序」との関わりから、岡崎の成就院（曹洞宗）であり、そこで絵解きをおこなっていたが（全集別巻一・31頁）、実際の学習をした場所は、岡崎の乙川（おとがわ、菅生川）を挟んで成就院の向かいにある満性寺（まんしょうじ、浄土真宗）であつたとして、その論を進めている（全集別巻一・48頁）。

では、喝食稚児とは何か。

日本国語大辞典には、「喝食（かつしき）」の語意として、「〔喝〕は唱えること」禅宗で、大衆（だいしゅ）に食事を知らせ、食事について湯、飯などの名を唱えること。また、その役をつとめる僧。のちには、もっぱら有髪の小童がつとめ、稚児（ちご）といった」とある。だから、「喝食稚児」は、用語としては二重表現となるが、喝食が幼い子どもであつたことを強調するための用語として、このまま用いることにする。

喝食稚児であつたとする発想について、内田は、柳田国男の「遊歴文人のこと」という一文に求めている。

この一文は、『わがこゝろ』（真澄遊覧記刊行会、昭和四年十一月）の序文が初出である。

ここで柳田国男は、次のように述べる。

「喝食文芸」というものが日本には昔からある。「幼なくして詩歌書画を能くすといふ者があれば、其評判は忽ち弘く伝つて、わざわざ其一筆を求めに訪ひ来る人が多かつたのみならず、後には大抵は親や師匠に連れられて、便宜の地を遊歴する風であつたのである。さうすると地方の人々は、文芸そのものゝ内容実質よりも、先づこの小さな児が歌を詠み字を書くといふ点に感嘆し、殊に応酬唱和の敏速に対しては、一種畏敬の念をさへ抱かんとしたのであつた」（『定本柳田國男集』第三卷417頁）とする。

これは、真澄の遊歴文人としての根柢を、幼くして歌を身に付けていたことに求め、「たとへ成長の後特に一身上の己みがたき事情が起らずとも、彼は尚その生涯を雲水に託さなければならぬ人であつた」としたのである。

柳田は、遊歴文人としての真澄を語る文脈の中で、「真澄翁の歌は即興の軽捷、千首万句口を突いて出るといふ点で、之を要するに唱和の雄でありました」（『定本柳田國男集』第三卷392頁。初出は、昭和三年九月・秋田考古会菅江翁百年記念会講演「秋田県と菅江真澄」という能力を持つてい

たことを、「喝食文芸」に担うに等しい人材として位置づけたのである。

これを受けて、内田は、真澄を喝食稚児であつたと推測を広げ、「真澄の喝食稚児を裏付ける資料がないわけではない」として、『謝庵醒筆』の文章を引用する。

『謝庵醒筆』中ノ白生関係ノモノ抄写

風よ風ちりもゑらはす吹ならはこゝろのうちをいざさそへかし 知之十二三時はじめてよめるうた

アル洞宗和尚キ、テ感シラレシヨシ（全集別巻一・29頁）

この引用の後、内田は、水谷から示された見解を書簡から引用している。右の引用は全集別巻一「第一章 白太夫の子孫」にあり、その註（28）（全集別巻一・45頁）には「内田宛、水谷源二郎書簡、昭和四二年三月一六日（筆者註：〈水谷書簡1〉のこと）」とある。

しかし、実際は、昭和四十三年四月十八日付内田ハチ宛書簡（以下、〈水谷書簡5〉と略記する）である。ハチが大学紀要に発表した論考『伊吹山採薬』を贈ったことに対する返礼を兼ねた書簡に、その一文がある。

白井秀超が嘉言の許へ出入してその愛顧を受けたのは、秀超の幼児の和歌の神童であつたことを嘉言が聞き知つたが故であつたかと思はれる。若しまた秀超が本草に関心を示したとすれば漢学漢文の素養が本草学には不可欠のものであるが故に嘉言は、その修養の時期を持ち得なかつたであらう秀超の為に漢文を教へようとしたかもしれない。この点三河岡崎の人白井知之に関する嘉言の記述からの思付である。(水谷書簡5)の部分、傍点は筆者)

右書簡の最後の部分が、全集別巻一・29頁の引用時には、「この思い付きは『謝庵醒筆』の次の文からです。頃日有三河岡崎白井知之者請就余読者白生知和歌」と、具体的な文言に変更されている。

しかし、水谷が指摘しているのは、『謝庵醒筆』にある文章の白井知之に関する文章全体であり、「頃日：」の部分だけではないだろう。

先に紹介した柳田国男は、「喝食文芸」の能力に値する「唱和の雄」たる能力を真澄が幼いときから持っていたことが、真澄が遊歴文人となったことの証左としていた。

また、右に引いた(水谷書簡5)で水谷源二郎が伝えているのは、丹羽嘉言が神童としての能力を持った人物に対し

て、いかにその能力を伸ばすために意を砕いたかということであつたのである。

ところで、白井知之が丹羽嘉言に漢文を習いに來た理由について、水谷源二郎の書簡では「本草学には不可欠」としていたのに対し、内田武志は「古代史の追究」としていることにも注目したい。

いささか長文になり、また、本稿ですでに引用した柳田国男の文章、それに水谷源二郎の書簡の文言も重複するが、(水谷書簡5)を紹介する。

丹羽嘉言に絡み、名古屋での当時の状況などを知ることができるなど、たいへん示唆に富む内容である。ただ、書かれた年代として、岡崎で遺墨資料三点が発見され、国分家と真澄との関わりが明らかになる以前の書簡であることには留意する必要がある。

読後感にかへて私の見る菅江真澄像略述致します。

「菅江真澄は遊歴文人であつた。神童文学(真澄にあつてはこれは和歌であつた)の魅力。尋常ならざる才能を生れながらにして持つ者が長生すれば旅をしなければならなかつた。少年の日にこの遊歴文学の不思議な効果を実験し一方他の平凡な職業の為に準備する時期を持たなかつた者がもし問題の

白井氏であつたとすれば成長の後特に一身上のやみ難き事情が起らず共、彼は尚その生涯を雲水に託さねばならぬ人であつた。」(柳田氏わがこころ活字本奥書)

「彼の風景画家としての、考古学の先駆としての、本草物産の検出と蒐集家としての、訓詁考証の学を説いた人としての歌道の師としての、其他様々の素養と進歩とは羈旅の間にあつて遂げられたものであつた。即ち家に在つて読書した期間は極めて少なかったと考へられる。」

これ等の柳田さんの御説が私の菅江真澄像の基本を為して居ます。

彼の名古屋滞留も亦その羈旅の中に属して居ます。当時の名古屋には民間に和文の師匠として田中道磨あり漢文学を説く市川鶴鳴あり文人画家丹羽嘉言あり藩医にして本草家で画竹に名ある浅井図南あり藩吏にして文学に通じ本草に詳しくかつた松平君山あり俳諧に横井也有あり晚台あり、文雅にして博学の下郷学海あり、安永天明期は名古屋文苑の輝かしき一時期であつた。各々其党をひきゐて一種の文化サークルの如きものが成立して居た。

丹羽嘉言に就て言へば彼は経学によつて身を立て様として京師に留学して帰郷したところがその学問は郷党の入るゝところならず早くから自習し自得した画業に専念せんとしたところ

る父親の遠逝に会し千金の遺産を得衣食にわすらはされない事となつて隠居自適の生涯に入つた。

彼は無類の神童好きであつた様だ。神童、叔清山田朗(後年の鈴木朗)を発掘して一度は捨てさつた読書作文を共にすること三、四年、既に自ら及ぶべからざることを覚るや二十年の年齢差ある少年を待つに友人の礼を以てし家蔵の書をことごとく提供して朗の将来の大成を期した。又安永八年頃六才の神童書家嘉六を知るやこれを補導して山田叔清の門人第一号とならしめた。かくて神童を神童として終らしめず後年の盤桓子丹羽昂と云ふ一かどの人物に仕上ぐる基礎を与えた。

(欄外記述……鈴木朗も丹羽嘉六も湖東游記・胆吹遊草に出て来ます。)

白井秀超が嘉言の許へ出入してその愛顧を受けたのは、秀超の幼児の和歌の神童であつたことを嘉言が聞き知つたが故であつたかと思はれる。若しまた秀超が本草に関心を示したとすれば漢学漢文の素養が本草学には不可欠のものであるが故に嘉言は、その修養の時期を持ち得なかつたであらう秀超の為に漢文を教へようとしたかもしれない。(この点三河岡崎の人白井知之に関する嘉言の記述からの思付である)

特に江山清渠中の漢文体の湖東游記の末尾にこの旅行後の幾日間か秀超は嘉言の宅に寄食して居ると解せられる文辞は注

意に値すると思う。

嘉言の本業は画家であった。時あつて白井氏は其作画を見習ふ機会があつた筈である。江山清楽に見る二葉の風景画は後來の白井氏の風景画が嘉言の画業に啓発されるところ無しとは言へないと思う。

安永十年（天明元年）母の死に会した白井氏は名古屋を去つて岡崎へ帰り再び名古屋へ出て来たか否か。

母親の遠逝が白井氏の心持を永遠の遊歴へ解放したと想像するのは行き過ぎであらうか。

嘉言は天明年間に入ると画譜の板刻、引続き聚珍版（木活字版）本の創製に従事した。これ亦趣味的で高踏的な而して素ばらしい業績であつた。勿論画業は天明六年四十五才で歿する迄継続している。

以上が謝庵丹羽嘉言との關係に於て私の描いて居る菅江真澄像です。何かの御参考に相成れば幸甚です。（水谷書簡5）

内田武志は、柳田国男の「喝食文芸」、水谷源一郎の「神童」という言葉をキーワードにし、また、『筆のまゝ』にある「浄瑠璃姫六百回忌追善詩歌連緋序」が「源秀超」が書いていることから、「喝食稚児」としての真澄の人物像を思い描いていたのである。

十名乗「白井知之」の拡がり（内山真龍の登場）

水谷源二郎から教示された丹羽嘉言著『謝庵醒筆』により、内田武志は、白井知之が白井秀超、さらには白井秀雄を経て、菅江真澄に至る名前の変遷を受け入れるようになった。

水谷からの『謝庵醒筆』の教示は、〈水谷書簡2〉に添えて送られたものであつた。その後、〈水谷書簡5〉をきつかけにして、真澄がかつて喝食稚児であつたとの考えを深化させていったことは、前章で述べた通りである。

水谷源二郎は、昭和四十四年二月十二日付内田武志・ハチ宛書簡（以下、〈水谷書簡6〉と略記する）によつて、「白井知之」の名乗に新たな展開が生まれたことを知らせている。

白井知之が白井秀超の前名であり秀超が秀雄と改名し更に菅江真澄と名乗るに到つたと云ふのが私の十年來の想定でした。知之―秀超の資料による確認に先立つて秀超―秀雄^{奥澄}の方の立証が先になつて何となく心に懸つて居ながら私の想定に止めて居ました。最近知らされた材料で白井知之と云ふ名も日の当る場所へ出して菅江真澄の前名として検討に価すると思いますから御知らせ致します。

安永六年二月二十日の（内山真龍の）日記に

三州岡崎伝馬町、白井幾世□知之者来、乞歌、此人今体冷泉家風を習者也、止宿、廿一日客去」

この幾世の紹介した冷泉家風を習ったといふ人物の名は判らないが幾世も同好の士であらう」（筆者註：□は虫喰いを表している）

と言つて居るが、これは白井幾世二知之と云ふ者が来りて歌を乞ふと読むべきでは無からうか…云々との問合せがありました。

私はこの内山真龍の日記の一行の誤読の指摘は、或は菅江真澄伝完成の上に重大な意味を持つものであると思ふと、其理由を略述して全女史に返書を差出し置きました。

右のような書き出しで（水谷書簡6）は始まり、「本年一月下旬長沢詠子さんと云ふ方から『内山真龍の研究』という書物」にある記述について問い合わせがあったことを知らせている。

浅井敏「幻の故郷を尋ねて」（『菅江真澄のふるさと』所収）にこうある。

昭和四十四年二月（筆者註：実際は一月）長沢詠子さんが、

真澄が内山真龍（静岡県磐田郡光明村大谷の人、賀茂真淵や浜松の渡辺蒙庵に師事す。文政四年八月二十二日歿）と親交があつたので、この真龍の研究をはじめられたところ、小山正著『内山真龍の研究』の中で偉大な発見をされた。真龍の沢山の交遊の中に、三河、白井幾世という名があり、小山氏の説明文は、『三河国岡崎伝馬町の人、安永六年二月二十日の日記に、『三州岡崎伝馬町、白井幾世□知之者来乞』歌、此人今体冷泉家風を習者也。止宿。廿一日客去。』この幾世の紹介した冷泉家風を習ったという人の名は判らないが、幾世も同好の士であらう』となつてゐる。小山氏は「之を知る者来り」と読まれたらしいが、これは後述で判るが「白井幾世二知之なる者来り」であらう。（『菅江真澄のふるさと』77頁）

右によつて、長澤詠子が、真澄の《筆のまにまに二》「露くま山」、《同四》「ひよとりをどり」、《同九》「くさみんし」にその名が出てくる内山真龍に興味を持ち、小山正著『内山真龍の研究』を調べていたことが知られる。鈴屋系の国学者として知られる内山真龍に詠歌を求めに来たという人物にかかわる一行に、「知之」の文字を見付けたことからの疑問であつた。

長澤詠子は、愛知県岩倉市に住み、長く内田兄妹に資料を

提供するなどして交流していた人物である。内田文庫に残る長澤詠子の書簡を見ると、病床にありながら真澄研究をおこなった内田武志を敬愛して止まなかったことが知られる。

真澄若年期における名乗の解明が、水谷による教示に端を発したことは、すでに内田兄妹や岡崎市の郷土史研究者らを通じて知っていたのであろう。そのため、水谷源二郎に宛てて、「白井幾世□知之」の解釈について問い合わせをしたのである。

浅井敏が「これは後述で判るが「白井幾世二知之なる者来り」であろう」とするのは、水谷源二郎の長澤への回答のことであり、同じ内容を、水谷は内田兄妹に対しても知らせている。

先の〈水谷書簡6〉に対して、内田兄妹からの返信がなく、何かの手違いで内田兄妹の手元に届かなかったのではないかと水谷は考え、翌月の（昭和四十四年）三月十五日付内田武志・ハチ宛書簡（以下、〈水谷書簡7〉と略記する）で、再び同じ内容を書面で知らせている。

その書簡（〈水谷書簡7〉）に添えて、水谷自身が控えていた長澤への回答を、内田兄妹に書き送っている。

長澤詠子宛水谷源二郎書簡の写し（〈水谷書簡7〉に同封）

一月二十七日付御手紙拝見致しました。

御問合せの白井知之について

丹羽嘉言に「謝庵醒筆」と題する雑文集があります。其中の

一文（これは安永六年十二月前後の作かと思ひますが）に

一、嘉言が三河国岡崎の人白井知之から読書作文の指導を求められこれを承諾した次第

一、この知之なる人物は幼童たりし時から和歌を詠じ郷党で神童とつわさつた者である。嘉言は神童好であり、この人物を仕込んで見たい興味をそつられた。

一、今後読書作文を教授し指導して行く上の方針を述べ知之の奮発を促して文を結んで居る。

この時期以降知之と云ふ人は嘉言の文章には出て来なくなり安永八年乃至九年にかけて白井秀超、白生超、白超として記述されて居る人物が現れる。これは知之が改名したものであると推測して居ますがそれを立証する具体的な資料を欠くものでした。

今回の貴信によってこの推測の正しいことが略々立証出来る様思はれます。

即ち御仰越の安永六年二月二十日の内山真竜の日記は

「三河岡崎伝馬町の白井幾世二知之なる者来りて歌を乞ふ…」

と読んで然るべきものと存じます。

植田氏蔵「東遊歌」写本（筆者註：『国風俗』のこと）の終の識名に「安永七年 白井幾代二秀規」とあると柳田国男さんは昭和三年に発表されて居ますが（筆者註：「白井秀雄と其著述」、『紙魚』二十六号）、昭和四年わがこころの解説本に「遊歴文人のこと」と題する一文で：秀規と先に言ったのは誤で幾代二秀超が正しいのだと云つて居ます。更に其一文を昭和十三年（筆者註：昭和十七年の誤り）創元社版「菅江真澄」に採録するにあつては秀規と書き改めて居られます。この点については植田氏の蔵本に当つて見なければ断定することはできませんが、白井幾代二秀超とあつて呉れれば多年の問題は一挙に解決するのでは無いかと思ひます。

即ち

安永六年二月二十日 白井幾世二知之「〔は内山真竜を訪ひ詠歌を求めて居る。〕」

安永六年十二月前後 白井 知之「〔は名古屋で丹羽嘉言に漢文の指導を求めて居る。〕」

安永七年某月 白井幾代二秀超「〔は東遊歌を抄写して（名古屋から）吉田の植田氏に寄贈す。〕」

と云ふことになり、白井幾代二なる人物は安永七年の某月にその字（アザナ）を知之から秀超（または秀規）と変更して

居る。安永八年から九年十年にかけて秀超と称して居る人物が後年の菅江真澄であるらしいことは一応立証済である（筆者註：丹羽嘉言著『江山清楽』を構成する「湖東游記」「胆吹遊草」についての論証から）。爾来白井英二秀雄、菅江真澄と名、字の変更を重ねて居る。

かくして菅江真澄の幼時の神童、青年時代の名、字の変更の次第を解明し立証することが出来そうに思はれます。其意味で植田氏蔵本東風俗（東遊歌）の末尾の識名の確認が重大なる鍵であると思いますが、貴見如何。重要な資料御教示いたゞき感謝いたします。

右の水谷源二郎の長澤詠子に宛てた回答は、まことに論拠が整然としており、納得するに値する。

しかし、内田武志は、この水谷源二郎の論には、最後まで異を唱えることになる。内田が納得しなかつた理由の一つは、水谷の論拠の一つとなつた『国風俗』（植田家蔵）の最終部にある識語と貼紙にある文言のとらえ方の違いにあつた。

この点、水谷は、実際の資料を見できないまま、柳田国男の「安永七年 白井幾代二秀規」（のちに柳田自身が、校訂本『わがこころ』掲載時の「遊歴文人のこと」で、一時「幾代二秀超」に訂正した）の表記だけから、持論を展開してい

るから無理もないところである。

当館・菅江真澄資料センター常設展示室には複製を展示しているの御覧いただきたいが、『国風俗』については、全集別巻一・67頁に書かれた体裁が、實際をよく表している。

この書の体裁は、題簽は「国風俗」、美濃判一冊、墨付二三丁の写本で奥付は次の如くである。

右東風俗歌者、先師賀茂県主所蔵自筆書人之本也。課男健蔵書写之校合畢。

安永五年丙申七月三日 本居宣長

同 六年西七月廿二日 田中道麻呂

同 七年戊戌八月十八日 白井秀超

この書の小口に貼紙を垂らし、本を重ねても一目にしてわかるように次の如く記してある。

(貼紙、植田義方筆)

白井幾代二主ノ書也 国風俗

ここまで述べてきたように、「白井秀超」は真澄であった。しかし、植田義方の貼紙に書かれた「白井幾代二主ノ書」、特に「書」をどのように解釈するかで、幾代二が真澄かどうか、解釈は全く違う様相を見せることになる。つまり、「書」を「書

記、書跡」に解釈すると、書いたのは白井幾代二で、白井秀超⇨白井幾代二となる。一方、「書」を「書物」に解釈すると、白井秀超が書き、白井幾代二が貸してくれたことになり、白井秀超と白井幾代二とは別人物となる。

内田武志の解釈は後者であり、そのため、「植田家蔵の『国風俗』は、白井秀超こと菅江真澄が田中道麻呂に写させてもらった書であり、白井幾代二が義方に借^マしたことがわかる」(全集別巻一・67頁)としたのである。借りた書物であるから、横積み(和本の積み方)をしても、すぐにわかるよう小口に貼紙を垂らしたとの内田の解釈なのである。

そのため、内田は、内山真龍日記の安永六年二月二十日条で「白井幾世□□知之」とされていた欠字について、二字分の「白井幾世□□知之」とし、そこに「二」の「故」を入れて「白井幾世二故知之者来」と考えた。そして、文意を「岡崎伝馬町に住む白井幾世二のよく知っている者が来て、和歌を乞うた。此人は冷泉家風を習っている者である。一晚宿り、二二日にかえった」であろう(全集別巻一・67頁)とした。「白井幾世二故知之者来」の読み下しを「白井幾世二の故知(こち)の者来たり」としたのである。

ところで、『内山真龍日記』安永六年二月二十日条は、「三州岡崎伝馬町、白井幾世□□知之者来^レ歌、此人今体冷泉家

風を習者也。止宿。廿一日客去」という短いものである。内田の解釈を採るならば、内山真龍が一貫して来客者の名前を伏せる必要があったのだろうかという疑問が残る。名前は伏せたままで、「此人今体冷泉家風を習者也」と言えるほどに語り合い、止宿までさせている。

これに対し、『新編岡崎市史』近世学芸13（昭和五十九年刊）は、「岡崎伝馬町白井幾世治知之者来乞哥」と読み取り、「これは、岡崎伝馬町の白井幾世治知之という者が来て和歌を乞うたと解するのが妥当である」とした（同書1265頁、新行和子執筆）。

当館・菅江真澄資料センター常設展示室では、右の話題となっている『内山真龍日記』安永六年二月二十日の箇所複製を展示している。これによると、「白井幾世□知之」の虫喰い部分の周りには、文字の一部分が残存しており、そこから、虫喰い部分は「治」の一字であることが視認できる。

水谷源二郎は、『内山真龍日記』を実見できないながら、柳田国男による論の推移から、虫喰い部分は「二」であることを推測した。つまり、「白井幾世二知之」として論を進め、そのことを長澤詠子、さらには内田兄妹に伝えたことになる。まことに慧眼と言うしかない。

『内山真龍日記』の実際は「白井幾世治知之」であること

から、『国風俗』にあった「白井幾代二主ノ書也」の「書」は「書記、書跡」となり、幾代二＝秀超になることも証明されたことになる。『内山真龍日記』にある「白井幾世治知之」の書き方からすると、歴史用語で言えば、「幾世治」が通称、「知之」が実名ということになるであろう。

『国風俗』の「幾代二」、それに『内山真龍日記』の「幾世治」にしても、共通する読みが「キヨジ」と考えられることには変わりはない。

さて、そうすると、改めて考えてみなくてはならない問題が出てくる。

吉田（豊橋）の植田義方に贈られたものにあつた「白井英二」、秋田の『五明住所録』に出てくる「白井英二」、あるいは深浦（青森県）の「社参進退之伝次第」（『菅江真澄全集』第十二巻158頁）に署名のある「白井英二」については、特に植田義方が書き留めていることから、英二が本名（幼名）であろうという認識に、これまでの真澄研究は立っている。

英二の読みはやはり「エイジ」なのか、幾代二（あるいは幾世治）と英二との名乗の時期の前後関係はどうなのかなど、改めて考える必要があることも、ここで認識しておかなくてはならないことになる。

真澄の名乗の変遷をたどってみると、まだまだ判らな

いことがあることに、改めて気づかされる。

むしろに代えて

ここまで述べてきたように、水谷源二郎から内田武志に宛てた〈水谷書簡1〉で、丹羽嘉言との関わりから、「秀超」「超」が真澄若年期の名乗であることが知らされた。

その「秀超」「超」の名乗をきっかけにして岡崎市で発見された三点の資料は、真澄と岡崎の塩間屋・国分家（伯機・九一父子）との関わりを証明することとなった。国分九一の妻が、吉田（豊橋）の植田義方の実家（義方は養子）である高須家の妹であったと考えられることから、真澄と植田義方との関係にも新たな視点が加わった。

さらには、真澄若年期の名乗が「知之」であったことから、『内山真龍日記』安永六年二月二十日条に知之（＝真澄）の記載があり、その居住地として書かれた「岡崎伝馬町」から、当時、真澄が岡崎を本拠としていたことが明らかになったのである。

真澄若年期の名乗の解明について、一連の流れを見てくると、果たして真澄は、植田義方から国分家を紹介されたのか、それとも、国分家を通じて植田義方を知ったかという問題も出てくる。

これまでの真澄研究では、真澄が植田義方について書いた「おのれも一たびまなびのおよとせし人也」を、真澄の幼年時代としてとらえてきた。その「幼年時代」の言葉だけが強調されてきたきらいがある。

真澄の墓碑に、渥美郡（吉田―現在の豊橋―を含む）の生まれであることを示唆する「渥美小国ゆ」があることや、石井忠行著『伊頭園茶話』二十巻貼紙（原本は秋田県公文書館蔵）に、竹村治左衛門が語った真澄の実家として「三河国熱海郡雲舟／荘人文村」と記していることなどが、その裏付けとなってきた。

しかしながら、「一たび」という文言を純粹に捉えるならば、必ずしも幼年時代とは限らないのではあるまいか。

「おのれも一たびまなびのおよとせし人也」の文言について、内田武志は、『菅江真澄遊覧記1』12頁で「真澄が少年のころから植田家に近接していたことが明らかであるから、当然その生家も近い距離にあったと考えなければならぬ」としていたが、全集別巻一・49頁では、「明和年代の真澄一〇歳代前半ごろ、岡崎において真澄は義方に学問の手ほどきをうける機会があったと考えられる」と考えを改めている。また、新行和子も「義方が親類として国分家をたびたび訪ねたことは勿論であったろうから…「ひとたびは」という

のは、このような付き合いのなかで教えられたという意味に近い」（岡崎と菅江真澄）、『続々菅江真澄のふるさと』91頁）と述べ、真澄が植田義方から受けた学びの場を岡崎であったとしている。

丹羽嘉言の真澄研究への登場と、その論を振り返ることを通して、真澄若年期の交流ばかりではなく、真澄の本拠、真澄の故郷に関する事柄まで、もう一度整理して考えてみなくてはいいと考えている。

本稿は、水谷源二郎からの書簡をはじめとして、多くの研究者の論考を引用しながら論を進めてきた。今年度、内田文庫を整理しながら、真澄研究が多くの方々我真摯な資料探究の下にあったことを、内田兄妹との書簡の遣り取りから知ることができた。真澄研究、地域史研究に情熱を捧げたそれらの方々への敬意と感謝の念に堪えない。

（秋田県立博物館学芸主事）

※本稿では、書簡からの直接の引用を丸ゴシック体文字で表しています。

※真澄研究に携わった方々の名前については、通例にしたがって敬称を略しています。

※本稿で引用した文献や書簡の略称について、再掲します。なお、書簡の番号は、掲載順ではなく年月日順に付けています。

全集別巻一：『菅江真澄全集』別巻一（未来社、一九七七年）
仲彰一論考

『視座』：「丹羽嘉言と鈴木服一菅江真澄の視座より」（鈴木服一会）
学会『文莫』第十四号所収、平成元年）

内田ハチ論考

『伊吹山採葉』：「菅江真澄に見られる科学的記録―その四、伊吹山採葉のこと―」（『秋田大学教育学部研究紀要 教育科学 第一八集』所収、昭和四十三年二月）

水谷源二郎書簡

〈水谷書簡1〉…昭和四十二年三月十六日付内田武志宛

〈水谷書簡2〉…昭和四十二年三月二十六日付内田武志宛

〈水谷書簡3〉…昭和四十二年六月二十三日付内田武志・ハチ宛

〈水谷書簡4〉…昭和四十二年七月二十日付内田武志・ハチ宛

〈水谷書簡5〉…昭和四十三年四月十八日付内田ハチ宛

〈水谷書簡6〉…昭和四十四年二月十二日付内田武志・ハチ宛

〈水谷書簡7〉…昭和四十四年三月十五日付内田武志・ハチ宛

浅井敏書簡

〈浅井書簡1〉…昭和四十二年四月四日付内田武志宛

〈浅井書簡2〉…昭和四十二年七月四日（消印）内田ハチ宛

註解・丹羽嘉言著『江山清楽』

安永九年（一七八〇）五月、白井超などの名乗を使っていた菅江真澄は、丹羽嘉言らと伊吹山登山をした。「採葉旅行」と名づけられたこの遊覧は、伊吹山だけではなく、琵琶湖とその周辺の名所を巡るものとなり、丹羽嘉言によって、漢文の「湖東游記」、和文の「胆吹遊草」に著された。この二編に跋文などを附けてまとめたのが『江山清楽』であることは、前段の拙論で述べてきたとおりである。

この『江山清楽』を初めて翻刻したのが、『菅江真澄全集』別巻一であった。底本となったのは、『江山清楽』の存在を内田武志に教示した水谷源二郎の家蔵本（富岡鉄斎旧蔵本・写本）である。

『江山清楽』の内容を知るには、テキストを読むことが当然必要であるが、「湖東游記」は漢文、「胆吹遊草」は擬古文（江戸時代、古文を真似て書かれた文章）であるために、一般には馴染みがうすい。

そのため、『江山清楽』の全編について、漢文については読み下しにし、擬古文については漢字を宛てて、読みやすさを考慮して掲載することにした。

現在、『江山清楽』を見ることができるのは、刈谷市中央

図書館（愛知県）の村上文庫にある『蓬廬雜鈔』（67／120冊中）だけである（以下、刈谷本と略記する）。ただ、この書冊には、他の二編の紀行文も書き写され、題簽に「蓬廬雜鈔 紀行」とあることから、紀行文を集めた書冊として書写されたことがわかる。刈谷本では、漢文の「湖東游記」の後に、鈴木胤による漢文の跋文、浅井図南による漢文の跋文が書かれ、それから和文の「胆吹遊草」へと続いている。

一方、当館・内田文庫に残る水谷家蔵本の六葉の写真によると、最後に浅井図南による跋文が見える。

跋文の位置については、鈴木胤と浅井図南に対して、「湖東游記」だけで跋文を求めたのか、「湖東游記」「胆吹遊草」の二編を示して跋文を求めたのかの問題と関わってくる事柄である。水谷家蔵本の六葉の写真については、本誌の後段に掲載するので、参考にしていただきたい。

本稿では水谷家蔵本に倣い、「湖東游記」（嘉言の識語を含む）、「胆吹遊草」、「鈴木胤跋文・浅井図南跋文」の順で紹介する。

本稿は、文字をそのまま起こした翻刻ではなく、解釈の便宜を図った註解である。原文の様相とは異なることなどから、それぞれのはじめに凡例を附した。本文に入る前に、一読していただきたい。

「湖東遊記」 凡例

一、本稿の底本は、『菅江真澄全集』別巻一・85～89頁に掲載されたものである。同書によると、出典は水谷源二郎家蔵本とある。

二、「湖東遊記」は漢文で書かれたものであるが、本稿では、それを読み下しにした。読み下しにあたっては、仲彰一「丹羽嘉言と鈴木服―菅江真澄の視座より―」（鈴木服学会『文莫』第十四号所収）（以下、『視座』と略記する）に大きく依存した。記して謝したい。

三、読み下しにあたり、送り仮名については、古典文法に従って歴史的仮名遣いを用いた。

四、読解の便を考え、適宜読み仮名を附した。和語については送り仮名との整合のために歴史的仮名遣いとし、漢語については現代仮名遣いとした。このように、仮名遣いを併用していることに御注意いただきたい。

五、底本とした原文の割註については、「」内に示した。

六、漢文語句の間違い並びに明確ではない箇所については、全集本と仲彰一論考、さらには刈谷本との文章を勘案しながら読み下しとした。底本とした全集本において、訂正が必要な文字については、【】内に正した。

七、文章の意味を考えて、適宜、段落を施した。

八、「湖東遊記」の二箇所、白井超の字（あざな）が「高甫」であるとの記述がある。菅江真澄の名乗として高甫が出てくるのは、現在のところ「湖東遊記」だけである。

九、一部、旧字を新字に改めたり、異体字を標準字体に改めたりしている。底本の題名にある「遊」も、以下「遊」を用いる。

十、素より漢文は不得手であるが、提案のつもりで以下に読み下しとした。より良い真澄研究のために、御叱正を賜りたい。

湖東遊記

庚子の春間謝庵に在り。一日雨晴れて、胆吹山を望めば、佳気（かき）常に非ず。忽（たちま）ち意（おも）ふ、盍（なん）ぞ一登して涉らざると。白生又苦（はなは）だ勧めて従はんことを請ふ。彦翁は彦根の人也。偶（たまたま）郷に帰らんと欲し、途を同じくして湖東の遊を為さんことを請ふ。篤卿は後に聞き、亦共に遊ばんと欲す。

余曰く、浪遊（ろうゆう）に名無く、人の怪しむ所と為らん。聞くならく、吹嶺藥草多しと。是の行（こう）之に採薬と名づけ、端午を以て期と為さんこと如何（いかに）。衆曰く、善しと。

五月朔、草廬（そうろ）を出で、城下に会す。篤卿は源姓、名は忠貞なり。彦翁は姓外村、名は諒久なり。白生超、字は高甫なり。余は嘉言、姓は藤、字は孔彰なり。

二日、早くに陰（くも）り、将に雨ふらんとす。衆、約を踐（ふ）むに急なり。余曰く、吉と為すよりは何ぞ必ずしもト（ぼく）を改めんやと。一決（いつけつ）して出づ。琵琶橋を過ぎ、中洲の空屋の下、携ふる所の具（そなへ）を列（つら）ねる。

彦翁次いで至る。衆、酌んで勸然（かんぜん）たり。送者と別れて西す。山田氏の門を過ぐ。已（すで）に叔清の近く齋を正法寺に徙【徙】（うつ）すことを審（つまび）らかにす。意を致して去る。

四谷に抵（いた）る。童生嘉六の店に酒飯す。其の父の名勇七、接礼甚だ殷なり。余輩一場（いちじょう）の快飲、閑然（こうぜん）として門を出づ。一行四人、唯だ白生のみ飲を解せずして、言ふこと能わざる者に似たり。

既にして雨脚（うきやく）疾走して、我をして国府宮の前に驅る。衆拌み畢（を）へて、雨装を著【着】す。是の日、日州侯西歸す。

稲葉村の店囂（かまびす）しきこと甚だし。萩【萩カ】原を過ぎ、尾越に抵る。雨は益（ますます）下（くだ）り、泥

濘（でいねい）に進み難し。時に越水（えつすい）は堤と平らかにして、茫洋として津に迷はんと欲す。

日州侯股（さか）んに濟（わた）る。中流に顧視（こし）すれば、樂しむ所有るが如し。西岸に登り、堤上の小店に飲む。又一邨の店に餅を喫（く）ひ、再び飲む。墨水「即ち洲股川、洲股の字、今墨俣と作（な）る」に近づく。路尤も滑らかにして、仆（たふ）れざらんと欲する者、戦々薄氷を履む。西に濟（わた）り、洲股に宿る。

三日、西に発す。右折して堤に上る。時に雨初めて霽（は）れ、旭日（きよくじつ）昇り始む。東北の衆峰（しゅうほう）層々として水雲の際（きは）に浮かび、蒼翠（そうすい）滴（した）たたんと欲す。西のかた養老諸山を望めば、青緑人を照らし、彩屏を列（つら）ねるが若（ごと）し。唯だ吹嶺の残雲を蒙（おほ）ひ、模糊（もこ）として輝きを蔵し、猶至人（しじん）の大潔を忌む也。

経して大明神の祠前に結す。曰く、既に大明神たり。人の解脱の為に要すに、又何の為に結するぞ。時に若（も）し余に告ぐる者有らば、曰く、結は解を為す所以（ゆえん）也。解を求めて結するは、知る所に非ざる也と。

早度【渡】川「即ち左和太利（さわたり）川、陸河の下流と為す」を濟（わた）り、陸河の堤を過ぐ。余嘗（かつ）て

伊藤不爭と赤坂に遊ぶ。此の流れを経（ふ）ること、今已（すで）に十年。歳は水と競ひ走り、人の老ゆるを顧みず。無情甚だしきは莫（な）し。因りて謂（いは）く、好日に好友を得て好山水に遊ぶは、良（まこと）に小縁に非ず。豈（あ）に蹉過（さか）すべけんや。是に於いて酒と豆腐を携へ、また赤坂の山に遊ばん。

駅（うまや）は山麓たり。北登すること十二町「一町は六十間たり。一間は即ち六尺五寸なり」、石窟に至り、虚空藏菩薩を礼す。

余、白生と先（ま）づ後山に登る。石林を穿（うが）ち、樹梢（じゅしょう）を凌ぐ。前遊も此に至る。西風は条（えだ）を振ひ、我を連ねて吹き堕（お）さんと欲す。今新緑は雨を浴び、明麗（めいれい）は相媚び、光景は故（もと）に非ず。唯だ石のみ旧知を為す。絶頂の処に至り、奇俊なる者を挹（えら）びて踞（うづくま）る。

篤卿、彦翁次に至りて、嘆賞して止まず。名石に題して下る。駅の西邨の店に飯し、垂井に休す。関原に飲み、路を取りて北国道に入る。山逕（さんじん）さんけい、崎嶇（きく）きく、漸く水声を聞く。過ぐる所の山村、曰く多摩、曰く藤川、曰く小清水、曰く神戸。泉石（せんせき）多趣（たしゆ）。上杉明神の祠前を過ぎ、右して小逕に由（よ）りて上埜村に至る。薄暮の纖月（せん

げつ）は微明（びめい）なり。清氣（せいき）掬（すく）ふべし。

篤卿、彦翁先に進み、松井氏に投宿す。是の地は吹嶺の西南麓たり。松井は里正に当たり、嶺上の事を知（つかさど）る。莊に入るは已（すで）に暝（くら）し。窗（窓）前の溪声は雨の如く、終夜耳を洗ふ。天明（てんめい）して始めて聴の特潔なるを知る。

四日、飯罷（や）み、糧を裹（つつ）みて吹嶺に登る。老僕導（みちびき）と為る。衆曰く、飲まずんば能（あた）はずと。樽を僕（しもべ）に負はせ、樽を望みて進む。莊後して溪を遡る。土地の廟前を過ぐ。羊腸（ようちよう）数十折、嶺上を仰ぎ見れば、残雪は指甲（しこう）の若（ごと）し。又数折を上がり、漸く蓊鬱（おううつ）を凌ぐ。豁然（かつぜん）として天は重暁の若し。

西のかた湖水を眺むれば、先づ竹生島を得たり。時に片雲湖面に生じ、或ひは断ち或ひは続く。冉冉（ぜんぜん）として南に徙（うつ）るに、宛然（えんぜん）一幅の渡海羅漢図たり。余輩の肉眼は未だ尊容（そんよう）を覩るに及ばざるのみ。是の日清和、群牧（ぐんぼく）途（みち）を塞（ふさ）ぐ。遇（たまたま）鬪牛を見る。余急ぎて其の尾を視るに、一は坡公の画を論ずるが如し。

右に松林を見れば、村人の祈雨(きう)の処と為す。導僕曰く、凡そ旱(かん)なれば則ち此に雩(あまごひ)す。猶雨ふらざれば、則ち絶頂に於いてす。大旱なれば則ち嶺を踰え巨洞に至る。巨洞は山の東辺、地は濃州に属す。昏(くれ)に発ちて、頂に晨(あした)す。尽日(じんじつ)力(つと)めて還る。未だ嘗て雨ふらざるはなき也と。

余曰く、早は天也。地に成して人に害す。害を避くるは勤むるに在り。勤めて能はざるは命也。命は本(もと)差無し。差は命を為す所以に在る也。人の差を好むは久し。雩(あまごひ)の差有るは、亦宜しからずやと。

再び進みて平坦を得る。胆吹弥三郎の踢球場たり。時に谷口雲を出(いだ)す。迅(はや)きこと吹雪の若(ごと)し。須臾(しゅゆ)にして散じ去る。此の地小黒石多し。倚(よ)るべし坐すべし。樹名山藍なる者石の旁らに叢生(そうせい)す。凡そ此の山、形勢雄偉(ゆうい)にして、愈(いよいよ)上があれば愈壯なり。

彦翁は矍鑠(かくしゃく)として、自ら山に縁有るを喜ぶ。眺めて且つ躋(のぼ)り、憩(ひて)且つ飲む。余、一石の上に踞(うづくま)り、眸(ひとみ)を凝らして西望すれば、湖は盃を勧むるが如し。島は酒中の花の如し。遠近の山岳は荏(むしろ)を排(なら)べるが如し。

老導、亦飲むを好み、飲みて喜ぶ。余の為に諸境を指して曰く、左方の灣は米原たり。簇(むら)がるは彦根たり。銳きは三上たり。赭(あかつち)は鏡山たり。面前の郷の最も近く居(ゐ)るは春照たり。山を踰えて湖辺に至るは觀音坂たり。長浜たり。早坂たり。右のかた水光(すいこう)の迂曲(うきよく)するに見ゆるは姉川たり。湖面の一黒子(ほくろ)は竹島たり。横長は沖島たり。最北は則ち竹生島、北岸は貝津たり。塩津たり。山本山たりと。

童謡これ有り。山本山は山邨(さんそん)と謂ふや。山邨は豈(あ)に舟を泊せんやと。衆笑ひて曰く、觀止めんかと。曰く、未だし也と。

嶺上の巨石を指して曰く、是、平等岩たりと。昔平等院と称する者有りて此の山に隱る。三たび徴(め)されて就(つ)かず。岩上に一棒を植(た)て、棒上に打ち坐す。其の説勝尾の行巡の事に類す。但し云ふ、平等院辞するに屈し、遂に山を下ると。北の一石は手懸岩たり。南は鷹岩たり。皆其の遺跡なり。或いは云ふ、役小角徒弟の飛行上人、是也と。

余曰く、飛行を為す者、豈に空に騰(あ)がるを難しとせんや。而(しか)して能く詭(いつは)りを舍(す)て正に歸す。謂(おも)ふべし、平等の名虚伝(きよでん)せずと。衆飲罷(や)め、緩歩(かんぽ)前進す。群牧(ぐんぼく)

四散し、唱歌相聞こゆ。是、山の六分と爲す。凡そ吹嶺麓の二分は茂林(もりん)を爲し、余りは皆純草なり。而して奇(めずら)しき花異なる卉(くさ)は名状すべからず。余は殊に本草(ほんぞう)に昧(くら)し。是の行、実に愧(は)ずべし。偶(たまたま)認むるべきは当歸たり、川芎たり、毛茛たり、玉簪たり。緑葉黃華、光彩は目を奪ひ、香氣は人を襲ふ。

再び進みて路傍に泉を得る。大きき碗の如し。明人の遊記の所謂(いはゆる)一人泉は是のみ。此(ここ)に進めば路徑(ろけい)認め難し。頂を望みて登るに、雪の積もれる処に至る。攫(つか)みて齧(かじ)るは数口、清冷(せいれい)骨に徹(とお)る。右して少し許(ばか)り登るに頂と爲る。東歩すること数武(ぶ)、凹(くぼ)みたる処又雪有り。融けて小流と爲る。亦飲むべし。

絶頂に小石室を作り、弥勒の石像を置く。導、鎖を開きて、衆礼し畢(をは)んぬ。此(ここ)に於いて東南を望めば、山海聚落(しゅうらく)見えざる所莫(な)し。唯遠きを以ての故(ゆゑ)のみ、觀る所莫きが如し。其の間わずして知るべきは、水は木曾河たり、山は御嶽たり。独り恨む所は、時午(ひる)を過ぎ、遊氣(ゆうき)障(さは)りを爲し、富士山を見るに及ばず。

北のかた三越(さんえつ)を望めば、衆峰(しゅうほう)層疊(そうじょう)し、勝(あ)げて数ふべからず。近き連嶺(れんれい)は曲玉山たり。其の石【岩】は残雪を嫌ふ。西面すれば湖水は前の如し。唯だ居(ゐ)る所愈(いよいよ)高く、臨む所愈深きのみ。正南は靈山たり。養老、多度に接し、乱山(らんざん)は起伏し、谿谷は縈廻(えいかい)す。東山の駅路は皆此の間より出づるを知る。四顧(しこ)して目を極め、而して興は窮(きは)まらず。唯だ余三十年此の山を仰ぐのみ。今経るゝ所を俯視(ふし)すれば、何れの翅蟻垤(はねありづか)ぞや。真に一笑すべし。

篤卿、高甫題詠有り。石に書きて石室に蔵す。余、默坐して香を焚く。連飲すること数盃、齋(もたら)す所を喫(の)み尽くす。鼓腹(こふく)にて散歩して、山を下らんと欲す。導、一処に引く。其の地石室の北東たり。叢篠中怪石突起す。勢ひ奇を争ふ者に似たり。此れ泉水と名づく。豈に天巧(てんこう)を以て人力を仮(か)らずして、一種の園林の致(おもむき)有るを自ら賞し非らざらんや。蓋(けだ)し俗語のみ。夫れ園林にして真趣(しんしゆ)を具するは、世を挙げて顧みる無し。真山にして人力に似たるは、人皆誇称(こしよ)す。天の人に媚ぶるに非ず。人自ら専らにする也。

復た石室の前を過ぎ、西望して山を下る。斜暉(しゃき)

は横射（おうしや）し、湖光は眉睫（びしやう）に映ず。陂陀（はだ）を下視（かし）すれば、牛は虱（しらみ）の如く、人は蚤（のみ）の如し。唾（つば）すべし拾ふべし。憩（ひて）再び平原に至る。

白生と雩（あまごひ）処を尋ぬるに、祠前に古木怪石有り。自ずからは文士得意の筆迹なり。古人云く、似たるは猶貴（たふと）ぶべし。況（いはん）や其の真なる者をやと。余、之が為に躊躇（ちゆうちよ）し、殆ど其の下に留宿せんと欲す。松林を出て麓に至る。歩を信じて到るべく、導を先づ帰らしむ。余四人徜徉（しょうよう）して下り、土地の廟（たまや）に到る。暮色は森に陰（くも）る。溪声（けいせい）を聴き故道を認む。一日にして隔世の若（ごと）し。奇遊と謂ふべし。是の夜、再び松井氏に宿る。

五日、陰（くも）る。彦翁、木本菩薩を拜まんと願ふ。篤卿、小谷城趾を觀んと欲す。余、白生と竹生島に急ぐ。但し湖行は晴和（せいわ）を宜（よろ）しとす。是の日は長者に譲る。因より天人に逆（さか）らはざらんとす。

飯罷（や）む。主人送（りて）春照に至る。余四人北行す。右に吹嶺を顧みれば、山麓及び雩（あまごひ）處、歴歴（れきれき）指すべし。嶺上は風雲擾（みだ）す所と為り、亦模糊に属す。

姉川を渡る。昨（きのふ）終日臨む所、今思ひ半ばを過ぎ、

路を取りて三河邑に投ず。此の地慈惠大師〔俗称、元三大師〕降誕の処と為す。寺名は玉泉、堂宇残廢し、經營を待つ有り。所謂竜水は、平地の湧泉なり。小堂を作り之を蓋（おほ）ふ。堂前の甃（かはら）石は方沼を為し、丹魚數頭を畜（やしな）ふ。余流は村莊（そんそう）に及ぶ。清潔は喜ぶべし。少し寺前に休す。

小径は山麓に由（よ）り小谷に抵（いた）る。再び北行し郵店に飯す。地名は馬上〔讀んで末計（まけ）と為す〕。舍前の小水は洶洶として、鷹と為りて枝流を執る。適（たま）ま孤鶴の田間に翱翔（こうしょう）する有り。再び進みて鷹水を済（わた）り、木本に抵る。

地藏王菩薩を拜す。相ひ伝ふらく、本尊は西天竜樹菩薩の手成なりと。靈驗は著明（ちよめい）にして、香火（こうか）絶えず。寺名は淨信なり。正堂一座は頗（すこぶ）る壯麗なり。余は觀る所無し。寺の旁らの小店に投宿す。猶、哺（ほ）に及ばず。余、疲倦（ひけん）すること甚だし。飯浴並びに廢す。一臥して曉に至る。

六日、昨（きのふ）は頑陰にして雨ふらんと欲す。而して今早大晴に歸す。余、已（すで）に爽然として、雨〔両〕腋に風生じ、心は湖上を飛ぶ。彦翁、供（そなへ）を設け菩薩を礼す。

衆、再び随行し、供（そなへ）畢んぬ。還りて南に歩き、岐（わか）れて右す。平安の正路為り。過ぐる所の田野の村落、平坦明淨、目未【未】水を見て、身は既に湖辺に在るを知る。一処に埜堤を得て、右折して、早崎に抵る。舟を買ひて竹生島に遊ばんとす。時は正午、舟人の家に飯す。此の地島の正東となりて、離島最も近し。

岸前に舟を放ち、蘆葦（ろい）の中を突き、一直に西渡す。是の日、風恬（やす）く気は和（な）ぎ、五十町の湖行は安き瀾（なみ）に坐するが如し。衆、嘆賞するに暇（いとま）あらず。四顧して誇（ほこり）を争ふは還湖の諸峰。胆吹特に秀（ひい）づ。吾輩、昨（きのふ）其の頂に躋（のぼ）り、今の泛（うか）ぶ所を臨む。

湖は已に吾を酔はしむ。山は猶吾を顧みる。於戯（あゑ）、太平の世、暖飽（だんぼう）の余、日は湖山と相親しみ、興を仁者（じんしゃ）の樂に寄す。又何ぞ幸ひなるや。

島は舟首に当たる。細は漸（やうや）く巨に、蒼は漸く白し。島上、鷗鷺は松頂に巢くひ、散り飛ぶは雪の若（ごと）し。誼雉（けんざつ）は市の若し。唯鶴のみ群れず。棲む所は自ずから別なり。島の北、巨巖離立す。是小島と名づく。蓋し神靈の鍾（あつ）むる所なり。峭拔（しょうはつ）奇峻、驚くべし畏（おそ）るべし。所謂根を金輪際に結ぶは、甚だし

く誣（し）ひざるに似たり。

既にして岸に近づく。樹は皆秀媚（しゅうび）にして、石は皆磊落（らいらく）なり。之を兼ねて層樓（そうろう）の複道（ふくどう）は、参差（さんさ）しんし。掩【掩】映（えんえい）し、波光と上下す。奚（なに）をか畫（ただ）図を画（えが）かんや。

先君嘗て謂はく、之を盆盎に置き、之を几案（きあん）に列すべきは、竹生島之に尽くと。

嘉言一世斯（こ）の語を奉じて、之を今日に徵（め）せば、遺憾無し。舟を舍（す）て岸に上がり、級（きざはし）を拾ひて登る。右転して觀音閣に至り、菩薩を礼す。是西国巡礼は第三十靈場なり。閣は崖に傍（そ）ひ巔巖（ざんがん）に架く。規模【模】宏壮（こうそう）にして且つ巧緻（こうち）なり。丹粉剥落し、古色観るべし。廊（ほそどの）は正殿に達す。位置は最も佳し。殿視閣、差は小にして麗しきは之に過ぐ。殿前に拝経殿、鐘樓は左に在り。級を下りて経殿に至る。闌（てすり）に馮（よ）りて湖を瞰（みおろ）せば、脚下紺碧にして虚（うつろ）を涵（ひた）す。松と石と奇を闘ふ。皆俯視（ふし）すべし。江を隔てて巒（みね）は層（かさ）なる。淨きこと新画の如し。勢ひ筆を架すべし。

時に天には片雲無く、万軍【里】一清、地は仏土（ぶつど）

と同じく纖塵（せんじん）を揚げず。島上に遊ぶは、唯余四人のみ。先渡の者は皆歸去す。偶（たま）たまたま樵夫（しょうふ）（しょうふ）有り。楼下に横臥し、午睡（ごすい）正に濃し。是に於いて群動（ぐんどう）寂然（せきぜん）、白日（はくじつ）は猶月下のごとき也。

白生曰く、此の清境（せいきやう）に對（むか）ひて佳句無し。恐らくは神靈の嗤（わら）ふ所と為らんと。余曰く、三千世界眼前に尽き、十二因縁心裏（しんり）に空しとは、豈に今日を謂ふに非ざらんや。神詠は上に在り。又何をか加へんかと。

再び級を下るに宮崎「此の地実は磯と稱すべし。而して俗に左木（さき）と為して読むは、崎字或ひは碕字を用ふ。今、俗読に従はざるを得ざる也。和名鈔に岬・汀、皆三左木（みさき）と為す。此の地に於いて当たらざるに似たり」と為る。巨石疊起し、水三面を囲む。碕上に鳥居「近日鳥居を稱するに萃【華】表（かひよう）を以てする者有り。未だ之を詳らかにすること能はず。但し、萃【華】表を訳して鳥居を以てするは或いは是に近し。鳥居に填（は）むるに萃【華】表を以てするは、国音（こくおん）を嫌廢するごとし。従ふべからざる也」を植（た）つ。巽（たつみ）に對（むか）ひて位（くらゐ）し、神殿の正面を為す。石塔有りて半ば廢（す

た）る。是島中の絶勝処にして、絶險処たり。貪玩して此に至る。又久しく留むべからず。歩を還（かへ）して上り、正殿に至りて神を拝す。

貝原先生の遊記に云く、此の神即ち市杵島姫なりと。一に曰く、素戔嗚尊の御子、宇賀御魂命なりと。延喜式に浅井郡都久夫須麻神社と稱す。浮屠（ぶと）は弁財天と謂ふ。一に曰く妙音天なりと。

嘉言謹（つつし）んで按ずるに、都久夫須麻は自ずからは本国（ほんこく）の正音（せいおん）なり。然れども其の義は未だ詳らかならず。蓋し後世の仮音は竹生島と作（な）る。而して相生竹等の説を附会す。鄙俚（ひり）焉（ここ）より甚だしきはなし。近き世の詩家は俗を避けて笙島と稱す。巧（たく）みなれば則ち巧なり。字に拘（か）かずらひ名を廢するを如何せん。

或いは曰く、島素（もと）より竹樹饒（ゆたか）なり。万籟（ばんらい）時に奏す。笙島の称の縁無きは、況んや神名は妙音なり。音楽を喜ぶこと有らんやと。

余曰く、夫（そ）れ、名は独り守ること難し。字を得て義理を伝ふ。猶神は孤立せず。仏を仮りて威福（いふく）を増す也。寺僧宝物を示す。凡そ一十九種。其の目（もく）は別に見（まみ）えん。島上の僧居今六院を為し、山半ばに鱗次

(りんじ)す。

余、貝原先生の記の如く、復た観音閣に至る。篤卿は僧と語りて諄諄(じゅんじゅん)、意を古宝の玩に傾け、又歸るを言はず。余、既に神谷齊卿の西遊を聞く。亦必ず湖上に在らん。因りて其の状を以て問ふ。

僧云く、数日前其の人有り。唯主僕のみ此に来たると。曰く、是也と。謝して別る。岸边に店有り。巖に階(きざはし)して樓と為す。眺望亦佳し。舟人睡(ねむ)り足りて、偏(ひと)へに帰帆を催す。是に於いて賞するに飯【暇】(いとま)あらず。名【各】手に酒菓(しゅか)を提(さ)げ、相(あひ)携へて舟に登る。懷を放ちて酌を緩(ゆる)む。洵(まこと)に樂しむに足る也。

右に比良・比叡を顧みる。遙か西なる竹島・沖島は水光と相(あひ)蕩(とろ)く。左は則ち貝津・塩津にして、眉睫(びしょう)近接す。山根の水際、区画分明なり。面前東南の一峰、峻(たか)きこと胆吹に次ぐは、余、以為(おも)へらく靈山なりと。而して衆喧然(けんぜん)として定論無し。

早崎に歸り、岸に上がる。日漸く斜めなり。故道を尋ねて桮堤に至る。稍(やや)南して水を渡る。長浜を距(へだ)つこと遠からず。又一水を渡る。姉川の下流と為す。凡そ湖東の地面蚕家(さんか)多し。到りし処柔桑畦(あぜ)に盈(み)

つ。時に落暉(らつき)西に沈み、翠影(すいえい)観るべし。是の日長浜に宿る。

七日、早くに御坊に至る。御坊は他力門徒の道場にして、本願寺東派たり。時に導師說法す。声音清亮(せいりよう)、旨趣(ししゅ)正大(せいだい)、聴衆數百人肅然(しゅくぜん)として悅服(えつぷく)す。余も亦稽首(けいしゅ)し、仏恩(ぶつおん)を謝して出づ。

浜の南、湖に沿ひて數里、米原と為す。舟を討(たず)ねて大洞に渡る。過ぐる所の湖山、絳(こう)青緑浅く、皆人懷を散ずるに足る。大洞に近づく。右に彦根城の堞(ひめがき)を望む。最も壯觀を為す。岸に登り茶亭(ちやてい)に飯す。岸边鳥居を植(た)つ。牌額の題字は古篆を倣(な)す。略(ほぼ)観るべし。

石の階(きざはし)を登ること凡そ數百級。而して樓門を得る。門内の宮殿煒煌(いこう)、門外の湖山清澄(せいちよう)たり。好し、一幅の李將軍の仙山図たるに。其の竹生島に譲るは、奇古(きこ)及ばざるのみ。正殿西向し、弁財天像を安(やす)んず。殿右の高き処白蛇廟殿と為す。南して、山径に由(よ)りて経堂に至る。輪藏を転(まわ)す。此の地彦根城に属す。法は冷厳(れいげん)にして重く、軽く殿内に入るを許さず。今縦觀(じゅうかん)を得るは、彦翁の

力有り。

故道を易(か)へて茶亭に至る。更に湖に沿ひて南歩するに、少し許(ばか)りにして青竜禪寺を為す。堂の廡(ひさし)は渚【清】楚にして、淨きこと拭(ぬぐ)ふが如し。是の日晴熱、余の眼、萃【悴】を生じ、細玩を致すこと能わず。尤も恨むべしと為す。

下午(かご)、彦根に抵(いた)る。彦翁と別る。翁、導と為り且つ送り、通りを截(た)ち坂下に至る。余三人、截嶺を踰(こ)え島本に至り、西歸す。是東山道たり。諸家の遊記已(すで)に詳し。余、亦(また)数(しばしば)此に往還し復(ま)た記するを欲さず。省法に従う也。

篤卿、一路故跡を訪(とぶら)ふ。情状【状況】怪しむべし。是に痴者は不知を以て答え、黠者は売弁を以て給(あざむ)く。篤卿察せずして、独り心を糟糠(そうこう)に酔(よ)ひしむのみ。余、頗(すこぶ)る耐えず。規諷頻数(ひんすう)するも、亦斯く疏(しる)すを見ず。

醒井に宿る。夢に湖上に余を召す者有り。余応じて起(た)つ。時に明月は松間に在り。螢火は夾道に迎接(げいせつ)する者の如く群飛す。興に乗りて去り、興尽して覚む。

八日、倦(う)むこと甚だし。加之(しかのみならず)、目眚(かす)みて累(るい)を為す。遊観する意無く、即ち

輿(こし)に就く。復た歩すること能わず。冥行夢の如く、歸心は箭の若(ごと)し。大垣を過ぎ、洲股に抵る。初二日宿る所の店に止(とど)む。

九日、輿行は昨(きのふ)の如し。晡時(ほじ)家に歸る。既にして篤卿と別る。白生、四谷に嘉六と見(まみ)ゆ。琵琶洲(しま)に叔清を訪ねて遇(あ)はず。輿に先んじて歸る。

既歸の次日、大いに雨ふる。白生遊記を草(そう)し、終日苦吟す。余、疲倦(ひけん)して病と成る。嘿嘿(ぼくぼく)と牀に在り。小記せんと欲するも、猶能はず。後三日、奮然として起き、曰く、吾酒を忘るること数日なり。是病を欺(あざむ)く所なりと。急に一酔せんと欲するも医(くすし)許さず。余、医を辞し壺を引きて連飲すること三碗、病頓(とみ)に醒(さ)め、腹稿(ふっこう)漸く脱す。

又数日、斉卿来たり。ともに竹生島の勝を談す。斉卿亦舟を早崎に発し、島に渡り、月定院に宿る。時に四月廿二日なり。斉卿曰く、正殿の東北に常行院有り。簷前(えんぜん)湖に臨むに、眼界(がんかい)更に優(すぐ)れり。宮碕の下に洞穴有り。浅深を知らず。以て奇観を為すに足る。是の夜更に深く、月色絶佳(ぜっか)、寝て復た起(た)つこと再びなり。

次日、舟に命じて島辺を一匝(めぐ)りす。崖間の奇石、殆ど数ふべからず。其の一つ驚岩と名づくは、之を望めば駭

(おごろ)くべし。余、聴きて此に至り、自ら視ること欠然(けつぜん)として遊の徧(あまね)かざるを愧(は)づ。茲(ここ)に其の語を紀(しる)し、以て余の陋を補ふ。

是の月廿三日、般若台に至り、西のかた胆吹を望む。自ら早く素志(そし)を償ふを喜ぶ。且つ是の行の採葉を以て始め、病を得るを以て終はるを笑ふ。遊を紀(しる)すこと数紙、区区(くく)たる末技(まつぎ)にして、固(もと)より大丈夫の事に非ず。因りて幾か時、能(よ)く文墨(ぶんぼく)の業障(ごつしょう)を脱却し、洒洒落落(しゃしゃらくらく)塵表(じんぴょう)に跳び出でんかと嘆く。唯驟(には)かに得べからざるを知るのみ。姑(しばらく)く筆を糟丘(そうきゅう)に埋め、以て醒人の笑ひを俟(ま)つと云ふ。
安永九年夏日、尾張野人嘉言、般若台の謝庵に書く。

陳仁錫の言有り。山水に遊ぶは睡臥(すいが)の如し。記述は昨夢(さくむ)の如し。其の夢みる時に当たり、好醜皆夢なり。一たび改竄(かいざん)を経(ふ)れば、情事倍(ますます)佳(よ)し。乃ち昔夢に非ざること無からんやと。斯(か)くの言是也。

唯余の遊草は、愈(いよいよ)改むれば愈妄(みだ)りなり。夢にして更に夢を作(な)す。其の議論横出に至る。唐

突に顧みざるは、則ち何ぞ寢語に異ならん。覽(み)る者怪しむこと莫(な)くんば幸甚なり。
嘉言再識す。

「胆吹遊草」 凡例

一、本稿の底本は、『菅江真澄全集』別巻一・89～96頁に掲載されたものである。同書によると、出典は水谷源二郎家蔵本である。

二、読解の便宜を図り、和語に適宜、漢字を宛てた。その点、底本とした原文とは異なることを了解していただきたい。

三、読み方に迷うことが想定される語句については、和語の下の（ ）内に漢字を示したり、漢字の下の（ ）内に読み方を示したりした。後者では、歴史的仮名遣いを用いた。

四、（ ）内のカタカナは、底本にあるルビである。

五、文中にある漢詩の読み下しについては、仲彰一『視座』を参考にした。

六、言葉や意味の流れなどを考慮し、適宜、句読点の位置を変えた。また、段落の位置を変えるなどした。

七、誤字については、その都度（誤…）内に示した。

八、必要などころには、【 】内に現在の地名表記や解説を附した。

九、会話文には「」を附けた。

胆吹遊草

雨の晴れたるあした（朝）、遙かに伊吹の山を見れば、雲

の景色世の常ならず。いと珍しく覚えしかば、にはかにこの山に登らまく思ひたちて、五月五日、もも（百）の草採らんとて、これが高根を極めんはいかにと言へば、ともに遊ばんといふ人、源忠貞、白井超なり。その国に生れてその山に登らざることを恨み、こゝに年経て、たまゝふるさとに帰るついで、われと道を同じくせんと願ふ人、彦根の翁外村諒久なりけり。いま筆を取りてその由を記せる人われ嘉言とゝもに四人、この月二日のあした（朝）、名古屋を西に出たちて、曇れる空をうち眺め、よつや（四谷）に至る。

こゝに勇七といへるは嘉六が父なり。嘉六は六の歳より物書き習ひて、ことし八ッにて、世に名高き童なり。われ去年より相知りたれば、その家に訪ふに、勇七懇ろにもてなして、人々に酒を勧む。我ら飽くまで給ひて、別れ出づ。

雨しきりに降らんとすれど、酔ひの紛れには事とせせず、すでに降れど、耐へに耐へて、国府の宮【国府宮、こうのみや】に走り着きて、息つきあへず拌み終はりて、蓑を着る。

日向の国主の西に帰り給ふを後先にて、稲葉、萩原【萩原カ】を過て、尾越に至るまで、道滑りて歩み難し。尾越川【木曾川】海のごとく満ちて、渡りに迷ふほどなり。洲の股【墨俣】に近づきて、道殊に悪しく、雨も止まず。厚き泥に滑らじと心づかひして、薄き水を踏むがごとし。からうじて洲股

に至りて宿る。

三日の朝、空疾（と）く晴れたり。

人々喜びて宿りを出づ。堤にのぼれば、日まさに出んとし、東北の山々と麗しく見ゆ。裾はみな雲に埋みて水のごとし。それが中にはまこと（実）の川もありて、その川のえだ（枝）殊に雲多かるべし。

峰はみな青くみどりに潤ひて、水の中より引き出せるがごとし。日いでて西の山を望めば、みどりに輝けるも多くあれど、伊吹の峰は猶雲に紛れて見えず。早渡川を渡り、堤を右にのぼりゆけば、老たる柳の多く立てる所、陸川の渡りなり。

十年の前、俊介とゝもに此路を行き帰りしを思ひ出て、自ら悲める言葉。

東山駅路老経過 憶旧遊行浜陸河 逝者如斯時与水 清流不皺類翻波

東山駅路、老いて経過す。旧遊行を憶（おも）ひ、陸河を浜（さかのぼ）る。逝く者は斯くの如し、時と水と。清流は皺（しわ）まず、類（ひたひ）に波を翻（ひる）がへす。

面にたゝむと言ふべきを、類（ひたひ）に翻すといへる。せんかたなきことにや。人笑ふべし。

赤坂山【金生山（かなぶやま）】の麓にて、酒少し整へて

山に登る。良き所にて人々飲みて、またも登る。われ白超と先づ岩屋に詣で、細き道を後ろに登り、草を分かちかつら（蔓）を振（よ）ぢ、あやしき岩の頂に跨（またが）りて、東の麓を見れば、緑の梢、目の下に涌くが如く、其中に家居あらはれて、絵を見るに異ならず。前に登りし折りは、秋の風激しく吹て、転（まろ）び落ぬべく覚えしが、今日はひきかへて心静かに眺め居り【「り」に「本ノマ、」を付け、「る」に訂正】。忠貞、諒久、遅れて来り。皆、目驚かして喜ぶ。名を右に書付けて人々下りぬ。

青墓の古跡、人知る所なり。これより東にかぶと（兜）塚といふを白超見て、

いつの世にたれかうづみし【「し」のルビ位置に「けん」かぶとつかきてものゝふのむかしをぞとふ
青野が原に長範【熊坂長範】が物見の松を見て、われ戯（たはむれ）にいへらく、

老松縁賊聞 青桮独魁梧 但惜氷霜質 堪書莽大夫
老松賊に縁（よ）りて聞ゆ。青野に独（ひと）り魁梧（かいこ）たり。但、氷霜の質を惜（を）しむ。書するに堪えたり、莽大夫。

垂井川を渡り、駅（うまや）の西なる家に憩ひて、伊吹に至る道を問へば、行くさき野上【岐阜県関ヶ原町】より入る

と答ふ。

春照【すいじょう、滋賀県米原市】てふ所はと問へば、「伊吹山には近江なる上野村といふ麓より登るなり。その道は関が原【関ヶ原】を右に、北国道を行き、玉といひ藤川といひ小清水といふ所を経て、直に行けば春照に至るを、上杉の社を過て、細き道を右に入りて上野には行くなり。近江にもこゝにも、伊吹といふ里はあれど、山に登るは上野村の知る所也」といふ。

宿り屋あると問へば、「春照は馬継なり。その他は宿もなし。請て宿らんには、その村の長たれく」と詳らかに語る。

われうれしきまゝに、酒少し過して、道を急ぎ歩く。

野上にて餅食ひ、関が原にて名酒を飲み、教へし道を行くに、たが（違）ふことなし。暮に迫りて、上野村のをさ（長）松井何がしがもとに宿る。

白超、道すがら詠める歌ことくくはえ書かず。またその記せることのおかしきは、其まゝこゝに書付く。関が原のあたりにて記して云、いくばくの里を越ゆれど、たゞ麓を巡るやうなるは、みのゝ中山なりけり。

あすはまたいつこのみねを友とみんなこれも旅なるみのゝ中やま

上野村は伊吹山の西南の麓なり。谷水の落る音も激しく、

夜とゝもに枕に響けば、雨や降るらんとあやしまれて、戸押し開け見れば、明星（あかぼし）のかげいと清く澄みたり。

四日、朝まだきに糧を包みて伊吹の嶺に登る。

こゝより里も家もなく、食ふ物もなければなり。人々飲ずはあるべからずとて、酒を乞ひて、道引（導）ける翁に負はせ、樽の尻を見上げて、曲りにまがれる坂を行つゝ、杖を立て、抑（誤：仰）ぎ見れば、雪いと白く爪の形に峰に残れり。西にかへり見れば、湖と見るや見ざるに、竹生嶋いと著（しる）し。

猶も登りて、茂山をのがれ出づれば、再び夜の明たるがごとし。されど峰は猶東北に高くそびえて、いつ至るべくも覚えず。たゞ湖の形（かた）のみ明らかに残りなく見ゆ。折ふし、一片の雲竹生嶋の前に浮かびて、やゝ南に映るありさま、いはん方なく珍し。こゝにて先（まづ）飲む。これ山の二分ばかりなる所なるべし。

けふ（今日）、日和殊によろし。草刈りども牛曳き、連れ群がり歩く。闘ふ牛あり。われ早くその尾を見るに、古人の論に云えるがごとし【蘇軾の「画工闘牛の尾を誤りて牧童に笑わる」の故事に基づく】。

此あたり、坂なだらかに道なほ（直）し。右に松林あり。里人の雨祈る所なり。山の間を経て平らなる所を、伊吹弥三

郎がまりけ（鞠蹴）場といふ。右の谷より雲出づ。疾（と）きこと吹雪のごとし。見るがうちに消失せぬ。

道にさし出たる岡あり。其下、谷殊に深し。過來し道に「くらのうち」といひ、「よしはら」といふ所も有けりと白超いふ。これまで憩ふことすでに三たび（度）。猶眺め良き所にて人々酒飲む。道引（導）き翁も酒に過ぎて、飲に喜び、見え渡りたる所ども、心残さず云ふなり。「湖水に浮かびていと小さきは竹嶋なり。長きは沖の島、入江のやうなる所米原にて、其向ふは彦根なり。づいと高きは三上山、赤はげはかゞみ（鏡）山、近き山々は靈山といひ、弥高山といひ、離れて低きをゆり山といふ。春照は目の下に見えて、観音寺坂を向ふに越えて、長浜も早崎も湖（うみ）の端（はた）にて、右には木のもと【木之本】もそこ、小谷はこゝ」といへど、我しかと見付くること難し。たゞ明かに見ゆるは姉川の流れ白く照りて、末は湖に入ると見えし。

竹生嶋より北の岸は名にし負ふ貝津、塩津にて、山本山も見ゆるといふ。童べの歌に「塩津の山がの（退）いたらよから、貝津が見えて猶よから、山本山を山家じやとおしし【し】のルビ位置に「ヤカ」る、山家に舟がつくものか」と唄へりといふ。人々興じて猶も聞ことあらんといへば、翁、峰に向かひ、一ツの巖を指して曰く、「是を平等院岩と申也。むかし平等

院といふ人、この山に隠れ住みて、あれなる岩の上に、六尺の棒を立て、棒の上に坐を占めて居給へりしを、時のみかど（帝）より勅使給はりて召させ給ふに、参らざりしこと、隱逸伝【扶桑隱逸伝】に載せし勝尾なる行巡のことに似たり。こゝに此人はこと（言）葉極まりて、つい二山をくだりしと申伝ふ。少し北二見ゆるを手かけ岩といひ、南を鷹岩といふ。是も同じき跡なりと語る。或は役の行者の御弟子飛行上人とも申とかや。

わが曰へらく、「飛行てふ人、通力をも具してん。空に騰るを難しとせんや。其みことのりをはづかしめず、又あとなくなりゆきしこと、まことに平等の教といはん。名の下むなしくらずというべし」。

人々こゝに忘るゝばかり憩ひ、思ひ起こして進む。路險しいへど、頂まで隠るゝ所なければ、われ導に先立ち、峰を望みて登る。此あたり山の六分なりといへり。

凡此山二三分が程より上は、草ばかりにして樹なし。たま／＼山あゐ（誤：あひ）（間）といひて二三尺ばかりなる樹、石の傍より生出づ。石は黒し。大なるは稀なり。倚（よる）べく跨るべき石どもよき程三立てり。躑躅花咲ける咲ざる、所々に見ゆ。草々は限りなけれども、黄なる花の今を盛りに、いと大きはきんぼうげ（金鳳花）とかや。葉種は当帰、川芎、

防風など、導採りて示す。わがもとより知れるは、すみれ、あざみ、玉簪、よもぎ。問て知れるは「鶴のはぎ」といひ、「いつまで草」といふもの。その他にも多かれど、記すに堪へず。水湧く所一ところ、穿つこと碗の大きにして、石を並べ流を淨む。草刈りの仕業なり。明人の遊記に一人泉あり。こゝに名付くべし。艸刈りども大方は此あたりに出でたる。牛はもとも下なるべし。

是より路定かならず。坂險しきは曲がり、緩きは直ぐに、百（もも）の艸を踏み分け登れば、緑の色目も清（さや）に、殊なる香袖に満てり。峰の雪の近づくに勇みて、半ばは這ふやうにて其もとに至り、掴み食らふこと数多（あまた）度（たび）。清う冷ややかなる氣味骨に通れり。

猶少し登れば、むきから蟬鳴く。やがて袂にとゞまれり。かくの如きこと再び。怪しむべし。

頂の窪める所又雪あり。低き方にとけて流る。其水甘し。石うつたかく積みたる所、上人写經の跡なりといふ。

左東に弥勒の堂見ゆ。山のもとより（髻）といふべし。そこに至れば、縦横五尺余りの石の屋構へて、銅鑠厳めしく閉ざせり。導、鑰（カギ）取り出て戸を開く。内には菩薩の像一軀南に向かへり。外に燈籠二基。風に耐へざるが故に、こゝとく石も（以）て作れり。

人々拝み終りて、南東を望めば、目の限りは海の果てに至りて、近く著きは木曾川の流なり。御嶽【御嶽山】は雪をいたゞきて、いづくにも紛るゝ方なし。其ほかの山々、皆、児うまご（孫）と立ち並びて、その数挙げて数ふべからず。北は三越路をはじめて、近くこの嶺に連なるを曲玉山と名付く。其嶺に白きは雪ならで石なりといふ。南は靈山にして谷深く巡れり。西は前の眺めに同じく、たゞうち見るところ殊に遠し。

われ、にしひんがし（西東）をわきま（弁）ふるより、此山を見習ひて、ことし四十に一つ足らで、けふ（今日）頂に登りて、いたづらに過來し月日を返り見れば、言ふ甲斐なき夢に似たり。

かの遊び歩きところ、蟻垤のごとく目の下に見ゆるはいと儂し。無参【参】のルビ位置に「本ノマ、」と名付くる木を弥勒菩薩に供へ奉りて、

ふるさとをかへりみろくの御前には何といふきの言の葉もなし

とはいひたる。

諒久これを聞て、「里異なりといへど、返り見る心はわれも同じかりなん」といへり。此翁七十あまり四といふ歳、かゝる險（さが）しき嶺に登る。古来稀なる例（ためし）にやあ

らん。

忠貞、からうた（漢詩）作り石に書付く。猶、朗詠めくともあれど、繁ければ漏らしつ。

これより導に随ひ、泉水といふ所を見る。石室より北東に下りて、小篠原を経て、大なる岩の群がり立てる所、これを七つの高根に例ふ。富士と名付けたる岩、殊に優れたり。見終りて、もと来（き）し道を登る。此あたり大葉なるもみぢの木多し。長二三尺に満たず。再び石室の前を過て西に帰らんとす。いつもの例（ためし）とて、艾（もぐさ）採る者三人、頂にて見し。

白超記して云。

あじか（蕘）荷ふて葉採る男、いづこに行けん、見えず。しばらくありて、遙けき谷に唄ふ声するを聞て、

くすりとするかたはそこもしら雲のあとよりうづむ谷のかよひぢ

白超また、ほとゝぎす聞ける所にて詠める歌、

つま木こるおのがはつ音といふきなる山ほとゝぎす声もかすかに

かくて日も傾けば、急ぎ下る。艸刈りの声は聞ゆれど、私たちは見えず。伏して静かに求むれば、遙かの下に、いと小さき虫の草の葉を渡るやうにて、牛は蟻のごとく見えたり。

すべて帰り路はいと遠からず覚ゆるものから、殊に疾く下りて、雨祈る林三人りて見るに、祠のほとりに怪しき石立てり。旧りたる木の根これに纏ふ。そのさま蘇長公【蘇軾】の描き出せる類なるべし。蘇子由【蘇轍】の言葉に、「画を尊ぶは似たるが為なり。似たるもの猶尊ぶ。況や其真なるをや」といへり。われこれが為に去に忍びず。日影横さまに照らし、湖の面まばゆき程になりて、導を先に帰し、われら四人静かに下る。

茂山に下りてにはかに暗し。溪の声に今朝の道をと（求めて、申のさがり（下）に宿に帰る。一日にして世を換へ、再び下界に遊ぶがごとし。

主、待ち設けて、日和の宜しかりしを相喜び、かゝる「れんしやう」は稀なりといふ。頂に登ることを、所の人は「れんしやう」といふなり。此里より頂まで凡三里ありといへり。この山根の「れんしやう」は、多くは水無月の比（頃）、宵より装ひして、夜もすがら登り、頂に至りて、出る日の三尊に見えさせ給ふを拝みて帰ること、大方の山のごとし。その折りは富士山も明らかに見ゆる【る】のルビ位置に「本ノマ、」といふ。主、盃出して、猶物語多かれど、われ眠たければ辞して寝三けり。

五日、曇れり。

われこのついでに竹生嶋に遊ばんと思へど、けふ（今日）の空にはいかゞあらんと人々と計るに、諒久は必ず木の本の菩薩【木之本地蔵院、淨信寺】に詣でんといへば、これに従ひて宿りを出す。

主、春照まで送る。別れて北に行き、右に伊吹を振り返れば、嶺は雲重なりて見えす。雨祈るあたりより下は明らかに見えたり。

姉川を渡り、行ゆきて左へとりて三河村に至る。こゝは元三大師降誕のところにて、玉泉寺といへる寺あり。今は荒れたりといへど、庭の面には竜宮水といひて、たえず流るゝ泉あり。白超、

ふるさとの名もなつかしくむすぶ哉こゝにみかはのみづのながれを

其身三州の産なればなり。小谷を経て木の本の宿に宿る。

六日、今朝よく晴たり。

竹生嶋に至らんこといと易しとて人々喜ぶ。諒久、地藏菩薩に供御奉る。此菩薩は、天竺竜樹尊者の御作にて、靈驗あらたなること世に知るところなり。寺を淨信寺といふ。昨日も参りて再び参る。本堂西に向かひて、階高く軒豊かに、正面広さ二十間ばかり。製造久しからざるに似たり。これより南に帰り、京都に至る道を早崎に折て、竹生嶋に渡り、元の

道を南に、長浜に宿る。

其こと詳しく外に記せり。こゝには白超が歌を載す。

高月の里に卯の花咲きみだれたるを見て、

たかつきのさとのかきねのうの花に声なへだてそ山ほとゝぎす

早崎より舟出して、沖なる舟に乗り換へて竹生嶋に渡る。

まほひきていづれば舟もはやさきのさとはなみちをへだてゝぞ見る

嶋近くなりて、山の半ばに鷺の群れ居（ぬ）るを見て、

鷺のゐる竹生ふ嶋のたけの葉はなつさへ雪にふすかとぞ見る

姉川の渡り、過にし日越えし流れなれば、

旅ごろも名ごりにぬるゝ姉川やこはおととひもこえしわたりに

竹生嶋にて見し宝物。貝多羅葉の梵網經、小野篁の法華經、菅家の金剛經、かやのから【かやのうら（萱野浦）】の十三仏、空也上人珠数（誤：数珠）、依藤太の太刀、義經の太刀、弁慶が脇指、露の硯、玄象の琵琶のばち、相生竹、白馬の角、天狗の爪。

七日、長浜を出て彦根に至るまで、また詳しく外に記せり。こゝには皆白生が記にしたがふこと左のごとし。

湖に沿ひて、くろさかといふ里に至る。

かしこしなみちある御代にあふみなるたまやゆづらんくろさかのさと

米原といふところより舟に乗りて、葦生しげ（茂）りたる中を行ほど、こなたかなたより舟漕ぎちが（交）へ、やゝ広きところに漕ぎ出れば、竹生嶋は沖に遙かなり。こなたの岸に里の見ゆるを梅がはら【梅ヶ原】といふ。

みねはいま青葉ながらもふもとはなみの花咲梅はらのやま

漕ぎもて行程に、松生たる岡近く見ゆ。やまとだけのみこと（倭建命）のみさゞぎ（陵）造り奉るといふ。程なく大洞に至る。舟より降りて、茶亭に入りて、うみつら（海面）を見れば、彦根なる城、生茂りたる梢を凌ぎて、湖に差し出たるさまいと珍し。

亭を出て、石のきざはし（階）数知らずのぼりて、いみじき御社あり。弁財天を崇め奉る【大洞弁財天】。むかし彦根の城主、人々に仰せて、六十六州の尊き山寺の土を取り持て来て、造り建て給へりとか。傍らなる石碑に、一たび（度）この土地に踏みたらん者は、国々巡り歩きしに等しかりなんといふことを書付く。又のぼりて、新しき御社あり。雨祈るとき出し奉る白き蛇あなりと申す。山をくだり、何某の寺々

拝みて彦根に至る。

外村の翁は此国の人にて、尾張の国に住めり。この度この里のゆかりある所に訪ひ、かつ都え（誤：へ）ものぼらんといふ。やがて帰り会はんよしを契りて別れ出れば、此程の名残とて、切通しの坂もとまで送る。別れに臨みて、

あふみなる名にはたがひてわかるとも行つくさきにまつ
かぜのさと

われら三人切通しの嶺を越え、鳥居本に至る。是より中山道【中山道】にて人よく知れり。白超歌多かれど、記すにいとま（暇）あらず。此ころ日和極まりて、やゝ暑きに耐えず。われ遊観に倦みたれば、何ごとをもえ書留めぬなり。この日醒が井【米原市醒井】に宿る。

八日、疲ること甚だし。藍輿【相輿（あひごし）】をかり、によふく担はれて、洲のまた【墨俣】のはじめ宿りし家に宿る。

九日、白生記云。

朝疾く洲股川【墨俣川（長良川）】を越えんとするとき、雨のさ（颯）と降りきたるに、糞解き騒げば、やがて止めど、空は猶曇りて見ゆ。ある里に、翁二人ものがたりしつゝ行くを聞けば、「今年もなりはひ（生業）はよく、太麦刈り収むるまで日和は続き、まだ刈り残したる小麦はいくばくもあら

ねば、降らば降りなん。降るとても厭（いと）はじ」とて、声高く聞こゆるは、一人の翁耳の疎きにこそ。其人、かく世の中うち続くはめでたしといふ。

をさまれる御代のめぐみとおもふ哉としふとむぎのみのためしを

われは今日も担はれて、申の刻ばかり家に帰る。

ある人あやしみて、「およそ紀行てふもの、みな自己の歌からうた（漢詩）を連ねて、はじめ終りを記せるものなり。この紀の歌は白生に出づ。かゝるためし（例）は有りや」と問ふ。答へて曰く、「蓋しこれ有らん。われ未だこれを見ず。もしそれなくば、これを以て初めとせん。たゞ正体にはあらざるべし。且此記わが遊記を補はんが為なり。ひとり伊吹に専らなるは、葉採る名を慕へり。にはかに後におろそかなるは、あし（足、葦）手倦みたるが故なり」。人の笑ひを顧みるに暇なくなん。

庚子【安永九、一七八〇】城東の石居に於てこれを記す。

「鈴木服跋文」「浅井図南跋文」 凡例

一、「鈴木服跋文」（原文）については、管見では翻刻されたことがない。このことは、原文である漢文に意味が通りにくい箇所があるための判断のようである。ここでは、刈谷本を翻刻したが、漢文の不明な箇所については、仲彰一『視座』の読み下しと勘案したものを示している。

二、「鈴木服跋文」「浅井図南跋文」はともに漢文で書かれたものであるが、本稿では、それを読み下しにした。読み下しにあたっては、仲彰一『視座』を参考にしながら、あらたに読み下しにした。

三、読み下しにあたり、送り仮名については、古典文法に従って歴史的仮名遣いを用いた。

四、読解の便を考え、適宜読み仮名を附した。和語については送り仮名との整合のために歴史的仮名遣いとし、漢語については現代仮名遣いとした。このように、仮名遣いを併用していることに御注意いただきたい。

「鈴木服跋文」（原文）

吾友彰甫先生有乎二絶而断一絶故能辞俗去累居於謝庵望膽吹之山而思登高遂与吾儕二三子往一涉遊而歸吾時不在家及役中之大以不得従為恨忽先生書來致一冊子有図有紀行布置極清尽

之藻致思尽歷觀之情展讀間便覺几案前嶺峰高聳雲氣遊廻是何異于身從先生与二三子目擊而親授之弱足之不抵可以為一勝矣

庚子初秋日 鈴木服書

「鈴木服跋文」

吾が友、彰甫先生、二絶に有りて一絶（いちぜつ）を斷つ。故に能く俗を辞す。累を去り、謝庵に居す。膽吹の山を望みて、登高を思ふ。遂に吾が儕（ともがら）二三子と往（ゆ）きて一たび涉遊して歸る。吾、時に家に在らず。役中の大に及ぶ。以て従ふを得ず。恨と為す。忽ち先生の書來たり。一冊子を致す。図有り、紀行有り。布置（ふち）極めて清なり。之を尽して藻思（そうし）を致し、歷觀（れきかん）の情を尽す。展讀（てんどく）の間、便ち覺ゆ、几案（きあん）前嶺峰高く聳（そび）え、雲氣（うんき）遊廻すると。是れ何ぞ、身を先生に二三子と從ひて目撃するに異ならん。而して親（みづか）ら之れを授けらる。弱足の抵（いた）らざる。以て一勝と為すべし。

庚子初秋日 鈴木服書

「浅井図南跋文」

余が祖先、江北に割拠するの日、世（よよ）胆嶽に祭り、筑

島に禱（いの）る。国破れ宗（みたまや）覆（くつが）へるに及ぶも、其の支庶（ししよ）尚望祭（ぼうさい）す。余、知命（ちめい）の年、京師（けいし）に告歸し、枉（ま）げて路を春照に取り、胆嶽の下を経て、小谷の故墟（こきよ）に哭（こく）し、先塋（せんえい）を長浜に拝す。嶽に登り島に泊らんと欲すと雖（いへど）も、前途尚（なほ）遠く、給暇（きゆうか）日に逼（せま）り、遂に其の志を果たせず。生涯の遺憾（いかん）と謂ふべきかな。庚子の春、幸ひに骸骨（がいこつ）を乞ふを獲て、遊樂（ゆうらく）意に隨ふ。然（しか）り而（しこう）して大馬の齒（よはひ）既に七十有五なり。耳目（じもく）昏憤（こんかい）し、行歩（こうほ）惛然たり。濟勝（さいしょう）の志有りと雖も、濟勝の具無し。徒（いたづ）らに長大息するのみ。一日、謝庵主人なる者、人に託して江山清榮一通を贈る。余、取りて之れを看るに、其の嶽島遊覽記也。欣然（きんぜん）として之れを讀み、日の暮るゝを知らず。図は以て其の概（おもむき）を寫し、記は以て其の細を竭（つく）す。江山の美、匿迹する所無し。人をして恍然（こうぜん）たらしめ、捫羅披葦の想ひ有り。余、登泊を果たさずと雖も、曾（かつ）て其の地を経過し、粗（ぼぼ）其の風景を知る。蓋し図は景より佳く、文は図より佳く、人は文より佳し。一以て之れを貫く。妙は

麴蘖（きくげつ）に在るのみ。彼（か）の諒久は何人ぞ。余より小なること僅かに一年。能く丁壮（ていそう）と相ひ追隨す。真に歆羨（きんせん）すべし。定めて是（これ）酒中の仙者（せんしゃ）也。酒能く老を養ふを、余、諒久に於いて知る。余が性（さが）飲むこと能はず。宜べなるかな、濟勝の具無きことや。然りと雖も、今図を按じ記を読み、平日の不足を償へば、則ち登泊を勞せずして、宛（あた）かも登泊するが如し。何ぞ強ひて濟勝の具を覓（もと）めんや。因りて其の後に題して以て之れを還へす。

七十五叟 勝維寅

三世（さんぜ）の雄図（ゆうと）、故基を余す。栗蔭、徑を擁して歩遅々たり。猿王の妙算（みょうさん）、声援を断つ。神祖（しんそ）の勁兵（けいへい）、險巖（けんき）を奪ふ。大嶽の風は伝ふ、千歳（せんざい）の恨。虎丘の月は照らす、独夫（どくふ）の悲しみ。興亡は古より天命に帰す。道（いふ）こと莫（な）かれ、君臣時を識らずと。

右は小谷懷古の旧作なり。録して謝庵主人に示す。 図南寅

影印・『江山清楽』（部分） 水谷源二郎家蔵本

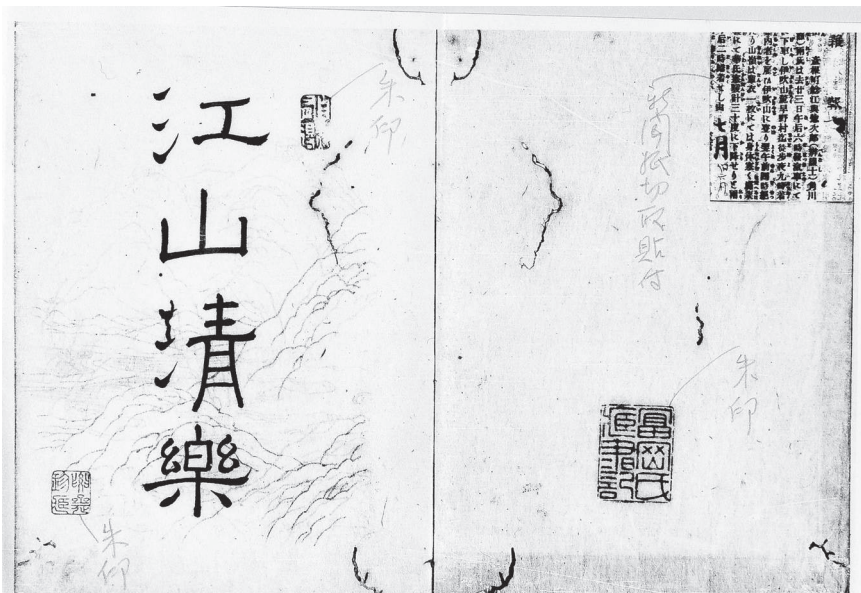
白井超などと名乗っていた頃の菅江真澄が、名古屋の丹羽嘉言らと伊吹山に登り、さらに琵琶湖東部の名所を旅したことは、丹羽嘉言の『江山清楽』に著された。『江山清楽』は、漢文の「湖東游記」と和文（擬古文）の「胆吹遊草」の二編からなる合冊本である。

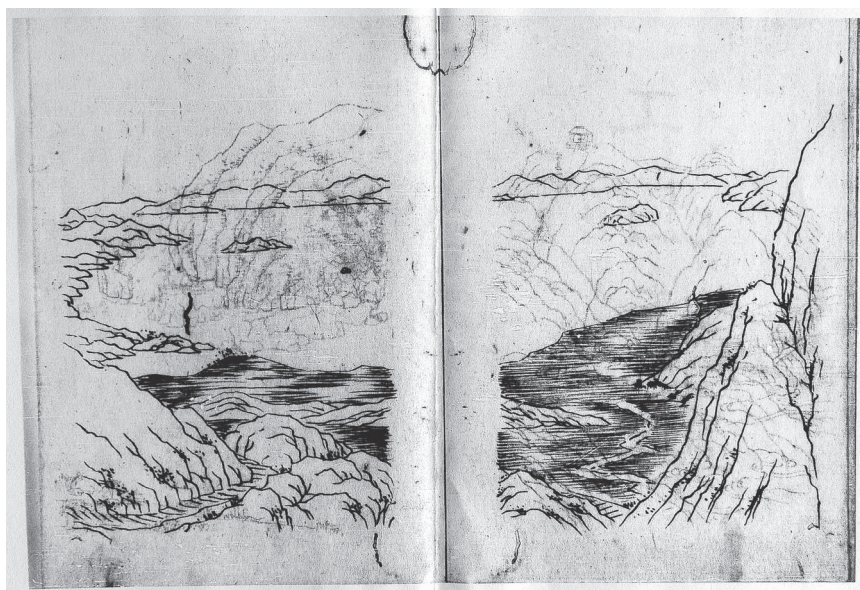
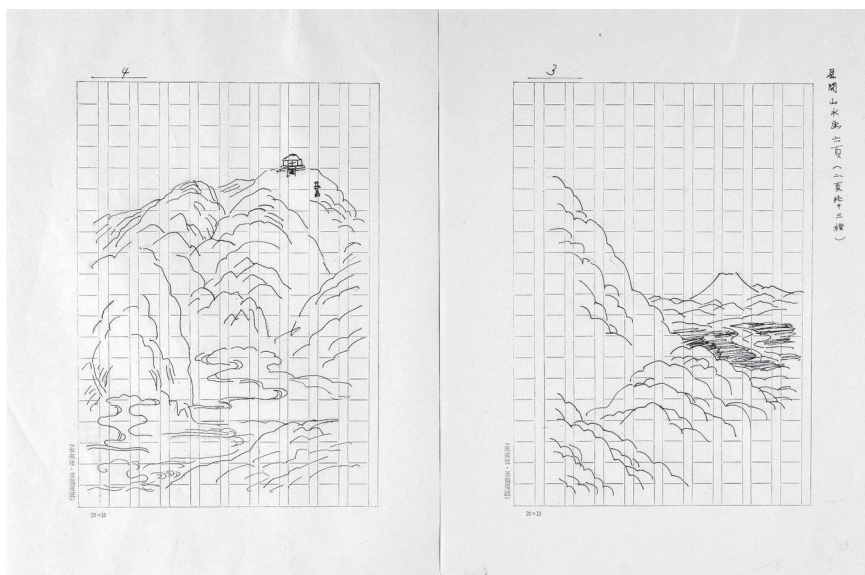
『江山清楽』は現在、刈谷市中央図書館蔵『蓮盧雜鈔』のデジタルアーカイブ（図書館内での閲覧）で確認することができるが、『菅江真澄全集』別巻一の底本となった水谷源二郎家蔵本とは、跋文の位置が異なる。そのため、ここに、内田文庫（当館）に残る写真と原稿用紙の残存を組み合わせて、同書の一部を再現するものである。

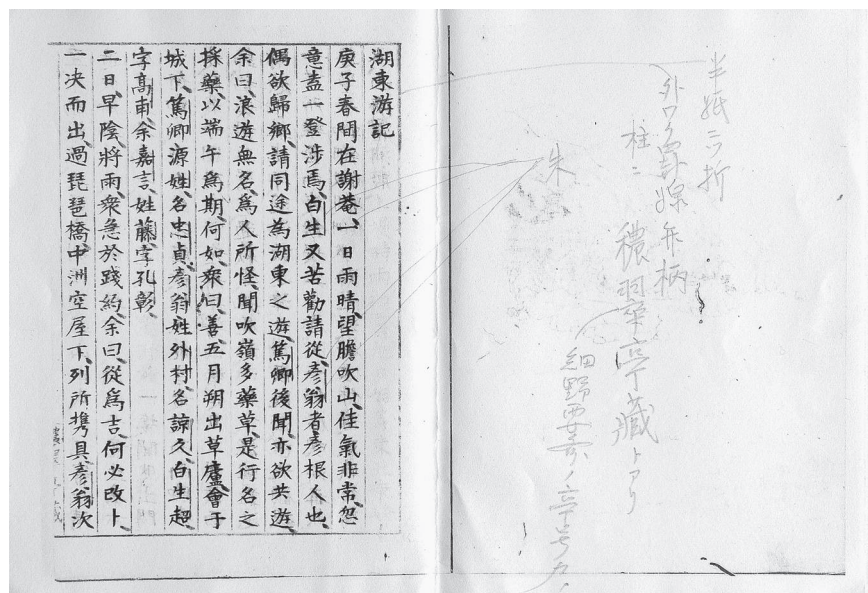
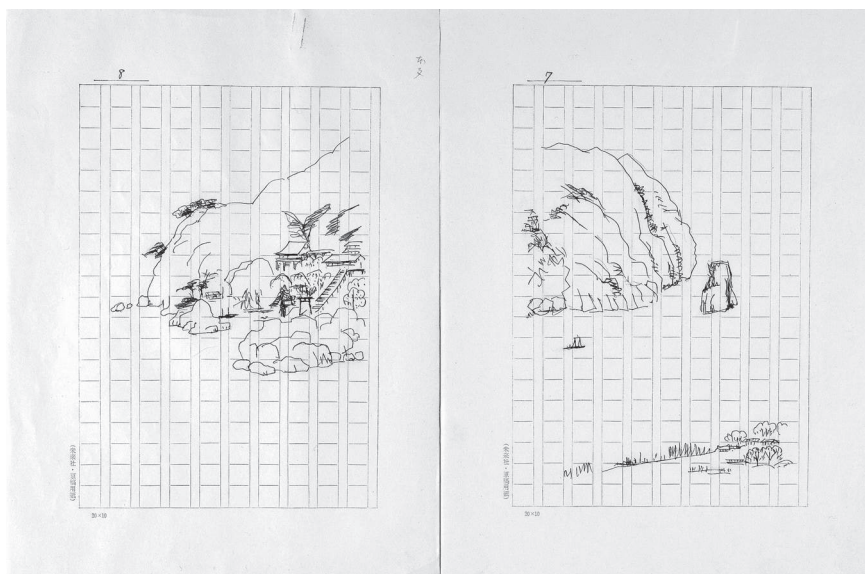
なお、同書は、水谷源二郎氏の逝去後、個人蔵ということもあり、公開はされていない。

凡例

- ・本誌への掲載は、冊子の体裁を示すことを目的としている。
- ・本誌でわかるのは、内表紙、貼付図三図、漢文「湖東游記」冒頭、丹羽嘉言の識語、和文「胆吹遊草」冒頭、浅井図南跋文の後部、筆者（細野要齋）の識語、旧蔵者（富岡鉄斎）の識語である。
- ・資料の体裁に関わる鉛筆書きがある。これは、写真に書かれている。
- ・三図の順番は、原稿用紙（未来社用紙）に附された番号に依る。これは、『蓮盧雜鈔』（前掲）に収められた「江山清楽」に一致する。
- ・本誌への掲載について、関係者の特段の御配慮を得た。







嘉言再識

面がえりてわいさうふいふおの山をさふのりき
 もつねをいといううくねふふふにこふよ
 のゆきちをいふて去月有きのとふんとてふ
 ねきふんといふてふふふふふふふふふふ
 白井領なりとのふふふふふふふふふふふ
 ふふふふふふふふふふふふふふふふふ
 くせんといふふふふふふふふふふふふ
 といふてふふふふふふふふふふふふ
 二日のついで各名座を西ふふふてふふふふ

圖南寅

要齋識

604

影印・丹羽嘉言著『謝庵遺稿』

この度、菅江真澄資料センターでは丹羽嘉言著『謝庵遺稿』を収蔵することになった。同書は、幼少期に嘉言の教えを受けた鈴木胤が、嘉言の遺稿をまとめて享和二年（一八〇二）に出版したものである。

本書の真澄研究における価値は、別稿の「内田武志における丹羽嘉言論の形成―真澄若年期の名乗の解明過程―」で詳述したとおりである。真澄の若年期、名古屋における学問の有り様を考察するには、『謝庵遺稿』は論証の一つになっていた。

『菅江真澄全集』別巻一では概略は示されているものの、全体像を含めた本文が示されたことはなかった。当館が所蔵する内田文庫に、その写真や複写などが見当たらないことから、内田武志も入手することができなかったものであろう。

今後の真澄研究に資するため、全頁を影印として示すことにしたい。

菅江真澄（白井秀超）に係る部分については、別稿の中で取り上げているので、参照していただきたい。

版本の体裁は、次の通りである。

全三十丁。うち、小伝・序文二丁、本文二十八丁。

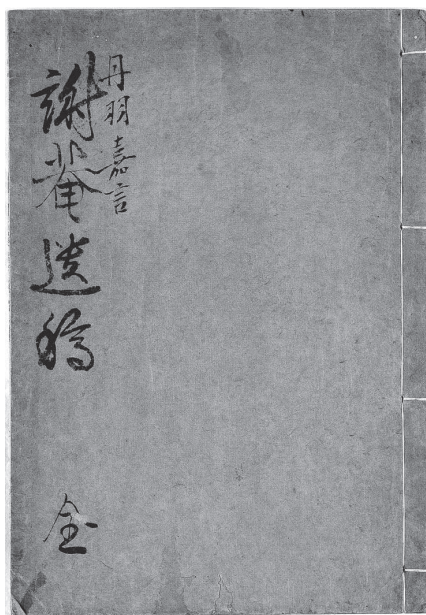
見開き二丁二十行の罫紙である。

柱には、小伝・序文では「謝菴遺稿序傳 丁数 鈴木氏蔵」。

本文では「謝菴遺稿 丁数 鈴木氏蔵」とある。

冊子は、23・2×16・0のいわゆる半紙本、明朝綴である。

表紙については、福岡大学図書館のデジタルアーカイブによると、「謝菴遺稿」と書かれた複郭の題簽が附されているが、本資料は、後人による墨書きである。



表紙

藤嘉言字彰甫丹羽氏稱新治常臣於本藩竹中氏
後致仕祝髮稱童甫自幼好讀書善畫山水壯年不娶
性清介寡慾唯嗜酒或時講劍檢以養壯氣嘗遊東山
般若臺參雲卧禪師機相投如舊識及父沒其故居處
闕遺產千金皆付近族某不顧而結茅於禪師之側號
謝菴獨居自炊購一切經藏貯之而以公父為功德
主焉又創亭於高處名清閑後又做蘇子瞻擇勝亭造
一小室內開李笠翁所謂尺幅窓巖上水邊隨意遷移
到處描其景色為屏間畫城中知交相識載酒往訪則
共遊賞極歡或靜坐閱藏經時就禪師談禪其山居之

謝菴遺稿序
適如此而畫筆天然清雅者因以益進醉中作尤妙亦
州內一畸人也惜乎天不假之年於天明丙午歲四十
五而沒初彰甫欲寫富士山之真以明和庚寅四月往
徘徊山麓者數日傳其皎麗雄峻之神而歸興到便畫
人爭寶焉彰甫畫傳諸後世有具服者自能辨其巧拙
但其為人知之者年以月減行將泯沒也因述其大略
如此

寬政庚申十月

八十翁神谷元等齊卿

右神谷翁所為彰甫小傳大抵盡之矣翁有澤識善
鑒定古器書畫所藏皆多且精而尤好畫其於今人

獨寶池無名及彰甫二子畫山水以為絕俗彰甫嘗
比諸鍾期之知音而曰使此翁死余亦破硯絕筆哉
然彰甫少翁二十年而早沒余以文字與彰甫交者
十餘年其年相距猶彰甫於翁也少小時受其提撕
居多又盡出其藏書借讀余因得以希負廣覽居數
歲推獎過當許以忘年友自彰甫沒於今十六年無
後其遺蹟散在人間未有集者余就其族人搜得謝
菴醉筆醒筆等三數卷率諸謔自恣以適己入格者
少畧采擇之得記七首題自畫九首題跋十
首說一首漫筆十三首序引四首文二首

讀一首 書三首 論二首 韻語二十七首 九

七十九首雖不多亦足以觀其人矣嘗以示神谷翁謀拜之而翁亦竟死矣余窮甚不辭辦一絲諸嘗與彰甫以文事相識余所知者無幾皆請助焉以成是列是舉也徒以交友之誼懷舊之情云爾傳與不傳任世人而已

享和辛酉十二月

鈴木朗叔清識

謝菴遺稿

謝庵記

尾張藤嘉言彰甫著

吾友有謝菴者今已謝世矣吾更號謝菴豈無佳名何必取於友也夫謝世者大謝而天也人不得而取捨焉予比年與雲卧老師往來嘗構草亭於其山上榜曰清閑今歲葺茅屋於其西而移居焉鄙意在謝塵死故友懶與予同生前自號亦不過此意誰意其身大謝而予襲用之謝菴謝世而謝庵不絕猶在世也予猶在世而謝人事猶謝世也今且小謝究竟大謝後之與予同趣者亦將有感于斯庵且夫終始代謝環復其本者天之

道也眇乎屬於人逆天不祥代謝者如斯而未嘗代謝也斯是謝庵隨化而無盡人而天者也名莫大焉豈徒取於故友故友賀州金澤人姓勝本名章字叔明安永丙申季秋尾張藤嘉言書於城東之般若臺

清閑亭記

一日清閑一日仙世傳呂仙之詩也予生懶惰有似閑者安自謂有仙骨坡翁云江山風月無常主閑者便是主人予又愛此語嘗以遊觀為事到處傲然乘興忘歸甲午之春春服既成同二三子遊東郊登般若臺謁雲卧老師其地雖踈林平岡而清淨閑寂亦難多得盤桓

盡日意有所慕焉後與橫伯宜謀構草亭於其山之高原蓋城外數里而優於眺望者莫若此間亭對坤位正南則智多一郡遠浦際雲所謂野間內海星嶺喚續濱皆在莽蒼之中稍西連勢海帆影出沒潮光明麗遙岑如屏障瞻映樹間者曰冠山曰三國類曰多度山疊々山勢漸北而盡更穹窿欲起者伊吹山也亭之東至榛校山林岡平遠一望無際北瞻木曾之御嶽巔常有雪隔一大濃州巍然南面可謂山之王矣御嶽之東而大者為橫長嶽其西北則賀越名山層々競秀四望佳景遠者百里近者十數里皆來效奇於前每良辰美景予

來為王俯仰放情瞬視適意時訪老師聽其說法月根已清徹眼界又潔淨漸覺佛門之廣大而般若之甚深也一旦有感謝人事移居此際於是虛心奉佛見聞彌新舊緣日消所謂仙骨傲骨者變為一副枯骨矣吾復何言惟所建孤亭初意名曰清閑不得不記其所由也世之高人逸士逍遙于此領畧清趣者便是地上神仙不疑于呂仙之詩其不高不逸懶惰如予者有時息于此亭被清風一吹塵心天外散去則眼下江山亦極樂國土哉願讀此記者莫怪於吾言皆共成佛道

般若記

嘉言效響邇胤造一小室所謂縱橫十尺搬運兩車結構之巧不讓古人匠人藤義知之所為也既成門名於客曰長明之邇也寄于和歌管絃今予為何事曰般若無為與名朽乎蓬廬之居也創于日笠山中今予止何處曰般若臺上垂化止乎然則何不以般若名之曰可哉吾固欲以搬移之義遂名曰般若室紛之多義寓乎一字名亦室之寶也哉

石居記

戊戌十月繪石于室八於是名石居石居記見其頑然視之則石察之則八于室四壁之內曰室何以四壁

繪石居士自比也居士之比奈何子曰石無知之物也居士之於世碌碌無能退居此室般若禪元坐共畫石九九者數之極也居士自謂無知無能於己極矣石居之名當不虛傳者唯其頑己石居一名般若室自有般若室記

無事室記

有物于無者今日是也有物則有事人情苦物之不足而惡事之煩苟能知足省事則二者皆免吾以今日之事不減昨日唯恐明日之事增于今日所惡日新所苦月進瑞皇老人有憂于此是歲謝事務老子此室雖先今日之身然能無事于有者瑞老是也是以名無事

室且因其先人之舊號云

重修清閑亭記

古人云一日清閑一日仙蓋謂得仙非難得閑不易也予既以清閑名亭隨分證仙者多年于茲是歲春間亭壞亦已矣何必更作惟予山居三年友人時屢訪問不俾予專主此亭於是復囑匠人福二者重修故趾刈麥以茅之志成而會者神谷齊卿大野瑞星山田有年白井秀越皆喜得半日閑吐飲言之言飲適量之酒欣然盡歡而別時安永八年五月十五日也予素賒韻語是日偶得四句云梅雨新晴舉世醒山翁更醉茅茅亭四

簾依舊邀明月長飲潮光對遠汀併記以俟識者笑云

合道石記

般若老師縱步般若臺下得瑰石一枚藏蔭中時出示人其石不甚奇大如駢拳黃白色白理纏之似二而一者曰是名君臣合道父子同體而屬子作之記予解曰夫石言子晉而子野之言歸于諫是為君子能言此石不甚奇而使子強言凡強言之弊非安則綺矣綺語妄言為佛所戒吾亦深耻之雖然著石之有奇不如吾人之亡也豈非師欲託石之小奇以示道之大常者耶夫道者一而已矣分而為教君臣父子者教之始也合道

同體者歸一之謂也世教歸一然而國不治天下不平者未之有也昔馬鳴謂儒尊者汝所說吾盡破尊者即言當今天下太平大王長壽國土豐樂無諸災患馬鳴然不知所言今師所為示人者亦不過尊者遺意則余固辭實為無謂矣於是敢言極贊合道或曰如是之法佛祖密付今子顯言者何也曰今之石不能言余代石言也其得之者見石即得見本即得何待子言彼未得者雖聖言佛言日夜盈耳而如聾如啞與水石何異雖然竺道生之說法也頑石為之點頭余今代石言盡欲使後世說法者聽之點頭也以此復老師請先點頭

自老師始

題自畫九首

淵明之清高也著琴而無絲謝養之懶惰也有湯而無茶世俗謂不法狂妄者亦為無茶嘉言懼焉安與白湯自警曰寧使湯無茶不可人無法徒慕清高懶惰廢事可不戒我謝庵閑野晝如夜夜如夢夢時偶如覺日清閑以寂滅養浩然之氣樂在其中但未敢免筆墨業障聊書所苦以遺知音云謝庵物奇而畫奇非畫之奇也物不奇而畫不奇不足觀也物不奇而畫奇實畫之奇也物奇而畫不奇謂之不知羞耻也富士山

者天下之大奇也予固不欲畫之而今畫之者何也蓋曰非敢畫富士也欲畫世之所謂畫富士者於是有駿州之行縱觀數日深服其奇予技拙劣有慙於山但藉山之奇以小奇於世之畫富士則所願云爾富士元坐磐磧畫興鬱勃予懶于素紙墨素頭所有隨筆揮霍借地為雪者陳腐舊法一變擅奇闕然現其赤心謂之本來面目者非耶紅箋上以鼎慶吊不為盡知言之本者適可而止君子必取焉未也澆漓歌哭如醉固無論于俗輩也唯有遊藝之士自是一種雅調以紙筆慶生祝壽者單呼為賀有同技之人以技相會退而共

師友之死謂之追善。今夫歲時不急，勤於追善者，皆是吹彈歌舞子弟也。日月相期，唯賀是務者，乃在詩文書畫偶雅之士。予每怪少年子弟，偏遠偶雅先生，偏賀壽，竊謂慶生當以歌舞，弔死當以詩文。試一為顛倒，則民德歸厚矣。雖然，生乎斯世而出斯言，予之愚也。且子素無他技，不事作畫，為朋友所知。彼責祝壽者，日來相迫，固知生前我不暇于慶，而後後無人肯弔我。我也於是乎製此圖，豫弔我五百年。思併以祝我千秋萬歲。龜鶴而佛燈，將吉祥山為死為生，而不生不死，而不死不死。比於我無量壽佛。吾友天遊神谷先生，不喜苟慶弔者。

今似諸先生，亦所以慶弔先生也。書龜鶴佛燈圖後 吾國位東方，洲島山岳之奇秀不一，而其光明正大神妙不測者，富士為最。富士國音與不死及不盡同。或云山頂有不死藥，世俗為祝壽畫富士者，良有以也。余謂山之有富士，猶人之有神仙，而佛之有阿彌陀也。阿彌陀此云無量壽，無量壽者，豈有盡乎？盡長生不死而最大者也。畢氏之翁，以橫幅請畫富士於余。余諾而未果。日逝時過翁，以病終。余悲悔自責，揮淚作此圖，以贈其子修甫。且告曰：昔西行上人有言，吾之詠歌一首，與造佛像，誦真言者同。余慕上入之道，而不能詠歌，生乎潑墨，竊

比諸寫經畫像者，蓋效上人之贊也。今貌東海名山，稱西方教主，雖不及祝壽，請以作佛事。修甫喜，急命裱裝。供之周忌法筵。余恐為拘泥吉凶于神佛者，所怪聊記其由。為畢氏作 太平之民，有何識知百年陰陽化中而不為魚者？幾希矣。嘉言隱巷小人人中，魚蝦一世，醉泥三餘，甘粉噫亦蠢矣。唯以父祖之陰，輟猶未圓，活潑乎以屬於人，又何幸也。是日為先考追福，佛事同族相集，余深感四恩，無量無邊無盡者，聊畫所懷題所畫，以付家姪教昌，申之以言曰：我曹頑民，當以安分忍苦正其心，而修其身，安忍之効，視世如水，自他平等，無有遷

際悠然相忘于江湖者，不亦樂乎？教昌須知之。庚子年二月廿五日。筆戲圖興 余嘗醉中讀大蘇集畫馬贊，不勝喜躍，急舉筆作四馬圖，自以為大有生氣，及醒索畫，茫無所見，蓋非醉之為夢，則畫之脫化者，隱亦幻矣。今集飛走名蹟，唯於馬不寫其形，特書坡公贊，併及往時醉迹，是為神逸圖。夫名畫不可遽得，妙文足以傳神。既見者亦將無論于北牡驪黃，畫亦止上焉。書畫心畫也 古人既言又云：畫亦心畫也。然則書畫惟一心，心外無別法。今刻畫譜，蓋刻心也。覽者印心，皆為知心，豈止從知音於一世哉。題畫

謝履遺稿 八 銘物出識 題修父畫卷後

世之文人輕視畫者自以其文為文也夫既以文為文則與以畫為畫小技自喜何異若夫以文為畫以畫為文者所謂詩之無聲而文之為畫祖也吾既不欲以文為文以畫為畫又不能以文為畫以畫為文且吾之不喜言文與畫久矣吾友修父弄筆作文人之畫欲吾有言吾今於文與畫不知其為何物但知修父月

書木謝庵祝壽寶珠圖後

勝木謝庵嘗會飲于予生辰醉後戲作此圖為壽時甚寓于平安今已十餘年矣其人物故畫與予如舊偶展

圖不堪懷愴遂取大白祝且自傾故友幽魂猶善飲乎吾其與爾同醉昔時所以慶予者予今以弔之尺幅一顆寶珠將弄于歌哭也

請雪齋鳴門泄潮圖後

十年以前在平安日知今城蕪山於容所源先生之所先生蕪山皆阿波人嘗誇其地鳴門之勝兼山曰本邦山海之壯觀殊絕于異域者唯駿之富士與吾鳴門耳生長茲土者不可以不遊覽也予愕其言質諸先生先生曰其言則是也而其人未曾遊覽矣予不喜蕪山之夸口欲折之而苦無術予又嘗怪世之畫富士者筆墨

相受習而不察山之真景豈如是乎意欲為山雪寬庚寅四月多旅裝到駿河州飽觀連日親寓數幅雖如新意奈手腕頑劣不足以盡真景唯極口贊富士以親見詩蕪山以為得意安料是時蕪山與其鄉友鎌田雪齋數人既遊鳴門復歸平安李口倍于前日又屬雪齋作圖贈予大書曰酬富士以鳴門其圖精巧十倍于吾畫富士於是乎吾不復敢言畫又不敢論遊退而與吾徒之頑者喫濁酒三碗冥然一睡而已忽憶雪齋何人能寫出鳴門壯觀之如此也其意蓋與予同而十指實超過于予吾不斯人與飲而誰與飲自是不疑鳴

門之奇夢魂常遊于飛鳥者六年于茲往歲五月客於平安始見雪齋於今城氏如舊相識是日快飲笑語論畫論遊大慰平生雪齋自言累年遊鳴門其最奇者在騎飛鳥時洵濤奔雷筆舌皆不及但意如有得前圖兒戲耳他日改寫相贈予大喜別而東歸又一年雪齋不食前言經營一掃遙寄于我曰意猶未滿有負名勝呼雪齋其語愈識其藝愈進使予對此圖一喜一懼鳴門得雪齋一洗舊污使吾卧遊清新是可喜但吾畫富士對此圖則頓失顏色見畫而不見真者將謂為三國第一拙山是所懼也余於富士見其真於鳴門見其真

謝處道集
吾之觀止矣。聊書于卷末。以期後日。示雪齋與蕙山。丁酉夏五嘉言識

書西邨清狂謝庵移居圖後

古有移居圖。予欲竊比。請老友清狂先生。圖作此卷。先生筆意新奇。墨韻飄逸。固非俗工之所及也。但藍輿中人。服飾非常。我耶人耶。不知者或謂村左。衛門出遊。圖予懼于斯矣。裱裝成識于其末

題某君歌詞後

嘉言始得某君歌詞。惕然自省。奮然自勵。且勵其徒曰。吾既率爾而言。得仙非難。得閑不易。今而後深知其家

不易矣。夫月日之於聲色。四枝之於安逸。人之情也。豈有意獨不樂閑者乎。於是市井無賴。遊手好閑。小人閑居。無所不至。惟知貪形外之閑。而未能閑其內。是故好閑者。不閑于求閑。而小人閑居。忙於不善。皆非吾之所謂閑者也。某君節儉正直。眾所具瞻。拮据鞅掌。勞於邦事。而退食之餘。有如是閑文。蓋君子閑雅之致。不禁流暢筆下者。意匠天然。不假斧鑿。真可飲羨。我吾儕懶散為贅於世。亦已甚矣。近歲拙林下。日欲宴過。奈筆墨業障未除。對山看雲。動則呈醜。令仰清雅之風。覺我形穢。雖然。不敢自棄。深發憾悔。不復効小人厭然之態。書坐

右以戒曰。文之閑。不在境之閑。自今莫貪安閑

跋芥舟癡聃法師北山一夏州

享保年間。荒木癡聃棲止此山。草此記。癡聃以善書擅名一世。吾未知其文若是也。偶見此篇。如得異寶。蓋癡聃為人本不陋。好尚亦高。可知名一藝者。志不在藝矣。予山居三年。多得奇文。亦似有宿緣。今手抄一本。遺源黎獻氏。若有以補癡聃之名於一世者。幸其時安永八年秋七月。書于般若臺之謝庵

題清狂糟百春平安遊興畫卷

客歲春。從清狂老人遊平安。余有疾先歸。清狂獨留五

旬。東遊西蕩。日伴酒與畫。到處命筆。圖成身如泥。盡遊矣。又盡興也。歸後運思重圖。所醉凡十幅。自秘藏。不輕示人。余偶見其稿本。以告神谷齊卿。齊卿素有愛畫癖。即携酒與綸。訪清狂而索畫。清狂不得辭。四閱月方卒業。清狂老人生平之奇。視此圖可見矣。余嘗謂起趙狂雲于今之世者。舍清老其誰也。齊卿鑒賞。一時無比。亦深許吾言。又一月。裝潢成。齊卿持卷過謝庵。屬余題識。余每懷舊遊。常恨不果從清狂。今展此圖。而得卧遊平安。遠興幽趣。領畧既多。不啻從其遊也。則吾恨釋矣。漫筆數言。聊識其由。云安永己亥秋七月

題湖東遊記後

陳仁錫有言游山水如睡卧記述如作夢當其夢時好醜皆夢一經改竄情事倍佳無乃非昔夢耶斯言是也唯余遊草愈改愈妄夢而更作夢矣至其議論橫出唐突不顧則何異寐語覽者莫怪幸甚

書墨竹卷後

園南先生門人多作墨竹者時月會集輪流揮寫遠慕文蘊遺風近倣平安名家初先生在予安日與宮筠園先生諸君稱四竹既而三竹物故先生獨挺然于吾鄉是以門人之從事此君於先生惟日不足而先生之諒

人也老益不倦可謂盛矣此卷成于瑞星大野氏席上既而瑞星欲次之以松石亟請於余國辭曰凡畫卷衆人作一物如此卷尤可衆人作衆物亦可或一人作一物作衆物皆無不可而獨於衆人作一物後更一人作異物者大不可也蓋嫌于非詩已長則掩其所短余之不能事墨君瑞星所知余又不敢恃所長以殿諸君也因以鄙言附其後聊塞所責云庚子八月嘉言書于般若臺之謝菴

題清狂中秋閑泛圖

中秋閑泛圖酒友清狂為田有年所作寓得舟人入神

其餘則狂老本色唯水與月佳甚昔人云君子之狂出於神小人之狂縱於德今觀清狂於此圖則儼然君子哉有年宜愛重嘉言書

愛憎蚊文說

丁酉六月曬書之次披清少納言枕書至憎蚊一節愛其言簡意至早有豹脚翩翹眉睫間一如其言當初清氏豫知後數百歲有蚊與人如今日而下筆成斯文予今玩斯文而後知數百年前蚊之擾人同今日又知自今以後數百千歲有蚊與人一如今日而斯文之終不亡也李笠翁云蚊之為物也體極柔而性極勇形極微

而機極詐擇地而攻乘虛以入昆蟲庶類之善用兵法者莫過于蚊是言盡蚊矣假使予為蚊子將避三舍於笠翁古人弄筆見景生情逢場作戲以可惱可憎之蚊變做可笑可愛之文既以自娛又娛我後人蚊子雖微物亦與有力于斯文者豈可憎哉於是理殘帙撲蠹魚嗟嘆獨語不知蚊既飽我脣斑然

漫論雜記十三首

孫虞學右軍書而孫虞截然倪黃學北苑畫而倪黃殊別皆師其意而不師其迹唐人學柳下惠是已然孔子所善在智若夫忽於期至善而唯誇不讓其為者寸之

偏也。於智有間。予欲學書畫。而顯止於智。

嘗聞鈴木叔清七八歲時。謂狸。為佛菩薩類。雖有人笑且諭者。而固執不從。蓋因見佛像圍暈中。收入狸。月後稍。讀書而知其非。亦以自笑。今年十四。知見開發聰敏。莫及者。但懼英氣太過。還以佛菩薩為狸。類。予近來一心奉佛。猶未能戒酒。何吾銳根也。童謠有之。君這樣飲酒不已。想是變做狸。的。意思。予且自懼學佛不成。反類狸。丁酉孟秋。曠書之。次披覽佛傳圖。不禁失笑。戲書以寄叔清。希望叔清更一笑之。膽欲大而心欲小。古之至言也。膽大者。視菩薩如美人。

愛之好之。寤寐求之。德既為菩薩。雖有溺者。寡矣。膽小者。望美人如菩薩。唯願顧我。唯願救我。美人雖美。不免為人彼此感應。終成不美矣。人心惟危。竊恐世殆多敬美人者也。道心惟微。未見好菩薩如好色者也。子夏言賢。賢易色。今有以善薩易美人者。雖曰未學。吾必謂之學矣。或曰。戲言狎侮。善薩罪亦大哉。對曰。罪我者。必知我言者也。戲與不戲。存乎其人。且吾聞之。佛原眾生。彼眾生也。我眾生也。世尊我大宗師也。菩薩豈欺我哉。我膽如斯。願細心看我心。吾無隱乎人。

未下筆時。意在筆先。雖然紙全紙墨全墨。筆意邪正。紙

墨不省。一染墨落紙。而醜美無所隱矣。豈不愧乎。鑒藏家明于此。是故不事吮筆。取於人以自適。良有故也。山林之士。不欲出世者。猶賞鑒家之於書畫也。不惟知取之深。亦善用寸之道也。

一日讀楞嚴。至離即離。非是即非。即之句。不禁喜躍。舉體欲飛。蓋深感其不可言而能言。不可說而能說者。文理之巧妙。足以壓諸子百家矣。佛法多門。方便廣大。今復何論。

冬夜微醉。隱几而瞑。有一人咳而當前。舉目審之。顏面酷肖于予。呀然失笑曰。心友終不可得。偶有貌友來。

不亦樂乎。其人正色曰。汝勿戲言。吾欲規汝。汝傲氣日長。不知抑損。汝五六歲時。從父拜跪佛前。眼含淚。鼻引涕。唯庭訓是懼。誠篤之狀堪憐。今求諸汝。無半點似者。汝知見小。發誠實大。散將言三世。茫然佛不足深信。吾是以不得不規汝。言訖無所見。予醒然而覺。曰。昔宗岱著無鬼論。鬼見而岱亡。我佛高眼慈心。現身說法於吾未著無佛論之前。嗚呼。生我者父母。知我者我佛。豈不奉教乎。念佛數遍。九頓首而後就寢。

古之學者。有以三餘吾之作畫。以三。中。曰。醉中。山中。夜中。夜中者。三更而後。醒然危坐。萬緣寂靜。神遊異境。於

是運筆何患不生動餘二中皆有待夜中則無待而常有唯懶惰貪睡日：昏然畫之所以不成也

有好雙陸者日與羣小交吟五喝六許些酒錢常歎曰吾之技所由來久矣其始為閨閣之玩今則為無賴之業時乎技之衰也余曰非技之衰而利心之盛也夫詩文書畫藝之上者李世乃放於利而行而藝或病是故欲藝之清者不如不售慕雙陸之雅者不如不賭今夫不賭之雙陸與無弦之琴無餌之釣同趣高致莫如焉何其技之衰之有

賭刻鼠於猫則脯質者贏猫豈能鑒其巧拙別其肖否

者哉世之逐臭趨利不知真實人而猫者也故君子之遊藝自適而已其以畫有求于世者動務於脯質而忽於真巧亦其勢然也獨輞川一派寥々幽趣無意于酷肖又不至動猫心謂之文人遊藝固可也謂之以畫說法亦無不可也

畫家常言石看三面樹分四枝或云以造化為師者直寫所視何問三面與四枝也不知直寫所視而當視之時不看三面不分四枝則不成視而不成畫矣然則學者須先學視法視法如何假有一樹枝之突前者或流于右左出者或逃于後環而視之東面如斯而南面不

如斯西北面亦爾所視已精時真目思是樹東望如何西望如何南北四維望之如何忽然飛昇下視樹梢其狀如何仰卧盤根上觀雲霄如何化為小禽還轉于枝間所見如何數者無疑自答明白纔為盡樹形樹形既盡乃盡樹性而後下筆於是筆研紙墨不知為何物落眼前者雖粗實精臂腕方且與造化友又何問師與誤以此言之非徒畫者難視者亦不易也吾今論之而未敢為然願用此法普視萬事萬物不獨繪事也

酒令之屬有獅子之戲其法圓坐數人虛擬舞曲或鼓或笛或小鼓三線諸樂器皆手摸口吟舞獅子者合西

掌象其口舉弄翩々忽然奪笛占鼓唯意所欲鼓笛眾器為獅所奪者隨即代舉遲緩則罰獅之移貴迅速使人眩惑其精妙者眼如電意如風瞬息迫人而不被人眩予嘗交臂於其間始笛而不省獅之來先受罰一盃既而為獅子瞬睨得意不欲遷移奇態百出眾皆笑徐而取鼓鐘々數聲興未矣安知還轉再四之笛之線又早及我也於是浮以大白

開以下

余讀歐陽公送徐無黨南歸序范然半日念佛數遍公之言曰欲摧其盛氣而勉其思也余如有所恐也曰亦以自警焉余如有所慕焉嗟乎為佛毆我者歐陽公我

不染居士曰。逍遙物外。還樂吾廬。善哉居士之言乎。三萬六千日。不能不由斯道也。死者如可作也。吾與居士歸乎。

繹譯名義集抄本序

本國之於支那。支那之於西域也。譬如今日之於近古。近古之於古昔也。是故讀異域之書者。必以繹譯。亦猶學古者。必從訓詁也。訓詁之家。世不乏人。支竺諸賢。繹譯悉備。此土先哲。讀法亦至矣。吾輩識字知讀法。日讀其書。而不通古今。不達世務者。吾之不才也。比年閑居。專閱佛經。唯願寡過。或誦或寫。意在報佛恩。偶披覽繹

譯名義集。深感古賢垂慈。更手抄成冊。以遺後之讀佛經者。夫讀經而求解。所以有此舉也。若夫豪傑之士。一趨直入。如來藏。則無始劫來之訓詁。三千大千之名義。不待舊譯。一時盡晰。豈惟通支竺而已哉。安永八年春二月。尾張藤嘉言書于城東之石居。

海東異錄序

叔清生十歲。無文不讀。無讀不解。人皆異之。余曰。是宿業之不能忘者。又何足怪。夫識字誦文。且鈍根而能哉。以彼聰明。未能解脫于前世。而改而生乎今日。其實可愧矣。雖然。生死事大。非口頭可論。能隔世誦文者。世幾

希。有人之異焉。不亦宜乎。叔清今十六。讀書餘暇。戲筆錄怪異。或本野史。或出見聞。其文可觀。余漫加評語。以示一二同志。叔清自忘其異。唯物異是求。適所以為異也。余不知怪之。又從而譏之。未免為儒者所怪。後世知怪之怪者。莫怪余言可也。安永八年秋七月。書于尾張城東謝菴。

訂古文真寶引

世有古文真寶後集者。文真可寶。選寶未精。特以名文之故。其書三四百年名於天下。文之靈可貴哉。如讀孟嘗君傳。列傳類。粗細可笑。但其過如此。亦足以觀異域

之言矣。今文華日新。名家精選日新。於是古文之名。難守真寶之集。漸廢。至于今日。人無顧者。價莫賤焉。然不賤者。竟不賤。集中諸篇。是已一日有村學先生。請訂古文真寶。余曰。近日還本不為少。何必事真寶。然求其文至貴。其名至顯。而其價至賤者。皆不及此集。則先生之舉。最為達時務。誰謂先生迂腐。於是對校一過。改正編目。併辭言贈之。亦不過各寶所寶耳。庚子正月。

生老病集序

五倫樂五常者。蓋天地本性之道。四門厭四苦者。亦今古同情之教。偌大宇宙。見成世界。不過如是耳。余生乎

市不樂市，從來懶散厭常，頑固難辭，然每見世人樂常而致苦，不厭苦而逐樂，力不給而仆者，未嘗不咨嗟殞殞，而畏懼戒慎也。夫可思議者，始可思議，不可思議者，終不可思議。余十五志學，疑乎不可思議者，今四十而大感次之，以疾病，偶值賤辰，忽感所生，於是聚親族于先人之故宅，請舊識，邀新知，快飲一場，洗心淨身，誠盡前非，欲寡後過，此會名生老病集，言幸未死也。安永十辛夏四月，尾張城下彰南藤嘉言書于楞嚴堂。

告蠅文

己亥六月，石居：士手攜一壺，一酒壺於清閑亭，告滿

山蠅蟲曰：汝蠅：者冥頑無知，亦固其性，豈足責乎？夫惟含生之類，各死之情，萬靈一意，是故搖枝求汝，則汝如枝偶墜者，螻蛄而行，汝生平樹：死乎？汝近日蠶食殊暴，枯松相望于山：家待落葉舉烟者，不喜汝之生，惟木槁是懼，有訴汝于地，主者懸金之令，忽下，百文買汝六升，細民逐利，老弱奔走，亦可憫哉！吾亦痛恨樹之槁，而不忍獲汝：已有生，吾知汝之若死矣，今以吾之知投汝之無知，而強使知之，汝速嘗齠化，為蝴蝶，翩四散，相忘于園林者，是吾所祈，而造物之所不辭也。三日不能至，五日不能至，七日不能至，是終不能

化也不能化者，吾之智窮矣，不如吾先自化，於是香消酒盡，居士既醉，軒息釀，睡以至暮。

祭源駕卿文

維安永十年歲次辛丑二月十九日，尾張丹羽嘉言謹以清酌庶羞之奠，告于已友駕源先生之靈，曰：嗚呼！哀哉！先生生前與予同醉，或醒時相規諫，雖未及莫逆，亦非泛：平交，今忽然長往矣，猶獨醒者也，愧予醉語咕囁，自哀，哀人益亦愚矣。予之愚固無補，先生先生之泣如不言而責予：有自省焉，茲陳愚衷，撫棺永訣，嗚呼哀哉，尚饗。

讀神國神字辨論

予讀神國神字辨論，知異域無有，而本國獨有者固多，是本國之所以為本國，而異于異域者也。夫春花者天下皆有，而本國自有一種櫻花，而花色最可愛，國人單稱花獨花，此花者花榮極矣，神靈者天下皆有，而本國自有明神，而神靈最可敬，國人單稱神獨神，此神者神德盛矣，異域有天狗，而此土所稱另是一種天狗，禹昂逸怪相傳已久，世以為僧之有學而驕慢者所變，古人有馭識，而近日所爭另是一種諠譁，非馬子非舟子，粗言惡語，信：相吠，所謂高聲每勝者，吾未如其為何道。

而世俗目以為博識雄辯元祿以來諸家學者誼譁甚矣夫神明與櫻花吾之所欲播諸異域也天狗與誼譁吾之所深為本國恥者也若夫神代字者假令古有而不行于今猶異域科斗文耳吾輩且要知羞恥莫論其有無可也

與叔清論其文書三首

四十七人者非報讐遂成君事者耳是言精確不可改矣全篇及覆責良雄君臣一無所容足下今年十六發如是大議論當時所罕見可謂卓絕一世矣惟所惜于足下立意有似深刻者不料愚散告足下審之夫人得

于古書言于今日而非于事者是誰之過豈必書非乎豈必事非乎蓋必言者非也合書而非事者無往不窮合事而非書者不知羞恥今之學者要知羞恥又要不窮固非易事但於讀書之後臨事之前情量一番其有非謬者不如且無言待吾情合古今而後發言屬文未為遲矣古書本平人情今事亦出于情同一情而難合者時勢異也如水結於冬也豈凝于水乎見冰者吾已吾情渙然猶東風解冰也足下英才非無情量持凝情于古已是故持論之際不覺發大道閉塞云々之嘆惡是何言也夫良雄之舉雖不必合經典而不得謂義士

四十七士求義而得義求死而得死亦何壯也縱使良雄等實知所論不忠不義無足言者既千萬人忠之義之因是奮起勉勵鼓舞踴躍者至今愈甚一心注處洗百年耳目勸懲之功莫大焉亦何拘陳迹於是傳奇歌詠公然行於天下義士後嗣顯然仕於諸侯刑正義伸兩不相乘是謂大道足下所謂大道者僕未達然閉塞于今者其竟不可開由不可開之道何日得通是道最遠于情矣僕歸山日過神谷齊卿畧稱足下之言齊卿亦賞足下夙成不止且云非報讐者當初良雄亦自知其言傳記可證足下知之否論良雄者固不可不知也

僕深畏足下才力亦惜議論不本乎情敢盡言致愚忠唯祈海量終無所窮足下文章理明于內氣塞于外蘇子由曰文不可以學而能氣可以養而致僕以為與氣周旋始有可觀縱使心鏡明徹遍照十方氣滯胸中者終不能自運矣昔孟子文雄于千古其言曰我善養吾浩然之氣足下日食古文滿腹古氣與浩氣不相容宜乎其文如刻畫而與世背馳僕深惜焉放言敢伸萬望有擇僕乃惜於足下者郁：文理徒陳腐胸中而不能自發所以有前書也昨從令兄得尚書亮典首段釋義始知

足下所養亦自有法僕實多言前書愧而今無遺憾矣夫生人通弊其大者有三曰貪曰瞋曰癡因此演法浩蕩一撰出一大佛藏而至今日世之相弊相拯無已也足下之言曰君子立言達法必見世之通弊而急拯之有旨哉足下沉默繫繫近日之弊倉然提督古之義以醒後儒之迷者是亦君子急拯之遺意而佛菩薩救世手段亦豈外此乎足下莫與觀視佛固與足下同者如其譬佛猶自難也僕為此言亦欲拯世間不達佛理而相疾之已甚者然不免粗人賦等三四朝暮究竟無益僕今將不言唯願足下儒雅自任佛理又明生

涯有大著述而使後世無異議足下圖之母忽

施經不立顧文論二首

馮濟川居士作施經顧文曰予之施經一事而具二施何故以財贖經是謂財施以經傳法是謂法施按佛兩義財施後世當得天上人間福德之報法施當得世智辯聰蓋眾之報當知此二報皆是輪迴之因苦報之本我今發願一回此二報臨命終時莊嚴往生極樂世界嘉言曰居士明知二報為輪迴苦本而好行二施且四二報以願悟無生忍登不退階入菩薩位是為貪餽也貪餽者古錢買小鍋既而反之曰向付錢今付鍋合直

附登處篇

二六 金木水火

二首當得一大鍋買者豈肯許我居士之願陳諸正人君子之前固不可行也唯有佛菩薩具一種無量無邊國圖摸糊沒分曉的大慈悲心於世間凡夫嬌癡慳貪可惡可笑者偏垂悲憫常要濟度猶父母鍾愛於癡兒也然則居士之貪餽亦佛之本願後來成佛何疑之有但詳其文一事料二施二施意二報二報却不受以此因望極樂是市道也烏有佛道者哉此等伎倆常為儒者所嗤亦世間如居士者之過也嘉言墮入他力法門一信如來本願問嘗購內典六千三百三十卷本有意遍覽知不可驟得盡數遺棄則老師為小堂以藏之且

安先人牌位其內是舉為先人捨施則有之為微軀祈福報疑於難行難修則他力門徒所不為吾亦深恥之若夫深知嘉言者與全不知者並無所言矣知之粗者或將比之濟川居士吾不可以不辨

或勸予作施經顧文嗟吾何願將以願國土豐樂無諸災患乎是普天下之通願也人之願之久矣又何更願將以願一切眾生悉皆成佛乎當初法藏比丘浩願塞于沙界已成正覺使我等是疑凡心安如泰山者皆出如來之恩賜未能報之何暇更為眾生願乎然眾生非他物佛本眾生我亦眾生之一我聞一人悟真心大地

附登處篇

二六 金木水火

善化真如當知心佛及衆生是三無差別也然則令之
俯仰兩問者全然他力後之往生蓮坐者豈越本願人
能一信至此所見所聞莫非願力不思誠乘願而來乘
願而去終日在願中亦何更願且予之施經上謝四恩
下供縱觀而已若夫藉口佛說故冀菩薩之佑以
空言立願文者大丈夫恥之嘉言亦恥之

韻語二十八首

人心魚服似怪秉夷洋之性海波瀾多奇
靜觀平視蠢動皆靈解水盤礴自得忘形
釀之野叟作者清狂格制俱醉人盡兩忘枕邊泥酒筆

下夢長是時不寐埋沒高陽
已亥六月十七日

實福壽何辭
瑞池春宴食嘴小兒醉花飽

笠翁窓殘月供圖畫推移聽化工
松下清泉

冷古稱沒夏年今知人世熱消滅白雲邊
羽

觴飛夢裡雲外子規呼醉起望殘月晨光不負吾
羽

擾人清閑
山亭元潔淨月色上塔新洒掃任風雨從來不

早涼似秋風
山居

時靜坐盡葉竟類然同
三萬六千盃自傾多一半

身同漉酒中何怪風前散同
蛸之夢始醒棚之遊

堪樂晴日訪閑簷似憐吾落魄
不問吹落帽

箭笠更飄然筆下驚童子阿呀入半天
老

松緣城聞青野獨魁梧但惜水霜貧堪書茶大夫
青野

待問奇人
十月醒顏日遲之似暮春臨池神不旺有

指鐵成金手豈足深羨乎吾欲奪其柄貪癡且昏愚
西行行不息

至淨土何疑餘力著歌詠在東方最奇
西

城東日暮白雲邊綠樹風前耐醉眠夢裡常瞻靈鷲會

醒時獨笑野狐禪孤燈將滅迎山月陋室微明達海天
山居

莫道人間清夜短三盃盡處不知年
山居

德竟無鄰君子愛蓮擬古人斜月三星穿沼小
山居

地開窓尺幅躬花新亭淨植祥雲暮欽清狂暴雨
上同

晨綠葉為杯燕傲益泥邊被酒底全身
上同

月嘯清風簌簌狂歌對大空萬古清塵炎熱苦
上同

盡一杯中山
上同

紅坐忘水盡今如昔鼓腹熙熙與未窮
上同

清閑亭上寄頑軀滿目青山同畫圖山色是空是色
上同

不求形似學倪迂
上同

謝菴遺稿

愈人喧郭公歸去黃昏後敲着秧雞月下門隱暑
有鳥聲呼郭公郭公無答夏山空唯看綠樹陰深處
半醉頑夫在夢中夏日訪三十年前運筆新近來
塗抹污天真不知八法元何物拘掣使能老此身時所
醉後東山驛路老經過憶舊遊行沂陸河述者
如斯時興水清流不敵潁湖波舊過陸河堤懷病後
老前樽散身槎牙數筆自傳真三冬倚石呈奇骨弘智
上人終有鄰古題自畫

真澄研究 二十号

平成二十八年三月二十五日発行

編集・発行

秋田県立博物館

菅江真澄資料センター

〒〇一〇〇二二四

秋田市金足鳩崎字後山五二